はじめに

私たちは、東京南部地域の労働組合運動の記録を残そうと、二〇一二年六月に「**私が歩んだ労働組合運動編集委員会**」を結成し、まずは品川、目黒で活躍した方々より聞き取り方式での記録を取りました。そして、一九四五年の敗戦と同時に活動を始めた品川の市川平八さんと小野均さん、および一九五〇年代末～六〇年代に目黒の運動に加わった遠藤日出男氏、橋口博氏の聞き取りの報告を発表することになりました。

聞き取りの方法は、本人に質疑して作成した文書を、数度にわたり、本人の追加・訂正を含め、数回の往復の上、報告としたものです。そして、品川のお二人に対する聞き取りは、戦前戦後を通して、育ちや活動した背景が分かるように、生いたちからお話しいただきました。

戦後の労働組合の闘いについては、運動史や個別の取り組み、大原社研の産別会議の結成、活動についての中央幹部の方々の聞き取りなど、多くの出版物があります。しかし、企業別組合を組織の特徴としているわが国の労働組合の運動は、単産組織・中央組織を見ても、現場の運動との繋がりが見えていない部分が多々あります。

労働、生活の場である地域での運動は、労働者と労働組合の意識や運動を直接表したものとなっています。その点から言えば、両面を合わせて見ていかないと、とりわけ運動の再建が叫ばれている現在、もっとも大切なことと思われます。

戦後すぐから品川の運動に参加し、指導した市川・小野両氏のお話を見ても、また目黒の場合には、戦後すぐの時期に地域で活躍した方を見出すことが出来ませんでしたが、遠藤・橋口両氏の五〇年代末から六〇年代以降のお話を見ても、職場、地域での取り組み状況などを理解する上でも貴重なものではないかと思います。とくに、遠藤氏の報告は、一時期左派の運動を大いに盛り上げた、個人加盟の産業別地域組織の先駆けとなった全金目黒地域支部の結成や活動に関するものです。

「**会**」としては、地域の労働組合運動を担った方々の貴重な経験を語り継ぐ場として、聞き取り活動に参加いただくことをお願い致します。

市川　平八さん

《略歴》

一九二六年二月生まれ
一九四三年三月　川崎市立工業学校卒
一九四三年四月　株式会社東京鈑金機械製作入社。設計、製図工（一九四五年一〇月退社）
一九四五年一二月　小高スプリング製作所入社（一九四九年四月退社）

《主な運動歴》

一九四六年～四八年　小高スプリング労組副委員長
一九四七年～四九年　品川労連執行委員
一九四八年～四九年　全日本産別会議全日本機器労組東京支部、小高製作所分会執行委員長
一九四九年～五七年　品川労連常任書記
一九五七年～九五年　品川労協常任書記（六〇年～オルグ団長）
（この間　全金品川地域支部特別執行委員、品川商業一般書記長歴任）
一九九五年～　品川労協顧問
労働組合実務便覧」（後に労働組合事典に）の執筆

一　戦前の一こま

一戦前の品川のことで思い出すことは？

市川　東海道の出口で、東京に入る入り口で、品川と言うのは要路ですからね。当時の警視庁は、首都を守ると言うか、皇居を守るのが本分だったからね。そういう意味で、こんな狭い品川に警察署が大井警察、品川警察、荏原警察、大崎警察の四つもあるんですよ。大企業では、三菱系で測距儀とか、潜水艦の潜望鏡とかそういうものを作っていた日本光学、あのあたりは大変な所で、戦車を作っていた三菱重工の大井工場（当時は日本重工）等があったんですよ。隣保館というのがありまして、今で言う民生委員みたいな活動をしていた。子供の養育でき

ないから預けるとか、困窮している人たちの救済の措置を含めた活動、いや施設だと思うんですよね。そんなことを我々も、見たり聞いたりしてね、ガキの頃だから細かいことは分からなかったんだけど、ああいうのがあったんだなというのは記憶にあるんですよ。

―目黒川の工場の状況は？

市川　目黒川の淵をずうっと使って、それで埋め立てをして海岸地区を作って、最初の頃は海運で目黒川の岸に工場を作っていった。だから結局、三共製薬とか、明治ゴムとか、日本ペイントだとかの化学工場、水を使って排水するというのと、船便で荷を揚げる。石炭とか、原材料とかを工場に上げるのに便利だというのでね。船着場がありましたからね。

―町工場の職人の状況は？

市川　職人は、今で言う請負の賃金でね。むしろ請負賃金を求めたんですよ。「腕でこい」式の意識が強かった。だから仕事、仕掛け、どういう段取りで仕事しているかという、まあ、自分で開拓した、あるいは自分の先輩に教わった、秘蔵の段取りだということでね。仕事を終わって帰るときには、ちゃんとカバー掛けて他人に見られないようにして帰る。そういうようなことを見たり、聞いたりしましたよ。

―戦前の労働組合運動で品川は右派の総同盟の拠点のひとつでしたが？

市川　私が子供の頃、古い人から川崎のエントツ事件や当時荏原製作所でストライキがあったことを聞いていますよ。何時まで品川にあったのか、私の記憶はないんですが、今の荏原製作所との関係はわかんないけど、要求が「出征家族にも給料払え、生活を保障しろ」と言うもので、すぐに弾圧されなかった。明電舎の大崎工場があったところだという風に聞いているよ。明電舎というのは、大崎駅に近いほうじゃなくて、品川工場って言ってた。今の新幹線に沿った方ね。今は自動車練習所みたいになっちゃっているよ。

　私らが労働組合を作るという話で集まって話をしていると「昔、うんぬん」という格好で年配の人が話してたと言うのを耳にしたということもあるんです。聞いたときには、うがった話だなとは思ったんですが、弾圧されない要求を掲げたというのはね。だけど、どなたかリーダーがいて、そんなことが、私らよりも前の人たちがここでの運動をやっていたというのはね。

　戦前は、加藤勘十とか松岡駒吉が活躍していた。松岡駒吉は、大井の庚（かのえ）町（現在の西大井）に住んでいた。だから私より大人は結構そういう影響を受けて

いる。私の叔父なんかも、東芝の労働者だったんだけど、引き出しを開けたら総同盟のバッチがあった。「おお、なんだこれ」と言ったら、「バカ、そんなのだめだよ、外へ持って行っちゃ、おまわりさんにつかまっちゃう」「どうして」と言ったら「いや、大きくならないと分からない。いいんだ、いいんだ」と、後になって成る程、と思ったけれど。品川の共産党も「党史」を作るんで、古い人たちの話を集めて、作っているということを聞きましたよ。戦後の労働組合については、「市川が書いたのがあるから、非常に細かく書いてあるから参考になる」みたいなことが書いてあるって。

―学校を卒業した頃はどんな状況だったんですか？

市川　学校卒業のころは、学業を離れて、男も女も関係なしにそれぞれの軍事工場へ派遣をされる情勢になっていたんです。今の川崎球場の前は、富士見公園だったんですよ。それが高射砲陣地なんです。憲兵隊の分隊が駐屯していて、分隊所が表に立っていたんです。そのようなことで、昭和の一七年頃ですよ。みんなあのころ学校へ行っていた人たちは、みんな勤労奉仕に駆り出され始めた。

―就職した東京鈑金製作所はどのような企業でしたか？

市川　軍需関係でした。スタートの時は、プレス機械とかシャーリングマシンやベベルマシン関係です。ですから平時の場合は、船舶と航空機の関係の仕事で、戦時になると軍需工場になった。

B二九がくるようになってからは、例えばね、高射砲の弾が届かないんで、弾を届くようにするにはもっと強い火薬を入れられる薬きょうにしなければならない。その薬きょうを作るための機械を作る。薬きょうは、真鍮でできている。真鍮は、材料も枯渇しているし、強い火薬を使うと、出ない内に中で割れちゃうという危険がある。従来のではだめだと、急遽もっと高度な作成能力のある機械を作らなければだめだと、即戦力になるような技術者を必要としていた。

私らが駆け出しで、見習いということで、部分的な設計の仕事をやっていた。先輩たちは、しょっちゅう海軍工廠や陸軍工廠とかに行くんですわ。何で行くかというと、改良の図面をもらいに行ったり、作った図面を持っていって打ち合わせに行ったりすることをやっていた。たまに、「ついてきたまえ」と言われてついて行くと、「この図面を写してくれ」とか、キャビネット、写真のキャビネット版（ドイツのワインダルデン社製）のものを持ってきて、「これを仕事にできるように図面をこさえてく

れ」と言われた。従業員は、そのときは、第四工場まであって二〇〇名ほどで、設計室は一五名程度だった。

―東京鈑金製作所はどこにあったんですか？

市川　大田区の大倉陶園と道を挟んで向かい側で、東洋オーチスエレベーターと線路をはさんで反対側ですよ。今のＪＲ線路を跨いでずっと六郷土手まで行くと、雑色という駅があった。線路をはさんでこっち側が東京鈑金なんです。線路から見ると、こっち側の裏手に大倉陶園があった。今その陶器がすごく価値があるんだよ。お皿だってウン万円するんだから。

空襲で焼けたでしょう。所帯を持っている連中は、「それ」と持ってきちゃうんですよ。こちらは「そんなもの、冗談じゃないよ」と重いものを持つのがいやだから。炊事、洗濯など、そんなことしたくもない方だから見向きもしなかった。焼け残りが一杯あったあの辺で焼け跡暮らししていた人は、あんなもので煮炊きしていて、後で大変なもので煮炊きしていたと思うんだけど、大倉陶園と言って、今でも有名ですよ。

そういう状況で、工業学校卒ですから、どちらかというと即戦力になる。職場に入ったのは見習いで、年配者が応召されはじめて、うんと年配かうんと若いかの職場になっていた。そこで最初に「昇格させる」という話があったのに、いつまでたっても昇格の話がなくて、「面白くねえ」ってんで「遊びに行っちゃおう」と多摩川公園へ行ってたんで、職場が空っぽになっちゃった。技師長とか主任しか居ないので、「これは大変だ」と騒ぎになってしまったらしい。会社の交換手に電話したら「大騒ぎになってるよ」と言われた。

翌日出ていったら一人づつ呼ばれて、「お前ら何を考えているんだ。憲兵隊に引き渡されるぞ」とかなんとか脅かされた。それで「約束が違う、いつまでたっても身分が変わらない、約束を果たしてくれないじゃないか」「何時からという具体的な話もなくて」という不満をみんなが訴えた。身分が違うとは、飯を食う所が違うんだよ、それからもちろん給料も違う。そうしたら「分かった」ということで一律に昇格した。雇員になると白い線が入った帽子になって任官になったということで、軍需工場へ行くと、黄色が判任官で、兵隊の位で言うと下士官の下の兵長クラスということです。

―職場での待遇は？

市川　待遇は悪くないですよ。雇員になってから月給は、大学を出た人の普通の軍関係の三十才台の前半位の人の賃金と、私ら小僧っ子の賃金と、そんなに違わない。だから最終、終戦間際には一五〇円くらいもらったんです

よ。労務課の係長が「やっぱり技術屋さんはいいね」と、普通で今では労務課の係長ならかなりでしょう。だからあのころは技能者と言うか、技術者は確かに優遇されていたことは事実だよ。今言ったように、こんな状態で格差があって、技術屋さんが、私みたいな右も左もわかんないのが飛び込んできて、こんな調子で居られるなんて格差があるんだな、やっぱり違うんだなと思ったんですよね。

一戦争の進行、悲惨な空襲の襲来は？

市川　B二九がどんどん来るようになって、今考えれば、当時でも「アメリカンマシナリー」「アメリカンマスミスト」資本主義なんだね、カタログみたいな本で潜水艦などみんな出ている発行物を見ていた。アメリカと戦争しているのに、アメリカの武器を見ていたわけだ。当時の日本の戦車ね、ノモンハン事件とかあって話題になっていた。ところが、日本の戦車は全部ソ満国境から引き揚げて来ちゃっていた。今考えれば不可侵条約があって、宣戦布告していなかったから、ソ連は攻めてこないだろうと高を括っていたんだと思う。内地決戦に向けて、おそらく引き揚げて来てたと思う。その戦車は、アメリカの戦車とは全然問題にならなかった。ソ満国境を渡るのには戦車は軽くなくてはいけないと、装甲板も薄い。「アメリカンマシナリー」で見ていたアメリカの戦車の正面装甲板は一〇〇ミリ、普通日本の戦車の装甲板は二五ミリ、戦車と戦車がぶつかったらイチコロだったんだよ。こんな武器しかないんだ、われわれのような末端の、一番ペイペイでもそんなこと分かっていたんだよ。だから、すごく恐ろしいことをやっていたんですよ。それが、私にとって仕事を通じての、職場を通じての戦争の実態と言うか、裏面の理解だったんですよ。

一「デモクラシー」と言う言葉もアメリカの文献で知ったとのことですが？

市川　それまでデモクラシーのデの字も知らなかった訳だから、「デモクラシーとは」との解説記事を見てさ、「ええ、これ」と言うことで分かったですよ。あの頃、そういうものを書いてあるのをちょっと見た。「こんなの見たなんて、外へ行って言うんじゃねえぞ」と先輩に言われ、「ああ、そうですか」と言ったら、「そんなことを言ったら大変なことになっからな」と言われた。私は、子供の頃大変な問題、二・二六事件を経験している。あの時、駅では、大人が「甘粕大尉を救いましょう」と運動していた。甘粕大尉とは二・二六事件の首謀者の一人でしょう。それを救えと言う運動、署名運動を大人がやってい

るのを見聞していた。だからなんとなく「そういうことだ」と感じていたんですよ。

―第一回目の空襲（一九四三年四月一八日）がありましたね、そのとき品川は？

市川　第一回目の空襲の時、品川もかなりやられた。大崎の国鉄被服所だとか、東海寺の墓石には弾痕があって、これは東海寺を狙ってきたんじゃなくて、結局近くの工場に脅かしで機関砲を打ち込んできたんだ。

目黒川をはさんで工場なんかがいくつかありまして、今では日本ペイントがあるけど、昔だと明治ゴムだとかがありまして。目黒川の淵には工場がありまして、中目黒からあったでしょう、そういう関係で狙ってきたんだと言うが、一つは「もう俺たちはいつでも日本本土を空爆できるんだ。早いところ手を上げないとひどい目を見せるぞ」と言う警告だったと思うんだ。そういうのを体験してびっくりしたんですけど。それを見て私の職場の先輩は、「アメリカの飛行機だ」と、技師たちは飛行機の関係もやっていましたからね。しかもアメリカの武器のカタログ、仕様書のついたのを見ていた訳だから。日本の飛行機は分からなくても、技師連中は、「おう、あれはノースアメリカンだ」と言っていた。

今、平和委員会の人たちは「爆撃機のB一七とかが最初に来たんだ」と、そんなことないよ、あの当時の航空母艦の甲板を滑って空に上がれない、重量があるから、かなりの距離を取らないとね。日本の文献か、どこの資料を参考にして話をしたのか分からないけど。ことほど左様に、日本国民に対する知識を目隠し、「見ざる、言わざる、聞かざる」にしていたのが、あれ一つを見ても分かったですね。

それで私も「これはちょっと怪しいぞ」と思ったからね。年配の労働者が「これは正に敗戦国の様相だぞ」と言い出した。「何で」って聞いたら、「俺は戦争に行って、占領してこうだった」と聞いた。「そうか敗戦国の・・」と言ったら、足を踏んづけやがって、「やたらに外へ行って、そういうこと言っちゃだめだ」と言われた。大体職場の環境と言うんですか、仕事を通じて戦争の実態と言うか、彼我の武器の違いとか、工業力、国力の違いと言うのをね。非常に些細な知識だったけれども、他の人よりも分かる条件のところに幸か不幸か、居たんです。

―本格的空襲での印象に残っていることは？

市川　伊東の教育隊で訓練を受けていたときに空襲があって、池上線のホームの後ろくらいにあった大黒ハウスというアパートだったけど、帰ったら壊されちゃって、駅

の近くだったから、隣組が動員されてね。立ち退きだと言うので、先輩の口利きで横浜に下宿しました。空襲はしょっちゅうでしたよ。

伊東の訓練は、昭和二〇年三月から四月にかけてで、三月の本所深川の大空襲のときは、東京のほうが真っ赤だった。これは大変だ、「こんなところでオイッチニ、オイッチニやっていないで帰らせてもらおうじゃないか」と言っていたら、全員整列させられて「お前たちはここで訓練を受け終わるのがお前たちの任務だ、余計な心配しなくていい」と往復ビンタを食らった。

蒲田の大空襲のときは、当直で会社に居たんです。みんなでポンプを回して用水池から水をあげ、シュウシュウ始めたら、ホースの前を持っていたやつが「出ねえぞ」って言うんだ。「あれ」と思ったらホースがグズグズ赤く燃えているんだよ。そう、ホースは布でしょう。「これはだめだから逃げなきゃだめだ」とやっと逃げた。行った防空壕なんか満員だよ。途中で破裂した破片にあったって怪我をした女の人がいた。私たちと一緒に逃げりゃいいのに、彼氏がいたらしくて「彼氏がいないと逃げない」と言ってた。夜が明けてみたら、結構やばい負傷をしたり、亡くなっている人がいたよ。さあ今度は、帰るのに苦労した。帰るには、六郷の鉄橋渡るんだよ。あれはかったるいんだよ。枕木だけで歩幅と違うんだよ。あの鉄橋を端から端まで渡るの大変だったよ。それで、生麦まで帰ったら横浜市電があって、保土ヶ谷駅終点の電車で、それに乗って帰った。下宿に着くと、下宿の人たちが「良かったね。よく帰ってきたね」と迎えてくれた。この経験が一番の思い出ですよ。

当時、私の先輩で、招集で横浜部隊に所属していた人がいてね。「遊びに来いよ」と言うんで行ったことがあるが、民間の家を借り上げていた。その空襲で横浜部隊が全滅したんじゃないかと思うんです。関内を除いて周りは全部やられた。昭和二〇年四月には大田区の矢口のところですよ。会社が社宅にしようと買ってあった家があって、それを使ってくださいというんで、所帯を持ってる人と独身者とそれぞれ相談して入った。それはもう、横浜で空襲くってからね、ここにいてもだめだ、そんなら近いところがいいと思って、また蒲田へ移ってきた。

二、敗戦、そして初めての組合作り

一戦争が終わった時は？

市川　それで終戦を迎えた。会社が早速全従業員を集めて、「お前は残れ」「お前さんはご苦労さん」という仕分け

があった。私なんかは、会社が技能者に養成するのに金をかけているから、「お前さん辞めていい」とは言わない。それでなくともどこへでも行ける人は、ほとんどみんな「田舎へ帰れ」とか、「行き場がなくても知らない。戦争に負けたんだから」という式にみんなが仕分けられた。それで見たら、もう蒲田の工場も焼けちゃってるし、再建するなんてちょっと簡単にできない、マッカーサーも財閥を解体するという方針を出している。私は、もうこの際、「これから一生焼け跡の会社に縛られるんじゃやだな」と思っていたんです。これはもうだめだということで。ところが「辞めます」というと、雰囲気として「勝手に辞めさせない」と言う事になる。そこで「会社へ行かないことに限る」とおじさんの所へ転がり込んで様子を見ていた。ところが、月給がちゃんと出たんですよ。「月給を取りに来てください」と、二ヶ月間は無届でもくれるんですよね。そういうことになっているんですよ。だから財閥系の会社の社員は優遇されていたんですね。一〇月まで月給もらってた。遊び人だから。銀座へコーヒー飲みに行ったら当時五円だったんです。一杯のコーヒーが五円ですよ。久しぶりのコーヒーだったから、うまかったね。

とにかく、一〇月いや一応年内は正月までは、少し戦争の垢を落としてりゃいいやと、毎日裏の船着場から伝馬（てんま船）を漕いで散歩に出かけるのよ。北品川の海に出るちょっと淵に、海軍経理学校というのがあったとこに、占領軍が駐屯していた。ところが、彼らはなんか知らないけれど、員数合わせなんだね。なんでも海にぶっこむ。あいつらは倉庫からかっぱらったものを街で売り歩いた。タバコだとかは街にないでしょう。それで小遣いにして遊んでいたんですね。員数が合わなくなると火をつけるんで火事になるんですよ。それを繰り返していた。「よく経理学校の跡で火事があるね」と周りでは言っていた。本当のところはそれなんですよ。ちょっと余ったものや、形があるとまずいから海にぶん投げた。舟を漕いでいくと、その投げられたのがプカプカ浮いてるのを引き上げて、うちに戻っておばちゃんに「進駐軍がぶん投げたメリケン粉みたいなもので、食えるかどうか見てよ」とおばちゃんに言ったら、フライパンで焼いたらパンが出来て「パン粉だよ」というんで、近所にも配って喜ばれたりしてね。そんで少しぶらぶら遊んで、年じゅう音楽会に行ったりして、たまたま従妹が踊り子をやっていたんで、浅草に出ているとか、今日は新宿に

出ているとか言うんで、「それじゃあ見にいくべえ」などと遊んでいたんですよ。

若旦那ということで威張っていて、いつまでも遊んでいてもしょうがねえと思っていたら、たまたま従兄妹の亭主が行っている鈴達電機という小さな会社で、組合を作ろうじゃないかと言う話があった。そこの場合は、直接の要求のために組合を作るんじゃなくて「、組合を作んなきゃだめだ」という話になって。そんな話を従兄妹の亭主から聞いてね。「どうもなんだか分からない」というから「実はこうなんだ」と言ったら、従兄妹の亭主が「伯父さんがやっていたと言うのを見たり、聞いたりして割合知っているようだ」と俺を紹介した。そして「組合を作るのなら規約が必要だ」と言われたことを報告した。「そういうものを誰か持ってねえか」と言う話をしていたら、かつての総同盟時代の組合の規約を持っているというのがいた。

持ってきた規約を見て「いいんじゃねえか」と言うことになったが、その規約を見たら、かなり古いやつで、組合長とか、総務局とかになってたけど、それなりに写して、旗揚げしたのが第一陣なんですよ。その時まだ労組法が施行されていなかったから、ただマッカーサーの方の極東委員会の方で「労働組合を作らせなければだめだ」と言うことで、一六原則が出されていたのを知っていたので、「じゃあこれで行けばいいんだ」と言う訳で、「もし会社がグズグズ言ったら、お前たちは極東委員会に歯向かうのか」と会社側に言えば、「会社側が震え上がって、手を出せねえ筈だ」と言う知恵を付けたんだよ。それを従兄妹の亭主が得意顔で言ったら「、そんじゃ、それでいこう」つうことでね。おれ自身だって知識があったわけではないですから、大雑把に極東委員会の一六原則を金科玉条にして、半分知ったかぶりでやっただけですよ。

一小高スプリング入社の経過は？

市川　そうこうしているうちに、いつまでも進駐軍の捨てたものを拾って遊んでいたんじゃしょうがねえからつうんで、一〇月までは月給くれたからね。後はもうお金も入らないから、小遣いもなくなる。いくらおじさんのところでも、タダで飯食っているわけにもいかないから、それなりの食い扶持を渡していた。だから仕事に就かなきゃと思って、ちょっとしたきっかけで話があって、友達に「あそこで仕事の出来るやつを探しているよ」ってんで、そんで南品川の小高スプリングに入ったんです。会社はいったん閉めて継続をしていなかったんじゃないかな。一二月に入っていたのに、採用が翌年の四月なん

かになっていたから。だから健康保険とかそういうものは四月からなんだ。混沌とした時代だから、いい加減なことで暮らしていたし、普通にまともに暮らしててもこうなんですよ。

年が明けてから少しづつ動き出したんだけど、戦後間もなくというので、ほとんどなにをやったらいいかわからず、結局、工場でもって、ナベ・カマをこさえて労働者が売りに歩くとかは、あくる年からだ。戦争が終わった年は、みんなボーとしていたからね。仕事についている人というのは、さっき言ったように私みたいに、継続していたような会社の社員とか、従業員は居たんでしょうけど、うんと少なくなっていた。リストラなんてもんじゃなく、否応なしなんだからね。

―空襲の影響は？

市川　あの辺は、空襲は無かった。旧東海道、ほとんど北品川の八つ山よりのところが少し焼けたくらいで、旧道沿いはずうっと古い女郎家のあとも残っていた。毎日通ると「お兄さん、寄ってらっしゃい」と呼ばれた。「寄ってらっしゃいたって、お前んちの裏にいるんだから寄ってられるか」てなもんで、売春禁止法が出来るまであそこにあったからね。戦前、北品川から南品川、目黒側の淵まであったですよ。今はほとんど無いけど。その後、埋め立てに寄ったところに芸者の置屋とか、いわゆる三業地というのがあったけど。

―小高スプリングの組合は、入ってすぐですか？

市川　小高スプリングに入って若い連中と仲良くなったら「我々の要求をやろうよ」と言うので、「我々の要求ってなんだ」と言ったら、「賃上げをやりたい」と言うから「いきなり賃上げなんかと言ったらこりゃやばいからな、もう一寸と様子を見ようや」と言うことで、一月にそんな話が出て、三月に何時でも旗を揚げようぅんで、非公然の組合を作ったんですよ。そうしたらね、前の工場で「組合を作ったって言うけど、俺の処にも作ろうと思うんだけど、一寸来て教えてくれねえか」て言われ、行って「こうやったんだよ」って、話をしたらそこでも組合を作ってね。

そして、自動車関係の仕事をやっていた。車両とか自動車のパーツの注文を受けてやるのが主体だったんだ。その他一般の製造なんだけれど、技術的には車両の関係と自動車の関係。だから自動車のエンジンやクラッチ、電車でも台車のばねとパンタグラフのポール。そういうものを作ってましたよ。全自動車の連中が、「お前の所も組合作れよ」ってな話が出たから、「いや、実はあるんだよ」と言ったら、「全自動車に入れよ」と言われた。

そんなことになっている中で、要求がつっぱしちゃって、結局、まあ「五割賃上げ、三ケ月の遡及、差額は一時金で」をやるんだと。会社は「賃上げの五割はとてもじゃないけど」と三割賃上げくらい、いったかな、それと遡及は一ケ月半位だったかな、というのはインフレだからね。もう追いつかないんだよ。それで公然と旗を揚げたのは秋になってから、私が副委員長でハンドルを握って操縦していたわけだ。書記長には若手で、小山台の中学（現高校）を出たやつにした。闘争宣言だとか、結成宣言だのはみんな私が作って、そいつに清書させた。「あとはお前が書記長なんだからやれ」って言ったら、「市川さんみたいに殺し文句が書けないよ」なんて言ってた。そして、全自動車の準備会に加入した。それからは「賃上げだ」「一時金だ」ともうずうっと、やっと公務員が一三〇〇円とか、一八〇〇円ベースとかになって、それに追いつけ、追い越さなきゃだめだっうので、また賃上げをやって。そうこうしているうちに、「あすこはすげえ」っうんで、南番場から海岸通りに入っていく角にあったからね。そこで門のところにデッカイ赤旗を竹竿に結び付けてあるから、もうすげえんだよ。会社なんだか、組合の本部なんだか分かんねえんだよ。小糸製作所の連中やなんか、だいぶ周りにも刺激を与えちゃった。隣に芝浦合金と言う会社があって、今は品川警察になっているけど、その従業員連中が「おれんところも教えてくれ」ってんで、そうしたら全自動車本部からきて団交をやった。だから品川練炭とか、それから全専売、工場は総同盟だけど職員は全官公だったから連中とは一緒にやったよ。そこの桜井君は、後に共産党の本部へ行ったけど、分派だとかなんとかで除籍されたんじゃねえか。

こんな話があったんですよ。都電の三田車庫から「ポールの古いやつが駄目になったから、見合ったものを作ってくれ」との注文を受け、職人が寸法通りのものを作って納品した。ところが、三田車庫から「ポールが上がらない。不良品を納めただろう」とカンカンになって「一寸来い」と言われた。営業担当の重役と現場責任者が行って、平謝りして作り直して納めたけれど、「お前のところはもうこれっきりだよ」と取引が打切られた。実は自動車のクラッチ用バネの返品もあった。そこで現業の責任者が調べたら、原材料の倉庫に大量にあった良品がなくなっていたんだ。これは、社長が良質な材料をこっそり売り払っていたことが判明したんだ。どうもこれは、組合に生産管理されるのではないかと言うことでやったらしい。これが後の材料値上げで経営縮小の原因になり、事業の縮小、企業整理に繋がっていったんですよ。

―労働組合が企業別（事業所別）で出発したことについては？

市川　労働組合が燎原の火のごとく、パーと広がったと言うのはね、点から点ではなく面で広がって行ったから、結局私ら自身が実際的経験がないわけですから。頭では私なんか分かっていた方ですよね。年輪もいかないのに組合幹部になっちゃった訳。だから私の知識では、昔の古い人たちが工場のあちらこちらにいた、唐沢さんじゃないけれど、こういう人たちが「組合を作んなきゃだめだ」「民主主義の世の中になったんだし」という話がちらほら出ていました。それから昔の活動家だった人たちが、組合作りのオルグに動き出したんですよ。今みたいに議論してね、理論があって、こうあるべきだというのが提示されて、うまく現場で咀嚼しながら、組織して行った、なんていう大それたものではないんですよ。

「なに、隣で組合を作った。俺ん所でも作りたいから来てくれねえか」てな調子で、「よしよし」と言って、「こうこうだ」と。そんな時に、労働組合法が作られる、前にも言ったように、極東一六原則に基づいてとの考えで、「三人以上は組合なんだ」というのが原則にあり、そういう知識でどんどん始めたわけなんだ。

ちょっと前にも触れたと思うんだけど、会社側に「団体交渉権を認めること」なんていう要求書を出すくらいなんだから。団体交渉権があることは、極東委員会の一六原則ですでに裏打ちされていた筈なんだけど、経営者が「労働組合とは敵対的関係」との意識を強く持っていたし、小さな町工場の親父までが「なにい！」って労働組合に対して目くじらを立てる状況だった。だから話したって、理屈ではなく、「極東委員会の一六原則を知らねえか」つう調子だったからね。要するに、変な話『朕の上に居る極東委員会』の一六原則を知らねえか」と言って経営者を脅かしてさ。まあそういうとこら辺から、そういう程度の動きがバタバタあったんですよ。

総同盟の古い本部規約を見ても、規約上は個人加盟のようです。たとえば日本理化は、化学同盟には入っていて、品川労連ではなく品川労協になってから加盟してきた組合です。あそこの委員長は全国をオルグしていたようで、その時は化学同盟に加入して、職場に労働組合を作るよう訴えていた。目黒の湯田さんなんかとね。

―戦争中にあった産業報国会の影響は？

市川　戦中には事業所単位で産業報告会があった。組合は産業報国会がどうのこうのというより、逆に自発的に火がついて、すぐパッと広がるって言う風に、正に燎原の火のごとくと言える現象だったよ。ただ、大企業の場合

は案外あったかもしれない。東芝などはそうじゃないです。

三　品川労連（地区労）の結成とその先駆的闘い

―六月の品川労連（地区労）の結成を迎える。そのきっかけは？

市川　大崎の明電舎だとか、東京衡機だとか、牟田鋳鋼とか、日本高周波とか、東京鍛工とかが呼びかけて、加配米運動をやろうじゃないかと。今で言う生協活動もやろうというので集まって相談する。そこから始まったんですよ。品川全体で品川労連を作って行こうということになって、だから早くに始まったんですよ。もう食糧問題だから、深刻だから、ぱっと思想、系統問わず、集まったというのが最初だった。その頃は、私がいた海岸地区には、まだ中心になるところが少なかった。だけど、小高スプリングは早かったんですよ。加配米の運動で組合が要求して、会社に「加配米を出すためにやれ」と言ったら、「そんなこと言ったら困る」と言ったので、「困るじゃねえんだ。工場協会へ行って、手続きして監督署からもらえば出来るんだぞ」と、こっちが会社に教えて、加配米を出させた。

あれは肉体へきつい労働に、丙・乙・甲のランクをつけ、丙が一番多くて、機械工場で仕事をしている人で、事務仕事をしている人たちが甲とか、それの「加配米」と一人当たりいくらという配給米にプラスされて加配米がもらえるわけで、その「加配米をよこせ」という運動で集まったというのがきっかけなんだよ。

品川には前に言ったように警察が四つあり、工場協会もそれに併せて四つ、荏原工場協会は三英社が親方、大崎工場協会が明電舎、品川工場協会はどこだったっけな、大井工場協会が大江工業ということで、まあ結局、加配米よこせでなんとなく、それよりももっと即賃上げとか、そのために地区労を旗揚げしようということですね。確かに当時は、団体交渉に明け暮れていたからね。賃上げ取ったら遡りだから、今は逆みたいなこともおきてるが、バックペイをもらえる訳だから一時金になる訳よ。六月に上れば「三月から実施しろ」と言うので、「バックペイで、一時金でよこせ」と言うことになった。

―品川労連との関係は？

市川　品川労連には、結成されてから入ったわけだから、品川労連という組織があることも知らなかった訳ですよ。動き出したら品川労連があるんだということが分かって、「それじゃあ、すぐ入らなきゃいかん」と言うことにな

った。組合ができたときには、当時荏原にあって、戦前は勤労動員所と言った労政事務所に「組合を作ったよ」と正式の届けを出してましたよ。そして品川労連の実態が身近になって、地域でも動き出しました。品川練炭の組合とか、日本特殊鋼とも一緒に、彼らは労連の幹部だったから、「いい若い衆が入ってきたよ」と言われて、こき使われたんだ。海岸地域の使い走りのオルグになった訳よ。品川労連に入った時の役員については記憶がないが、確か委員長が生産管理闘争に入っていた東京衡機の村沢さんで、書記長が牟田鋳鋼の高木さんだっと思うなあ。とにかく当時は、中心地域が大崎で、両組合とも川の向こうで、こちら側が明電舎だった。大井地区は工場が少なかったよ。東京衡機は、後始末が大変だったけど、多摩川の方に越しちゃったんですよ。

―小高スプリングの組合、全日本機器労組の分会になったのは？

市川　小高スプリングの組合は、全自動車（準）に入っていたんだけど、品川労連の関係で、東品川公園をはさんで、向こうとこっちみたいな距離だった日本特殊鋼としょっちゅう行ったり来たりしていて、それで「全日本機器に入れや」という話になった。みんなが「全自動車なんか変ちくりんで分からねえ。分からねえんだからそっちがいいよ」と、地域のつながりが多くなって全日本機器に入ったんですよ。本当は、全自動車のオオタ自動車だって同じ品川だったんだけど、今の鮫洲に寄ったほうだからちょっと離れているからね。それで、加藤製作所も当時は全日本機器だからね。だから、産別が旗を揚げたから産別に入った。それが全日本機器だったんですよ。全日本機器に入って、地区労にも一緒に応援してもらった。最初に全自動車に応援してもらっていたので、野本さんに「市川君何で」と怒られた。怒られ役で、「俺一人で決めている訳ではないんで」と言ったら「それはそうだけれど、君がいて何とか舵が取れなかったのか」と言われた。周りの産別金属の組合が応援してくれてね、日本特殊鋼というのがあって、そこの委員長が応援に来て、ほとんど張り付くようにしてくれた。それでまた、よそで組合作ると「市川君一緒に行ってくれよ」とかいった調子でね。大田の日本特殊鋼とは違う企業で、倒産で解散して今はありません。それで大崎工場の委員長をやっていた市川福平が、あとで品川労連委員長になるんだけど、品川労連委員長を辞めて、品川労連が品川労協になるとき産別金属の議長になるというんで品川労連の役員をやめたんですよ。

―その後の活動では？

市川　小高スプリングに組合を作って、品川労連の執行委員になってからは、スプリングの仕事より、組合作りの相談でかけずり回っているほうが多かった。若いんで、できるという人が周りにいなかった。周りはおっちゃんたちだったからさ。結局、私みたいなのがオルグで使い走りで、組合作りであっちこっち動き回ったんですよ。だから小高の社長じゃないけど、「会社から月給もらっているのか、組合からもらっているのか」と言われたけれどもね。

高速機関の野本さんが品川労連の委員長になる前が、先ほどの大崎の東京衡機委員長の村沢さん。

―当時の品川労連の中心組合は？

市川　日本光学、明電舎、藤倉ゴム、三共製薬なんかが大きかった。だけど三共なんかは会社の中でフニャフニャとしていたからね。大崎が結構しっかりした組合があってね。高砂鉄工なんかもそうだったけれどね。高砂香料もあったけれど、品川労連（地区労）には入っていなかったし、蒲田へ行った。明電舎の組合なんかは早くできたほうですよ。地区的にも、大崎地区の方が指導的役割を果たしていた。品川労連では、指導的な組合が大崎に固まっていましたよ。

二・一ストの時私は青年行動隊員だった。「お前、京浜急行を担当しろ」と言われて、何人かで駅分会へ行ったんですが、私鉄は、国鉄と違って駅ごとには駅長がいないんですよ。駅の事務所に行っても、分会員はいるけど駅長なんかはいないんですよ。そこで「ストライキ断固として頑張れ」と演説ぶったんですよ。全部タダで電車に乗ったりしながらず一っと各駅を歩いたんですよ。

―全国的には一〇月闘争とかありましたけど、品川では？

市川　あのね、何月闘争、何月闘争とよく前にも学者や研究者が言ってたけどね、あんまり末端の我々の中小の職場には、そんなに影響してないんだよ。だから「一〇月闘争があったけど」「へえ、そうなんだっけ」てなもんで印象は深くないんですよ。だから、そういう動きがあれば、地区労の中でそういうのが聞こえてくるし、例えば地区労の執行委員会で議論になったりするんだけれど。あんまり聞かなかったね。

―伊藤憲一さんなんかとの関係は？

市川　私のところは、小さいところだったから、あんまりそういう動きとは直接的関係はなかったですね。当時の品川労連の幹部に案内されて工代会議とか言う、日本光学でやった工代会議には参加していたんですよ。日本光学の独身寮・陽光寮は、今の大間窪小学校の前の道を挟

んだところにあったんですよ。三軒道路に下がっていくんですよ。今の下神明駅。昔の蛇窪と言ってたんですが、その傍です。そのとき小野さんなんか、確か青年部長かなんかやっていた。あそこには、唐沢清八さんがいてね。品川で一番初めに東京衡器が、生産管理闘争をやった。当時生産管理というのが叫ばれていて大きな取り組みだった。伊藤憲一さんとは、地域が離れていたんで直接は関係なかったけれど、選挙では、もう毎日毎日「会社の仕事は選挙のために働いてるということか」と、社長に言われるくらい伊藤憲一のビラを電信柱に貼ったり、辻演説をやったり。東海道品川宿まで年中演説して歩いたから「赤いネクタイした若いあんちゃん」と評判だったらしいんだよ。

―徳田球一さんと会った思い出があると聞いていますが？

市川　南部地区委員会の事務所が五反田にできた時ね。何だったかな忘れたけれど、びっくりした。中央委員会から来るからというから、どんな人が来るんだろうかと思っていた。山辺健太郎つうのが来て、党の規約がどうのこうのという講義は聴いたことがあるけど、徳田球一さんが来るとは思っていなかった。ひざ詰め談判で「若い同志、頼むぜ」なんて言われ、頼まれても困るなと腹では思っていたんだけどね。

四　資本の反撃　攻勢始まる。そしてレッドパージ、朝鮮戦争

―レッドパージ前の闘いで印象に残ることは？

市川　ドッチプランによる不況で、中小企業の倒産と賃金の遅配や欠配が相次ぎましたね。そのころ私はオルグになったんですが、その時の強く印象に残っていることが起こったんです。四八、九年頃だったと思いますが、荏原にあった電気部品を作っていた、加藤電機が倒産して自主生産をしていた。その中で、「立禁」（立ち入り禁止の仮処分）がかけれたんですよ。「立禁」は初めてで、弁護士に相談しなきゃと思ったから、まだ当時は偉い弁護士ばかりだったんだよ。布施辰治とか、青柳盛雄とかね雲の上の先生のところへどうやって行ったらいいのか考えちゃった訳よ。結局、芝の労働旬報社の事務所ができ初めのころで、その隣に弁護士事務所があって、後に自由法曹団の役員をやった人なんだけど名前は忘れちゃったな。そしたら、「忙しいんだよ。とても手が回らないんだよ。君やれよ」って言うんだよ。『君やれよ』って言ったって、弁護士じゃねえんだよ。だから先生のところに相談にきたんじゃねえかよ」と言ったら、「君ならでき

るよ。大丈夫だから」って言うんだ。裁判官は西川さんという人、裁判所へ行ったら案の定、「組合の方は弁護士さんはいないのかね」と言われた。「実は相談したら、とても手が回らないのでと言われました」と言ったら、「しょうがない。それでやろう」ということになった。結局「社長室以外には自由に入っていい。社長室には入るな」という和解案が出され、労使ともに「よござんす」ということになって、自主生産を続けた。そして早い話が、社長辞めさせて、自主生産を続けることになった。そうしたら、溶断機の組合の委員長がびっくりこいて、「すげえや、品川労連は社長を首にして、組合に自由にやらせることになった。その先頭に立っているのが市川さんだ。体はちっちゃくて、やさ男だけどすげえんだ」と吹いちゃって。

―レッドパージの状況、労連のパージ反対の運動の経過は？

《民間大手のレッドパージと闘い》

市川　職場には公安が動いていたんだよ。会社に「お前んとこパージやらねえのか」ということがあったらしいんだ。明電舎の場合は、労協事務所に三〇、四〇人集まって行動を確認して押しかけ、工場内をグルグル回って組合事務所まで行ったよ。組合事務所に入り込んで、「賛成なのか、反対なのかどうなんだ、組合ではっきりさせろ」とみんなでワアワアやってた中で、組合幹部も事務所に集まってきた。そうして組合の態度について採決した結果、「止むを得ない」とするほうが多くて、労連の提起する反対闘争に立ち上がることは出来ないということになった。明電舎の組合役員も憮然としていたけれど、「しょうがない」と引揚げました。私は、パージになった人数を把握していません。と言うのは、労連三役クラスがしっかりしている人たちで、おれは、まだ駆け出しのオルグだから、「細かなことに拘わっちゃあいけねえ」と言う訳よ。その時の労連委員長は、電産の矢野さんで同じパージ組だった。解雇者で組合役員、その中には労連書記長の斉藤さんがいましたよ。この人は、体ががっちりした人で、先頭になってね、会社の職制なんかが来ると突き飛ばしちゃってね。パージ組は、表には放り出されずに職場にいた訳よ。『青ちゃん』と言った女性もいた。彼女は共産党から区議会議員に立候補して落選したんだけど。後に機関紙印刷の人と一緒になって、五反田で印刷屋を始めたんですよ。その時は、切られたほうが頭にきてたから、思想はともかく正義感の割合強い人は「そうだ、そうだ」と同調したわけよ。東京ガスの神田さんなんかもその口なんですよ。いきなりデモをかけられ、組

合事務所に入られ、「採決しろ」までやるのはチョット乱暴だったけど、この事態が、明電舎が労連を脱退する原因にもなった。

日本光学でも、合理化と合わせて三〇〇〇人からの従業員のうち三五〇名もの解雇が五〇年八月に起きています。

いすゞ自動車のパージでは、要請があって大森工場へ押しかけました。工場は、大井坂下町にありましたけど門の中には入れたけど、工場の中には入れなかった。体のがっちりした守衛がいて、うちの松島君なんか簡単に抱っこされて、ポーンと門外へ放り出されてしまった。その時、いすゞにはそういう警備体制が整っていたようだった。

三共製薬だって、企業整理で首切りをやっているんですよ。余談になるけど、女のほうが多い職場だったけれど。三共の女性がお風呂に行くと、栄養剤の匂いが残っていてすぐ分かる、と言われていたのを聞いたことがあるよ。

《官公署のレッドパージ反対闘争》

職場でもって認める、認めないというように決める格好なんだよ。私の記憶では、第二建設事務所は、職場で当局から出されたパージを認めるか否かの職場討議をやって、もちろんパージの対象者も入ってね。最終的には採決した。そしてパージになっちゃう。私なんか直接職場に入っていって、ビラまきなんかをした。現場で立ち会ったのは第二建設事務所の事務所の職場集会、会議だった。みんな喜んで賛成する訳ではないんだよ。賛成の場合は「、残念だけどマッカーサーの指令だから止むを得ない」と延べ、反対の意見は「、そんな不平等なことあり得ない。占領軍の一司令官が出したものを受ける必要はない」と言うような意味の意見を述べていた。そんな議論をして、反対派は少数で、残念で、泣きながら「残念だけど、止むを得ない」という調子でね。そんな場面に遭遇しましたよ。

一民間中小の職場でのパージは？

市川　レッドパージよりも企業整理で、「お前さんみたいな高級な人はうちにはいらねえ」と言ったことでね。昔は大きい規模で仕事をしていたから、技術屋さんや熟練工も必要だったんだけど、仕事がなくなれば、誰でも出来る仕事で細々とやればいい訳だから。小高スプリングでも、最終的には工場を閉鎖しちゃったけどね。そのとき親父いわく「市川君は、うちなんかで働くような人じゃないんだよ。あんた打って出なけりゃ。そういう人なんだよ。そん時は俺も応援するからよ」なんて言ってた。

パージ反対の国鉄大井工場の煙突に山岸一章がのぼった経過は？

市川　あれはね。本当のことを言うと、山岸君を煙突に上げるか上げないかというのは、グループで議論した上のことなんですよ、地区委員会でね。その中には、唐沢清八さんと私が入っていた。上がる前の議論の場面に私も参画していたわけよ。私は、山岸君に「煙突に上がって大丈夫なのか」と言ったら、彼は細い補助縄を見せながら「市川君ね、これなら人間一人楽にぶら下げられるんだよ。これを持っていけば大丈夫だ」と言った。あの当時私も沢登りや山登りをやっていたから身に覚えがあるんだけれど、登りはよくても降りるとなるとそう簡単じゃないからね。「この縄は工場にいくらでもあるんだよ」とも言うんだ。唐沢さんは、「いやあ、市川君たち、君らはそう言うけど、そう簡単に上がれるからと言って、よしよし上がれとはね。お祭り騒ぎじゃあるまいしね。上がれば山岸君が死ぬこともあるんだ」と言った。唐沢さんは納得しなかったけど、みんなは納得して「じゃあ、上がれ」てことになった。それで、あくる朝行って見たら、なるほど上がちゃってるんだ。「おう、上がった。上がった」てんでさ。

あの当時、機関紙通信つうのがあって、通信員になるのを頼まれていて引き受けていたから、一番先に機関紙通信に「上がったよ」と電話で連絡したんだ。だけど、一般紙のほうがキャッチしたらすぐ動くので、新聞の方に先に出たんだけどね。山岸君もレッドパージの対象者だったんだよ。そして共産党の影響はあまりなかったよ。産別金属の影響は受けていたけれど。レッドパージのときは、工場の組合は、民同が握っていたから、職場では反対運動が盛り上がるというようなことはなかった。

下丸子の事件とは？

市川　あの騒ぎのことね。占領政策への違反行為だから。だって朝鮮戦争だったんでね。ジープを作っていた三菱重工下丸子工場で、そこの労働者を応援・激励に行ったんだから。あの頃、山良（山崎良一）さんが居たところだから。追われてあの塀を飛び越えた。向こう側の土手に出ようと思ってさ。体のでっかいやつが塀にくっついているんだよ。そこへポンと降りれば御用になっちゃう。俺は表向き捕まっていないのよ、捕まりそうになっただけだよ。捕まったのは、トラックに放り込まれて、放り込まれたのは、軍法会議にでもかけられて重労働かな。山岸は逃げちゃったんだよ。品川労連のみんな捕まちゃって、閉じ込められているから大変だって、野本さんがあわくって飛んできた。その頃には話がついてね。

資本の反撃に対する闘いは？

市川　とにかく、一番は賃金の遅配問題ですよ。朝鮮戦争が始まり終わるというその前後って言うのはね、それはもう賃金の遅配がこれが大きかったですよ。レッドパージ後の闘いでは、一番の問題では中小の組織化の発端っうのはね、「賃金の遅配を解決しろ」、そういう要求から何とか地区労が応援してくれっていうことで組合作って、賃金の遅配解決の闘争をやるという、そういうのが圧倒的に多かった。我々はその方にむしろ翻弄されていた、東奔西走ですよ。その頃は、それこそ徹夜交渉、もうなんせ今考えれば気の毒だけど、社長の家に押しかけて箪笥を開けて見たりさ、そりゃもうね。泣いてんだ社長の家族はね、それでも「従業員はもっと苦しいんだ」とか言ってさ、そんなひどいことをね。私なんかはそれまではやらなかったけれど。

それともう一つは、一番問題なのはね、労働組合を中小下請けで作ると、ソニーみたいなところは、品物を全部引き揚げちゃうんですよ。要するに職制が来て、指揮して持っていちゃうんですよ。「なんで持って行くんだ」と言うと、「労使の問題には介入しません。ただ私どもの会社の財産だから、一度損害があるといけないんで、一時引き上げます」「会社のものを持っていくことについて、皆さんが妨害したりすると、私らも黙っていられなくなりますので」と、おとなしく脅すんですよ。それで持って行っちゃう。そういうのが結構あったよね。それで驚いて、「それじゃあ我慢しようか」と萎れちゃうところもあったけど、我々は「びっくりこくな」と言って激励したりして、突っ込んで行ったところもあったけどね。親会社まで押しかけることは無かったけど。一部例えば東芝にね、台風手形と言ってさ、六ヶ月ものの手形をよこすわけよ。何時支払われるかわからない。「東芝へ行こう」ということで会社のやつについていく形で、川崎の東芝へ行って交渉したわけよ。出て来るのは窓口だけど、大体係長か課長クラスだよ。

失業などの闘いは？

市川　国鉄なんかもそうだったんだけど、戦争が終わって、その帰還者と、戦中に婦女子を抱え込んだ関係で、雇用が膨らんじゃったということがあってね。今度は、それをどう切るかが問題になって、それが企業整理って言う格好で出てきたんですね。そのちょっと前までは、経営者が生産をサボタージュしていたのにね。労働者の側では、職をよこせという運動が広まってきたんですよ。朝鮮戦争をおっぱじめては、今度は軍需品の生産を日本にやらせるという格好になって、人手が必要になった。そ

して臨時工という格好で人員を確保したので、今度は臨時工を本工にしろという闘争を、組合が取り組んだ。これは、臨時工の人たちの要求で、直接臨時工組合を作るところもあり、採用のときに正式に入れるようにしろとか、スタイルは多少の違いがあるんだけどね。結局は、あの臨時工を全て本採用にしろということだった。それで組合活動が再度活発になったんですね。

それと、失業反対、失業者救済ということで、失業者同盟を作って、一七ヶ所だったかな、都内の職安に押しかけた。当時は、失業保険をもらうには、週二回行かなければならなかったんです。一回目は、まだ就職出来ないって言うんでハンコをもらって、二回目はそれじゃ一週間分の失業手当を出しましょうという格好でね。だから失業すると毎週二回職安に「出勤」しなければならなかった訳よ。仕事が見つからない限りね。そして職安には紹介する職がないんですよ。だから我々は、「職業不安定所だ」と安定所の看板の上に「不」の字を書いて、べたっと貼り付けたりしてね。それで、所長相手に交渉をやったりしたんですよ。

もう一つは、手当の頭打ちがあった。だから要求は、働いていたときの六〇%を無条件で出せと言うものと、仕事をよこせという二本立てだったですよ。兎に角、一七職安で呼びかけあって失業者同盟が出来た。それを支え、バックアップしたのが東京土建でした。土建の組合は、日雇いの関係に詳しかったからね。その共闘によって、失業保険の頭打ちを取っ払ったり、失業対策事業を全国でやるって格好でね。各自治体がかかわるようになって「ニコヨン」というのが出来た訳よ。そして仕事に付けない労働者をそこに吸収するという格好になっていく訳ですよ。そして、品川では、失業者同盟が一緒にやったということで、五反田自由労組に合流していくわけですよ。芝浦の場合は、港湾の荷役があるでしょ、恩田の大将なんか、あそこの川を占拠しちゃってね。あの川の上に家を建てちゃって、仮設だけど。まあ、品川の場合は、地区労（品川労連）が先頭に立って、リードしたし、職安交渉も一緒にやった。

―その頃の品川労連の主力は？

市川　いろいろありましたからね。例えば東電ね、電産のときに委員長やったりしたんですよ。それから、後で生産管理闘争をやったハカリの東京衡機という組合ね、全日本金属に入ってた。その人が委員長やっていたりしてね。牟田鋳鋼の高木さんが書記長だったかな。メーデー事件の岡本さんは地区労じゃないんですよ。全日本機器の東京支部の常任執行委員だったんですよ。それで南部

の親分だった訳ですよ。その南部の駐在事務所というのを品川労連に置かしてくれって、オルグの時など、みんな労連に集まってね。品川労連に間借りのようにして、便利に使っていた訳ですよ。

一五〇年代の政党の分裂や合同の影響はどうだったんですか？

市川　問題は、労働戦線の分裂がいろいろ出たんですね。全労が出来てそんなことで地区労を抜けちゃうという。今まで東京ガスの組合が入っていたのが抜けちゃうとかね。社会保険事務所の職員組合も抜けちゃうとかね。東京電力ももちろん、むしろ東京電力なんか品川労連の委員長をやっていたところなんですが、レッドパージ後すぐに抜けて、品川労協になるときには、また参加してきたんだけどね。地区労（品川労連）からの脱退は、レッドパージと総評が結成された後で、品川共闘には労連から脱退した組合に、東交や国労などがプラスされていた。

教祖、東交、都職建設関係は、同盟というわけではなく都労連が社民系でしょう、その方針で抜けて、それが品川共闘を創った。区役所はもともと入っていない、自民党系ですからね、都建設は入っていたけどね。同じ都職でもね、レッドパージを受けたところで、区役所の組合のことを「あの組合はおかしな組合だね」などと言っているのを聞いたことがある。区職は、委員長やってたやつが自民党から区議会議員に出ていたんだから。私もよく「組合の委員長が自民党から立候補したところじゃねえか」って言ってたもんだ。そういうと岡君（元労協議長）なんか苦笑いしてたよ。

同盟が結成された時にね、日本ケミカルコンデンサーという会社があったんだけど。そこの組合は、地区労に入っていたんだよ。ところが同盟本部から、労政事務所のほうへ文句が行ったらしいんだ。「お前のところ間違えてんじゃないか」ってんで、基本調査をやって発表するからね。「何でケミカルコンデンサーが地区労に入っているんだ。おれんところの地区同盟に入っているんだから」と言ってきたので、「ちゃんと当該からも届けが出ているし、地区労からも出ている」と労政事務所が応えたらしいんです。そしたら、「即辞めろ」って圧力をかけたらしいよ。そのとき私は当該に、「あんたんところが本部がそういってきて辞めるんだったら止むを得ない。そうじゃなければ俺んところに入っていてもかまわないよ。むしろ歓迎するよ」と言ったら「是非そうさせてもらいたい」と当該は言ったんですよ。またさらに、「こりゃだめだ」と圧力をかけたらしい。

組合員数ではなんたって万の単位だったからね。三万五千人って言ってたんですよ。三万五千人もいた訳ではないけど。それが一時一万二～三千人ぐらいになった。あの当時は、国鉄は入っていなかった。区職も入っていなかった。税務事務所も、全国税など官公署も入っていなかった。民間の金属産業のところが多かった。ただ日本光学の隣の三菱重工大井工場などの総同盟の金属は入っていなかった。区役所のところの三菱金属は入っていたよ。

―大森メーデーについては？

市川　大森メーデーは、占領軍の方針で五一年の中央メーデーが出来ないんでどうするかという時に、確か品川が南部メーデー実行委員会の事務局当番で、当時の品川労連委員長の野本さんが「占領軍の方針に屈しないで、南部は南部でやりましょう」と言ったので、南部の代表者会議を開いて大森駅前広場でやることになった。昔白木屋があって、その前ですよ。今はモータープール、バス停があるでしょう。その後、七〇年代の中央メーデー実行委員会が発行した写真集にはちゃんと載せられているよ。中央も芝公園でやるにはやったけれど南部と同じくらいしか集まらなかったそうだ。やっぱり地域に結集して地域でまとまるという方針が定着していた訳だから、大森メーデーには目黒も参加してたはずだよ。当日は結構集まった。千単位で集まったんじゃなかったかな。あふれるほどではなかったけど、広場を埋め尽くした訳よ。警官の介入はなかったね。直前に禁止が出たんで、間に合わなかったから、デモなしで集会だけだったからね。それにデモ申請したら、良いの悪いのと言いがかりをつけてくるだろうからと。今でもそうなんだけれどね。最近の亀戸に追いやられた時にも、思い出しましたよ。

　野本さんは、オオタ自動車の人で、後に課長になって会社更生法の問題がひと段落した時に退職した。その後東京パブリカの総務課長、部長をやった人なんですよ。彼は、全自動車の副委員長で総評の常幹もやり、高野実のカバン持ちじゃないかと言われるくらい、高野実と行動を共にしたようです。

―メーデー事件（五二年五月）については？

市川　メーデー事件のときは、南部地区の委員長が品川だったんですよ。品川労連の委員長は、日本光学の小野さんが委員長の時に書記長をやった佐川さんですよ。神宮外苑から芝公園までのコースだった。そこでみんな「人民広場へ行こう」というのが出てくる訳よ。芝公園まで行ってから有志が行くのは良いが、実行委員長だし、コースを曲げてそっちへ行くのはだめです、という立場を

毅然とした態度でやっていた。私は実行委員会の腕章をつけてたから、それ行けって訳にはいかないじゃない。芝公園まで行ってから、様子を見に行こうかって少し行きかけたら、もうみんな怪我したりして戻ってくるのに遭遇した。メーデーの演壇で、最初は「日の丸メーデーがどうの」と、そして石川島の人が来て「人民広場へ行こう」との訴えがあって、演壇上でごちゃごちゃしたんだよ。そして翌朝、会社の前に警官が来て、包帯なんかしている人を「おい、ちょっと来い」てさ、パクって行ったらしいよ。ほかの事で包帯しているやつも連れてかれたようだ。五反田自労なんかは委員長、書記長、副委員長など三役全員が捕まった。副委員長の松本さんは、南部地区の実行委員だったんで、私たちと社会党の中大路区議で江原署へ行ったら直前に釈放されたていたんだ。委員長と書記長は、一年か、一年半位入れられてた。彼らは、広場へ行ってみんなで一服していたらしいんだよ。そしたら始まったっていう話だよ。勇ましくとられて、何か始まるようなことを一時言われたけれど、そうじゃないんだよ。

―中央の取り組みとの関係は？

市川　まあね、我々地区労の当時の主な仕事は、とにかく賃金の遅払いとか、首切りとかそういう問題に振り回されていたからね。何とか闘争とか言われてもぴんとこないんだよ。如何にして遅払い、首切りを撤回させるか、もうそれにあっちの団交、こっちの団交だと飛び回っていたからね。だから総評の結成なんかもあんまり影響なかったね。

―遅配の問題が落ち着いたのはいつごろですか？

市川　戦後すぐの遅配の問題は、永く続いたんですよ。五〇年前後までありましたよ。賃金の未払い問題を解決するのに、会社に組合が金を借りられるようにしてやるからと言って、労働金庫に「貸してくれ」と行くと、会社に手形を出させる。その手形を出させるのに苦労するというのがありまして、例えば品川なんかの大きいとこ、東芝系の下請けの木下工業なんちゅうのはね、ラジオをテレビが出るまでやっていましたけど、昔はあれ、木で作っていたんですよ。それがボックスといってそれは非常に綺麗な塗りで、ピカピカ光った塗りでね。そういうのを収めていたんですよ。そのころ大企業から下請けに出される手形はね、ひでえのは「台風手形」なんて言われるような六ケ月以上の手形とかね、そんなことがありましたんで、賃金遅払い二、三ケ月というものだったからね。労働者がヒーヒー言っているから、何とか一日で

も早くって言うんで、結局、交渉で徹夜するのが多いくらいなんですよ。

―朝鮮戦争後の不況、「なべ底景気」での会社更生法との闘いは？

市川　会社更生法が施行（五二年）されるころに、倒産がかなり増えた。品川では、高砂鐵工（五二年）、オオタ自動車（五四年）。ちょっと後になりますけど園池製作所。園池の組合は、「門外不出の組合だ」と私が言ってたんですけど、そこを内部改革をして品川労協に加盟させて全金にも加入するようになった。ところが会社更生法、園池の場合は、社長の使い込みっつうか、背任横領があったんで、その問題を労働者に押し付けたというかね。その反対闘争を闘ったんだけど、賃金遅配してたが、これは、会社が左前でなく、社長の横領だからね。昔から工作機械では園池といったら有名な会社で、大阪に大阪ガスの仕事をやってる園池の大阪工場があって、そちらに会社更生法になったから配転された人もいたんですよ。それでぱったりと組合活動が下火になっちゃった。いい活動家がみんな放り出されちゃったから。実際には会社を再建するための更正法に基づいた整理をしなければならないので、結局、会社更生法は、労働者にとってちっともありがたいものでも、なんでもないものなんだよ。労働者にも救いになるということで作った法律が、賃確法なんですよね。この賃確法の中身もね、監督署に持ち込んで「賃確法の適用をやれ」と言ってもさ、実際には保障といっても完全なものじゃないから、やっぱりいろいろ問題があってね。

―臨時工の本工化の闘いはどんな状況でしたか？

市川　その後、臨時工を本採用にしろというのをね。民間で臨時工を本採用にする闘争も五〇年代半ば過ぎから六〇年代に至ってる間、かなりありましたよ。で、臨時工を本採用にする闘いでは、それなりに結構成果を挙げましたけどね。例えば、品川なんか、雪印の品川工場があったんですけど、そこなんかではね、臨時工をほとんど本採用にしたんですけどね。臨時工だけで組合を作って、地区労として、まあ僕らも応援して、団体交渉をずうっとやってね。ほとんど採用させたんですがね。臨時工を本採用にするとね、臨時工の時にはろくな手続きもしないで入れちゃうけれど、本採用にするとね、学歴だとか、身分証明、戸籍謄本だとか言ったようなものを出させるとね、怪しいのやら、いい加減なのが出て来てね。さあ、それをどこで線を引くかというのが労使交渉の中で出てね、男性はシビアだったね。

男性についてはね、東輝電機っうとこでは裁判までやった。これは東芝系でしたけど、そこの組合役員をやっていた男性の場合、経歴詐称ちゅうんで槍玉に挙がって、裁判でも負けましたね。だけど女性のほうはね、ちょっくら臨時工の女性の場合はね、いくつかの判例で三つくらいはしょうがないという判例があって、それを盾に「三つぐらいしょうがねえだろう」って言って認めさせたというか、そんなこんなでね、臨時工を本採用にするというのは結構そこでは、その時代にあったんですね。

関東ガスタ一の場合は、入った臨時工の中に、かって小糸製作所で委員長か副委員長をやって、解雇になった組合役員の人がいて、組合を作っていたんですよ。本工の組合は、エスヤという時代から組合があって、品川労連に入っていた。そして「本工も臨時工も同じ労働者だ」と言うので、我々の「一緒になるように」とのアドバイスに従って統一し、全金に入ったんですよ。

よく他の組織から「地区労はなに系？」とか聞かれたり、言われたりするけど、敢えて言えば、地域労働者の絆というのが第一で、発生の起因からしても、そのものなんだよ。それがちゃんと受け止められていない節があって、変なイデオロギ一が流布されて、惑わされるところがある。だけど職場でこのように実際の問題にぶつかってみると地区労の姿が明確になり、頼りになるものだということが分かってもらえるというところがあったと思うんですよ。

一社会党や共産党など政治的な動きの影響は？

市川　地域の労働組合運動へは直接的にはないよ。単産の関係ならいざ知らず、地域の労働組合が影響を受けることはなかったよ。例えば共産党の六全協が、労働組合に影響するようなことはなかった。

ただ園池の活動家を指導してた時、当時南部地区委員会のオルグをやってた三条氏が点検に来て居て、「合法的な面での指導は正しい」と言ったんだよ。そうしたら、組織内では「市川さんは合法主義者だ」と言うことになったりしいんですよ。それで、それまで周りにいた人立ちが距離を置き始めて、近寄らなくなってしまったんだ。ところが六全協が出たら、ある組合の幹部などは「やっぱり、市川さんの考えが正しかったんだね。運動を一〇年遅らしたね」と言うから、「一〇年どころじゃないね。二〇年、三〇年かも知れないよ」と言ったんですよ。そして、「あなたも私を『合法主義者』と言ってたじゃないか」と言うと、彼は「仕方がなかったんだよ。そう言わないと組織の中で問題になっちゃうからね」などと言ってましたよ。「ただ今までは間違いでした」と言うのを、

「坊主総懺悔」と言い表されていたけどね。ただ、農村工作隊に行って帰ってきた人が、東京土建品川支部の書記長になり、労連の役員に出てきて、その後区会議員になったというのもいたけれど。山へ行って、遭難して死んだけれどね。

―砂川闘争では？

市川　砂川闘争は、立川基地の滑走路の拡張を阻止するって言うんで、あすこにみんな毎日のように押しかけたわけですよ。あそこに大田地区労と品川地区労と一緒になって、観光バスに参加者を乗せて行ったんですよ。呼びかけたのは東京地評で、大田も、品川も行こうということでバスの定員よりよけいに乗ってね。他ではバスではなく、ばらばらに個別に参加したというのがあったけれど、最終的に大きな動員をしたのはそのバスでの共同参加で、それ以上の直接行動はしていません。

―機関紙の交流会みたいのがあったそうですね？

市川　労協ができる前だけれど、品川の組合で、機関紙を作っている組合の懇談会があったんだよ。三共の組合で教宣部長をやっていた人が中心で、機関紙協会に繋がっているとか、協会の講習会に参加した五、六組合が月一、二回懇談会をやっていた。その時には、労連に加盟していなかった大井工場の組合事務所とかクラブを借りてやったんですよ。

五、運動の再統一、品川労連と品川共闘の合併、地区労は品川労協となる

―総評が地区労の存在を認めた？

市川　それは、労連から労協へまたがっていましてね。品川で春闘を取り組むのは、東京地評の体制がきちんとしてからですよ、春闘共闘なんちゅうのができるようになったのはね、地評が芳賀事務局長時代になってからだよね。最初はねやっぱり春闘共闘って言ってもね、まだ年度変りに賃上げするということはね。賃金の遅配問題だとか遅れたところがあるくらいですからね。「春闘どころではない」とか、「賃上げどころじゃない」とか、「今の賃金をどうしてくれるんだ」と言う、こういうことが混ぜこぜで、それが解決すると遅配問題も解決する。臨時工が本採用になるっていうふうに要求が一緒になってだんだんものになって行ったと言うか、そういう闘いの経過がある。

これらのことと品川労協ができるのと、春闘体制が地についてきた中で、東京地評が地区労を認めるようになったんだと思うんですよ。で、結局品川労連と品川共闘が一緒になるということで、品川労協になったという経過なんですよね。

―品川労協が結成される具体的経過は？

市川　加入組合が抜けたのは大きかった。組合員数で半分ぐらい、組合数ではそれほどでない。大きいところが抜けたからね。どちらかと言えば中小が残った。その中で日本光学が残って、組織人員から言って当時三千人くらいで品川全体でもトップクラスだったでしょう。

品川のいろいろな争議の支援行動で一緒になったり、そういう行動の積み重ねがあったわけですよ。はっきり言うと品川共闘の幹部さんは、中小の職場でやっていないから、例えば都労委にどうやってアプローチするかわかんない訳さ、そうすると「市川さん、どうするの」と言う訳で、アドバイスをするし、また一緒になることもある訳よ。そこでちょこちょこ交流があって、そういうことを含めた交流が積み重なってね。

品川労協になる前の具体的取り組みは、品川練炭、会社の名前は品川燃料でね。ここの配送をやっていた運送会社があって、争議の時は品川共闘にいたんですよ。知人がいた、兄弟がいるんでと言うことで、共闘のほうに入っていたんだけど「。争議の進め方が何かどうもおかしい」というので、当時品川労連に入っていた品川燃料の組合が「協力してやってくれ」という話があった。品川燃料の組合は、労連結成以来の組合で、相当後まで品川労協に加盟していた。

そこで品川燃料の要請で現場に行ったら、みんな顔見知りで国労大井工場の人たちや専売の組合などの幹部たちだった。専売は「タバコ工場」で職員の方は、前には品川労連に加入していたんですよ、全官公だったから。工場の方の従業員は総同盟だったんですよ。そんなことで一緒に支援していく中で、元労連加盟で中心的役割を果たしていた明電舎だとか、そういうのが品川共闘だったわけで、中小の方では全金の丸二製作所なんかがいた。品川共闘の方は中小が少ない訳よ。どっちかと言うと、国労大井だとかさ、専売品川工場、東京工場と言ったかな、そういう大きいところが組織の中心になっていたみたいで、中小の闘い方がよく分からなかったんだよ。

実際には、労働委員会に持って行こうたって、どういう風に取り組むか分からないので、結局、労連の我々が協力した訳だ。みんな同じ労働者だし、特に当時の労連委員長は東急運輸の川上だった。目黒労協議長の大松さ

んが東急運輸労組委員長で、彼が書記長のコンビでやっていたんだ。その川上さんが同じ運送屋だから、トラックのピケの組み方なんかを指導できる訳だから、「品川労連はすごいや」となった。まあ一緒になろうという話しもそういうところから出てきたんだと思う。そんなことがあって、共闘を積み重ねて濃くなっていく訳で、「一緒になろう」という訳で、そのときにはもう産別会議がなくなっていた訳で、解散のときの議長だった市川福平さんは品川労連の元委員長だったんだよ。

―合併のとき問題になったことはどういうところですか？

市川　労連の中で議論になったのは、中小が切られてしまうんじゃないか、という心配があって、大きいところが中心でなくて、中小零細も一律にね、労連が抱えてきたように、そのまま仲間に入れる、差別扱いをしないということを確認しようじゃないかと言うことです。地域で統一して対等・平等で一緒に闘ってきたんだから、そういう風に扱って行ってもらわないといけないんじゃないかと言う原則を、はっきりさせて行こうじゃないかということ。それから、労連の事務所を労協の事務所にするのはいい。ただし役員体制は、労連が中小ブロック別にやって来た様に、中小の差別なく選ぶこと。それから、当時品川共闘にも「たっちゃん」と言う社会党の立野さんというオルグがいた、労連のほうには市川と松島がいて、これを一緒にした書記局体制にすることを確認してもらうことと言うのを、労連の中では意思統一してたんだよ。

私なんかも「あいつは一番煙いやつだから切っちゃおう」という話もあったそうだが、小野さんたちが「とんでもない。あの人を切っちゃうことになったら大変なことになるぞ。支持者が多いんだぞ、あの人をはずして良いわけないよ」てな調子でバックアップしてくれたらしいんだ。また、いろいろな闘争場面で、共闘の幹部連中がいろいろ質問してきたから、その人たちは、教わることが多いと思ってたらしく、「あれは良い」ってことでね、結局、私が認められたらしいんですよ。例えば、品川労協になってからの田野井製作の組合に分裂をかけてきて争議になった時、門前でがさがさやったら本署の警察がきて、田野井の組合員に「ここに居る応援に来ている人たちの中で、一番偉いのは誰か知ってるか？」と聞いてきたそうだ。本署の公安関係の刑事だと思うんだけど、宣伝カーの上でしゃべっていたのが藤本さんだったから、組合員が「藤本さんだよ」と言ったら、刑事が「バカだな、あそこの隅で黙って腕を組んで立っている人が居る

だろう。あの人が一番大物なんだよ」と言ってた。組合員が「市川さん、そうなんですか？」と言ってたよ。

共闘会議の争議ではいくつかありましたよ。丸二製作所とか、品川製作とか全金系ね。かつての全金は地区労（品川労連）には入っていなかったり、抜けていたから、全金系の人たちの闘いを見ると、私たちとそんなに違いがなく、共通するものだった。むしろ大企業や官公労の組合が「労連は共産党系だ」と言うレッテルを貼ってね。特に、国鉄の大井工場の人たちがそういう意識が強かった。その後の原水禁運動とか、都知事選挙などの過程を通して、社民系と言われている人たちからも理解されて行ったんですよ。藤本さんなんかも、一緒にオルグして歩く中で「市川さん、たいしたもんだよ」と言うようになったんですよ。だから、職場で共同して闘っていれば、「社民だからだめだ」とか、「共産党でなけりゃだめだ」とかイデオロギーに変に固まると、どっかおかしいところが出てくると思うんですよ。「共産党でなけりゃだめだ」と言っている人が社民より悪かったりしてね。労働組合みたいな大衆運動はね、そういう点が一番問題ではないかと思うんです。

「品川労連の時の「政党支持の自由」の継続は？

市川　そうですね。政党支持の自由と言うのはね、相互理解ができないと統一ができないと言うことで決定的でしたね。社会党系の人たちは「共産党はダメ」と言う意識が強いでしょう。じゃ共産党の方はと言えば、これまた「社会党はダメだ」と言う意識がある。そうすると、反発しあってるだけではね、前面の大きな相手から見ればさ、ミソもクソも一緒みたいなもんでね。「これでは大衆運動はできない」と言うのが僕たち地区労の運動の考えで、多少頓珍漢でも何でも、そこで真面目に働いていて、真面目にものを考えてんだったら、同じ働く仲間としてさ、労働条件向上のために腕を組んでゆくと言うことを原則として団結していかなければダメだ、このことは、地区労運動のいろいろの中で立証されていると思うんだけどね。

三菱金属なんかは、共産党から持ってきた署名は職場には流さないとかさ、同じような署名でも「地区労じゃいい」とかね。だから地区労を通していけば、共産党がやっている運動でも一応協力してくれる。この辺のところが分かってもらえばいいんだけど、いまだに分かってもらえないよね。それが残念だなと思ってるんだよ。我々は、相当変な分子は別だけど、普通に働いて、普通に生活している人が多少選挙のときに騒いで民主党に入れた

とか、そんなことは闘いをやって行くうちに変わっていくんだから。すぐ定規で一線を画さなくてもね。

一警職法、松川闘争から六〇年安保闘争では？

市川　安保闘争になる頃、松川の勝利解決が近づき、かなり盛り上がってきたでしょう。それこそ社会党系の人も一緒になって動いたでしょう。品川ではその頃にニュー東京観光の争議が、全金品川地域支部の結成もその直前にあった訳ですよ。

品川で一番印象的だったのは、そこまで盛り上がって行くまでには、警職法反対闘争が「おいこら警察復活」反対ですね。これはすごく盛り上がった。品川労協が発足してすぐに集会があった。品川の今のキュリアン、当時の品川公会堂前の広場を埋め尽くしてね。公会堂の周りからずうっと通りまで、埋め尽くすように結集が図られたんですね。それで、提灯デモをやろうてんでさ、あんなに集会が成功したのは久しぶりだったでしょうね。

それがきっかけになってつうか、弾みになって少しづつ安保闘争の動きが出てきたんですよ。一時期は「安保はいらない」とか言われていたが、なんといっても安保闘争を盛り上げたのはまずはあの争議団だったと思うんですよね。とくに中小企業の争議団の動きがね。そういう経過があったと思うんですよ。そういう中で、安保共闘会議つうのが創られて行ったでしょう。これは東京段階でも結集されていったし、東京地評と地区労の結びつきも強くなってきたし、南部共闘も盛り上がってきた。安保の闘いを中心にして地区労運動も盛り上がってきたということが、言えると思うんです。

一田野井製作所の闘争は？

市川　田野井製作所は、桂製作所の前で、工具を作っていた。そして品川労協が出来てすぐですが、分裂がかけられて、結局組合は分裂させられて、その支援活動が行われた。地区労は、電信柱という電信柱、大井の周り、会社の回りから始まって大井の町中ビラを貼りまわった。後に京浜三区、六区のほうへ工場が移っていった。田野井製作所の労組委員長が品川労協の副議長をやってたんですよ。

一ニュー東京観光、帝全交通、陸王の争議については？

市川　帝全交通の話があるんですよ。支援で、あのメトロの争議中の人が来てたよ。当時の書記長をやって、後に自公総連の委員長をやった中山君が居て、彼なんか、俺のところに車で朝来て、「頼むよ」と、わざわざ来てくれたからと乗ったら最後さ、あの人たちは東京中ずうっと回るの平気だから、どこへでも行っちゃうんだよ。「品川の地区労のオルグだからね」というんだけど、「そんなこ

と言わないで手を貸してよ」と言ってね。結構協力させられたよ。

エスエスの争議は、蒲田工場の閉鎖問題とか、首切り問題で闘いがあったわけですね。たまたまエスエスの本社が日本橋にあって、並びのビルがニュー東京観光の本社だったんですよ。エスエスの組合事務所には正門から入れなくなっていたので、ニュー東京観光バスの本社から掛けた縄梯子で入って、激励交流会をやったりしたんだよ。ニュー東京観光バスの本社にみんなで押しかけてビラを貼ってくる。蒲田工場に暴力団が入ったときには、中山君がすぐに近くに住んでいたから、夜、激励に行ったらしいんだ。私は大田までは行かなかったけどね。

ニュー東京観光の争議で印象的なことは？

市川　最近観光バスの事故があったでしょう。あの労務管理なってないとか、なんかとか、ああいう労務管理の基準がそのままだね。ニュー東京観光なんかもだからやったんだ。ニュー東京の闘争では、当時のガイドさん、運転手さんの乗務勤務基準を決めさせたんだよ。皇居前に観光バスが来るでしょう。そうすると基準監督署の監督官がみんなで勤務実態の聞き取りをやったんだよ。休憩している時間は給料出ているか否かなどとね。そして「勤務分は半分だ」との結論を出したんだ。これは、我々が闘争で「運転手さんとガイドさんが居る車は、お客さんが出て歩いている間は、車の留守番をしてるのだから、留守番していなければならないのだから、拘束時間だ」と、要求していたからだ。結局一人づつ交替で拘束されてるということで半分づつということになった。それまでは休憩時間は賃金の計算の対象になっていなかったんですよ。

ニュー東京観光の場合も、実際には労働行政の中でもきちっとしてなかったんだよ。それを闘争で、調査せざるを得なくて、調査して基準を作ったんだ。それは大きい成果だったんだよ。そのときは、小糸製作の組合の役員をやっていて解雇になり、当時品川の社会党の専従の根岸君というのがいましてね、呼びかけたら彼なんかが協力してくれた。あの当時は、社会党の国会議員団も大勢いて、比較的に基準監督署への働きかけもできる立場にあったんで、手を打って貰った。

監督官の監督官と言うのか、要するに監督署を統括するっつうんですかね、そういう職種があるらしいんです。そこへ問題の提起をしてくれたんですよ。どうも東京基準監督局へ「どうなってんだ」と質問かなにかで働きかけてくれたんだと、なんとなく感じましたよ。末端の役

所がチンプンカンプンだから、そこへこの問題で圧力をかけてくれたらしいんですよ。

当時の全自交だったけど、これは、後で詳しく話すように、当時、地区労（品川労協）が労働基準監督署と定期的に交渉みたいなことをやっていたから、だからわりにそういう問題をやれたんで、それを活用できたんで、ひとつの貢献が出来たんだけどね。

―陸王の会社更生法適用は？

市川　そうそう、六〇年に陸王が倒産して、その後目黒号が倒産すると言う順序なんです。というのは、目黒製作はあの陸王の下請けでね。陸王は、ハーレーダビットソンの焼き直しみたいなやつで、かっては宮内庁ご用達とか、警視庁御用で白バイ、赤バイ、陸軍御用で軍のサイドカーなんかを作っていたんだ。そして三共、そう三共製薬系だったんですよ。立川工場はほかのところになっただろうけれど、品川工場は閉鎖だった。当時この陸王に居たのが青柳君で、彼は専売の東京支部の書記になって、そして地区委員、品川の地区委員長かなにかになったのかな。南診療所の事務長か何かやってたけど、事務的なミスの責任をしょわされてやめたんじゃないかな。彼は不運だったんだよ、そういう意味ではね。専売を抜けてからね。

―ニセ最賃反対闘争、賃金闘争については？

市川　これは、あんまり直接まだ地についた問題じゃなかったですね。だけどやっぱり最賃闘争をやらなくちゃならないんだよという考え方が、入ってきつつあったと思うんですよ。実際に最賃闘争を取り組むようになったのは、春闘共闘がまとめて取り組めるようになってからね、それから労働省交渉とかね中央最賃・東京地賃とかね、要求書・要請書を持って行くとか、署名を集めるような運動になって行ったんだけど、それがやっぱり職場の中できちぃっと確立するところまではね。大きいところはいざ知らず、品川は小さいところが多いでしょう。だから大きいところが、例えばまあ賃金問題でね、日本光学が賃上げしていくうちに「日本一高い初任給」なんて週刊誌にへ出てくるくらいにね、これは大変だというので会社側は「弥富」賃金の導入の問題を出してきたちゅう経過がある訳ですけどね。民間中小の場合はね、品川はどっちかていうと大企業が少なかったから、どうしても中小の闘いが決定的で、民間というと大体は中小なんですよ。大企業ちゅうのは、一つか二つ、三菱金属だとか、日本光学だとか、明電舎、ソニーがニョキニョキと出て大きくなってきたんですけどね。昔は日本気化器の青年学校の校舎を買い取ったのかどうかで、東通工っ

て言ってたんだよ。そうすると要するに技術で売ってソニーになったっうか、まあ、ちいちゃいのを売りにしたのがソニーなんですけど、日本気化器のすぐ真近に居座ったわけですよ。逆に日本気化器よりはるか昔からあそこ居るような顔をしているけれど、そうじゃないんですよ。

注：弥富賃金とは＝昭和三〇年代後半頃、日経連が導入した、弥富拓海氏一現賃金管理研究所所長が提案したアメリカ式職務・職能給賃金

六　労働組合組織化　中小企業を中心に戦後第二のうねり

一全金品川地域支部の結成の経過は？

市川　あれはね、時の共産党品川地区委員会をやっていた中条と斉藤のコンビで、私にはバックアップ、影の相談役の任を持たせて動き出したものだよ。斉藤君が専従で、品川地区委員会が身分を保証してやらせた。それから中条君の話ね、共産党の幹部の中じゃ、まあそう言っちゃ何だけど、ちょっと違って、労働者の組織をどうして行くかということ、南部の拠点だった品川の地区委員会だからね、当時そのくらいの考えがあっても不思議ではないんだけど、彼は、いい感覚を持っていたね。学生上がりだけど。一時ちょっと海岸の小さな会社に入ってさ、それから専売の組合の書記さんになった。そういう経過があって、それでレッドパージを受けたのかな。それでマユミ機械とか、ほら絹糸の繭を煮たりする機械を作って韓国に輸出している会社で、そこにちょこっと居たんですよ。もちろん党の活動では動いていたんですよ。それで地区委員長になった。現場の労働者の闘いを組織する点では意欲を持っていたからね。それが機関として副委員長クラスをそのポストに付けた。そういう地域支部に、目黒の地域支部でやっていた中西君他一、二名が加わった。それで中西君に言わせると、「品川の地区委員会で、大勢で会議をやっている中で、なんか真ん中で体は小さいけれど、威張りくさっているやつがいる。どこの奴かと思ったら市川さんだったよね」と言ったから「俺なんか威張っていないよ」と言ったのを覚えているよ。

一全金品川地域支部が五九年に結成されて、六三年には一〇三〇名にまで増えましたが、この間で印象に残ったことは？

市川　まあ、一つは、もう中小で労働組合がないところで、労働組合を作らなければしょうがないということで、地

域支部の活動家がそういうところをキャッチして、それを組織する取り組みをしたということですね。それを支えて支援する体制がある程度できたというか、大きな役割を果たしたんだと思いますよ。地域支部自体がもちろん動いたけれども、やっぱり地区労が相談相手になり、バックアップしたりちゅうね。まあ、僕らが地区労にいたということも言えると思うんですけどね。そういう関係で、私は地域支部の特別執行委員になったとき「お前が地域支部の特別執行委員になってけしからん」という意見は出なかったですね。

それに実際には、地区労に加盟しているところが、例えば菅沼タイプだとか三英社というところが、地域支部に加盟して来ましたからね。それと新しく組織した日本ファックスだとかね、そういうところがどっどっと入ってきたので、東京軽合金なんちゅうのはね、大森の駅のそばにあったんですけど、かなりいろいろな活動家がいたんですよ。

地域的に近いもんだから、大田区の運動とも多少オーバーラップするところがあったと思うんですけど。この安保闘争と地域支部の運動とがやっぱり大きな働きかけになってね。それでまあ、私なんか東京軽合金の大会なんかに行ってね、ちょうどその日が安保闘争の最中で、国会の警戒線をとびこえて国会の中になだれ込んだあの日なんですよ。帰ってきてその足で大会に出て、安保闘争の状況の訴えと地域支部の仲間がみんな結集して闘っていると言う報告なんかして、地域支部加盟を促進するようなバックアップをしたということもありますけどもね。後に地域支部の委員長の斉藤君ちゅう人がここの出だったわけですよね。軽合金のね。

こういう中で、地域支部が大きくなって行ったって訳があるんですが、市金なんかも、その時代に組合を結成して地域支部に加盟して、地域支部の事務所をね、会社から会社の門の脇の小さな小屋を組合事務所に認めさせて、そこに地域支部の事務所も置いたわけですよ。それが市金が倒産するまで地域支部の事務所だったんですよ。でそこで、倒産して引き上げるときに組合事務所の移転料ということで当時の金で五〇〇万円取ったんですよ。それでその五〇〇万円を持っていると、またどっちかの方から「大集会をやるから出せと言われて、そっちの方へ流し込んじゃ困るから」ちゅうんで、小幡君に話したら、彼が「こんな話があるんだけれどどうだ」と言ったから、「何でもいいからとにかく手を打て」と言って、今のあの図書館の裏の事務所、川っぷちのところの事務所

を確保したんですよ。当時の金で五〇〇万円だったですよ。

この争議の始まりの時は、全金東京地本の杉本氏と私と小幡氏とね、市金の中で多少ごたごたしてさ、辞めるの辞めないのという声が出たんですよ。そのとき杉本氏が啖呵を切ったんですよ。組合員の前で「辞めたい人は、会社に規定の退職金ならいつでも払うと言わせているから取ってやるから争議をやるのが嫌なら良いですよ。辞めても残るのが小幡と私と地区労の市川さんの三人いればおしまいまで、けりがつくまでやるんだから、いつでもいいんだ」と言ったらね、はじめグチャグチャ言っていた連中があんまり言わなくなったんですよ。杉本氏があそこで啖呵を切ったのが、あすこの顛末で、がんばったと言うのは、この三本柱あってと言うことなんですよ。私はあんまり正面には出ていなかったんですけどね。一応そんな役割になっていたんですけど。

あそこで新興劇団が「娘たちが風に向かって」という映画を作ったんですが、これは、労働組合を作ってがんばる娘たちを、女性労働者の闘いを映画にしたものなんですよ。日色ともえとか、樫山文江とか有名な女優も参加しているんですよ。だから周りの工場から見に来るんですよ。映画の中のエキストラになっちゃったり、その後全金ロールの映画を作るために全金が中心になって運動をずうっとやって、東京争議団共闘もかなりやったんだけど、その割りに市金の場合は新興劇団があそこに泊り込んでずうっとやって、周りも応援したちゅうか、協力したちゅうか、そういう風にしてできた映画でね。本当のことを言うと、あの日本ロールのあれもいいかもしれないけど、むしろあの映画の方がね。地区労が世話をしている場面がちょこちょこ出ているんですよ。設定は大阪になっているんですけどね、実際作っているのは品川なんですよ。物語の設定が大阪になっている。大阪の地区労が来て相談にのっているということをやっているんですよ。地区労をやっている立場から言えば、これはいいよと思ったんだけど。あの死んだ上本君なんか、写真を撮る時、駆けつけて並んでいる中で入っているんだよ。彼は、「俺も写真撮るから行く」って、こっちの事務所から、ろくな話もしないうちに「これから写真を撮るんだってよ」といったら「それじゃ行く」って写真を撮っていたよ。

―その他の動きは？

市川　その前に、田母神さんなんかがね、全国一般南部地協とか言うのを作ったでしょう。合同労組を明電舎のそばで、園池製作所のところの角っこに勤労者会館と言う

のが作られ、講師になったことがあるんですよ。私もそこの学習会の講師をやったことがあるんですよ。これが共産党の幹部だった真穂さんだったんだけど。そこに一時、五反田自労をやめた田母神さんが居た。そこで合同労組を勤労者学院の館長になっている人と一緒に作ったんですよ。分派みたいな、共産党に言わせると最初は、分派ではなかったけれど、途中から分派になって共産党を抜けた。田母神さんは、南部地協から東京地本へ行ったでしょう。彼に会うと「いや、市川さんには大変お世話になって」なんて言いましたよ。

―中小経営者も関心を示したそうですね？

市川　経営者には、労働組合、地区労を毛嫌いし、十把一からげで見る人も多いけど、気の利いた経営者はちゃんと受け止めるものだよ。変てこりんなことはしないっていうことをね。組織によっては、地区労の方に耳を貸すようになり、そのことが地域に浸透していったんだよ。地区労なら耳を貸そうとか、地区労に入っているなら相手にして話を詰める、とかいう風に。

私も大田の下丸子の方の中小企業の経営者の組合の御曹司が集まる会に、講師として学習に呼ばれたことがありますよ。その御曹司の中に、学校の友達がいたんで、その関係でじゃないかな。「市川さん、ぜひ頼むよ」と言われたんで、「じゃあ」ということで、品川労協や、品川地域支部はどういうことをやってるか具体的事例を挙げて話しましたよ。そしたら、「へえそうなのか、それじゃ一般的に言うと、あまり強い組合じゃないんだ」つう意見が出たら、参加者の中から「バカ言ちゃいけないよ。品川のね、地域支部の運動ってのはね、大田なんてもんじゃないんだよ」という意見を言う人が出たから「いや、同じじゃないですか」と言ったら「いままで見てきたり、今日の話を聞いてそういう風に思いましたよ」って言われましたよ。半分はあったっているなと思いましたよ。

品川の場合だって、ほら、目黒の地域支部に入っていた人が参画してきたでしょう。南部の場合は大なり小なり繋がりがあるんですよ。だから品川だけが「こうだ」ということはないんですよね。いろいろな要素があって、それぞれの所で生かされているっていうのかな、それが南部の労働者なんで、「東京南部の労働者」という誇りをみんなが持っているんですよ。誇りを持つだけのことはあるというのは、事実だよね。

―三井三池闘争については？

市川　三井三池の闘争というのは、オルグが上京して訴えて歩くのを案内してやるとか、カンパ集めてやるかとかね。まあ、そう言ったことでした。ただ東京地評から要

請されて、それで三池への応援のオルグ団を出して行こうということで、それで私も一週間、組合の役員、地区労の役員一、二名を引き連れて行ったという関係ですよ。一週間、毎日私なんかが配属されたのはハラマンダつうところ、三池のね。ハラマンダというところの宿舎が炭住でね、行ってさ、朝「炭掘る仲間」の場内放送で起こされて、分会事務所で朝飯食ったら、事務所前に整列して、それで棍棒を担いでホッパーの防衛、要員に参加するわけよ。ヘルメットがないんだよ。ヘルメット。それが分かってりゃ東京で買って行ったんだよ。そんなこと誰も言ってくれない。行ったらヘルメットがないんだよ。そんで京王自動車の関島がいたんだよ。関島君が「俺帰るんだけれど、ヘルメット買う人いないかな」と言うんだけれど、あいつの大きいんじゃないかと考えて、誰かがなんだかんだと言ったのでそっちに置いて行った。結局その時には買わずに、ヘルメットの代わりに麦藁帽を買ってかぶったんだ。危なかったね。始まってたら棍棒で頭をたたかれてアウトだよね。

宿舎の炭住は、空き家みたいなところで、五、六人入って、全部で二〇～三〇人くらいだったね。他の炭鉱の組合の人も来ててね。夕方になると「そろそろ生理休暇もらって帰りたいな」って、そんなことを他の炭鉱から来た人たちが、飯食った後、お茶を飲みながら言ってた。それを聞いて噴き出したけれど、悲哀を感じて複雑な心情になったね。

ホッパーにつめる当番でない日があったんですよ。そのときは炭住のおばさんたちと懇談して、いろいろな今までの闘争経過とかね、どういう闘いをやってきたかとかの体験談を聞かしてもらって、結構いろいろな活動、その前までは闘いの経験なんてない人たちだったんだけど、矢張りね、闘いになってから選挙闘争もやるようになって、こうやってきた、ああやってきた話を聞かされ、同時に炭住の内でも分裂したでしょう。分裂した人たちとは、人間関係が阻害されるような状態が起きてきたりね、ちょっと大変な状況が見え隠れしてたけれどね。そういう中で闘争が進められたというか、随分現地の人たちは苦労があったんだろうということだけは推測できたけれどね。ちゅうのは職・住がくっついているでしょう、だからなかなか大変ですよね。我々みたいに職と住が全然離れていてね、家に帰れば知らん顔をしてられるというような関係じゃないからね。生活環境がね。

一埠頭共闘と同盟の東電品川火力の労組は？

市川　その後、品川で天王洲が埋め立てられ、全税関だとか名古屋精糖だとかが移って行った。東電の火力発電所

もできた。あそこで埠頭労組懇と言って、全税関と周りの海岸地区の二・三の中小の組合と名古屋精糖も入ってきたし、埠頭共闘で港湾労協も含めて、昼デモをやるようになった。品川火力の職場もやっぱり地区労へ入らなきゃだめだということで、地区労に入る大会をやることになった。そこで俺と石鍋君で大会に行ったの。そしたら木村淳ちゃんが来てて「どうも変だと思ってた。この二人が来てたのか。それじゃ引っ張られるわけだ」と言ったから、「俺らが無理にひっぱんたんじゃなくて、『この地域でみんなで埠頭の仲間で一緒にやろう、自分のところは地区労に入っていないんで、ほかはみんな地区労に入っているから入りたい。今日大会やるんだ』と言ってたから来たんだよ」と言った。そうしたら、「そうか、そういう風にうまくリードするのはこの二人じゃないと出来ないことだな」て、変に褒められちゃって。それで「悪いけど市川さん。私はね本部から断固阻止しろと言われてきてるんですから、今日の大会では加入を認めさせませんから」と言うから「俺たちは当該に『決めるから来てくれ』というんできたんで、われわれがどうこうすると、そういうことではない」と、そしたら断固反対とは言わないで、「時期尚早である」と言うんだよ。やはり、地域で一緒に昼デモなんかをやっているのを分かっている訳だから、頭ごなしに「駄目だ」とは言えなかった。

地域でどういう活動をしているのか、それに参加しているほうが良いのか悪いのかというのは、「埠頭ができても、電気もつかない。だから冬場なんか職場が終わって帰るときには周りが暗くなって手探りで帰らなければならなかった始末だった」それで「街灯をつけろ」とか「バスを、バス路線を引け」とか言う要求で地域共闘を起こした訳だ。東交品川も協力してくれて、そういう運動をやって、街灯もつけさせたし、バスも入るようになった。そういう成果が見え始めたから、職場の幹部は、「地域で一緒にやってるからできたんで」というのがあるから「地区労に入ろう」という一つ強く組合員に作用できたんだよ。

だけど同盟は、せっかく同盟を作ったんだから、こっちは「同盟に入ったままで、地域では地区労でやってくれれば良いんだ」と言ってもだめなんだ。「地区労は共産党が支配している」と言って、共産党なんか支配しているわけではないんだけど、そういう風に言ってね。反共色を振りかざした。そしてやっぱり入れなかった。

《参考資料・旧海岸地区の組合》

※品川埠頭が完成する以前

品川燃料、全専売東京、小林脳工、オオタ自動車、日通自工、神谷プレス、小高スプリング、日本特殊鋼、松下電機、市金製作、木下工業、都建設、大和電機、小糸製作、加藤製作、東都造機、東洋ブリキ、本所製作、品川機械、品川訓練校、雪印品川工場、斉藤鉄工所、日本特殊マイカ、東交品川、東洋製作

―日本光学の闘いで特筆すべきことは？

市川　結局争議は、弥富賃金を認めざるを得なかった。て言うのは、分裂が起きてね。あの頃方々で争議が起きて、その中で労・労対決が起きるようになった。他の経営者は、闘う労働者を追い出すために、御用分子とかそういうのに扇動させてね。労・労対決、「あいつらがいるから会社がうまく行かない」みたいな調子で、職場で三井三池を始め全金プリンスなどに見るように、暴力、吊るし上げを含む労・労対決をさせてたのが、あっちこっちあったんですよ。

だけど日本光学の争議の中では、労・労対決は絶対させなかった。それは、品川の労働者の絆によるんだよね。大井町の光学通りといわれている大井町一帯の飲み屋には、品川の労働者が帰りにはひっかかっている訳ね。従来日本光学の労働者も一緒にやっていた訳、飲み屋に入ると「お前、二組。じゃあ来ない方がいいよ」てな調子で、地域で知らない人から「お前どこなんだ」とやられたらしい。これでは労・労対決どころじゃない、せいぜい集中的に職制が時間中に、一人ひとり一本釣りで説得して、「お前第一組合を抜けろ」と、そういう工作をね。闘う組合の孤立を狙ってね、かなり時間をかけてやらざるを得なかったと思うんですよ。

日本光学の争議では、春闘共闘の運動が始まっていて、東京春闘共闘の総会の時に私たちが、「日本光学労組が分裂させられる。第二組合が結成されるという情報が入ったから、それを粉砕したい」「各単産の宣伝カーを出してくれないか」と訴えた。当時東京地評が車長会をやっていて、そこで取り上げてくれたらしくて、そりゃたくさんの宣伝カーが来てくれたんですよ。そんなもんだから、「もうとってもじゃないけど第二組合の結成どころじゃないね」となって、当時の品川公会堂を借り切ってやるつもりだった結成大会がやれなくなって、取り止めになったんです。それは、品川公会堂の正面の広場に共産党のでかい宣伝カーが置かれて、社会党からも宣伝カーが来てさ、あと東京地評ならびに各単産の宣伝カーが光学通りの所々に配置されて、日本光学の門前まで続くってくらいに宣伝カーが来てくれて、結成大会を阻止した。

それもあって、おそらく労・労対決は出来ないと会社が判断したんだろうと思いますがね。

地域的には、品川労協のブロック単位で分担を決めて、毎日門前でビラまきをやって第一組合員を激励したんですよ。その頃は地域支部も活躍し、門前でピケをはってくれたり。そして争議解決の最終盤には、責任を取って小野さんが退職しているんだよ。

―相次ぐ争議、目黒製作の争議の特徴は？

市川　目黒製作は、日本光学の闘争と一緒の時期で、大きいのは日本光学だけど、幾つか品川の中に争議が起きたんですよ。その年は、私ら正月休みなしでさ、争議団とエスエスの連中と争議しているところに、年明けたらすぐにエスエスの荏原工場前に集まってくれと呼びかけて歩いたのを覚えていますがね。その時期に、目黒製作の倒産問題が、バイクのカワサキとの合併という問題を含めた目黒闘争が発生した。あそこのメグロ号というのは、そもそも陸王の下請けでして、メグロ号になって独自メーカーになったが、結果的には二輪車競争が敗因で、その後いろいろな形のなかなかいいバイクが出来たりして、メグロ号はドカンとしているので、一時期のようにはもてはやされなくなったんです。それが一因なんですが、バイクの変化に追いつかなかった、そういうことが一つあるんですが、しかしオールドの関係では懐かしがられてね。郷愁を持っていてね。白バイの警官ね、陸王についでメグロ号に乗っていたから、そういう関係あたりからは、惜しまれていたんですね。一つは、時代の流れの中での問題があってね。あのあたりにメグロ号の下請けの仕事をやっていたところがいくつかあったんですよ。それが二、三つぶれているんですよ。飯田君がいたところがそうなんですよ。名前は思い出せませんが。大和工機か。

―エスエス争議、地域住民との密接な関係を築いたと言われてますが？

市川　エスエスが品川の小山の工場に戻って、そこでまた組合員が解雇され、争議になったんです。そのときにエスエス闘争を支援するために、隣が公園の敷地の中にテントを張って、組合事務所の奪還の闘争をやったわけです。

その時に警察の介入があるといけないということと、公共の関係ですから区の土木課長のところへ「妨害しないでくれ」と、「闘争で使わしてもらってるけど、地域の住民と利用者には迷惑をかけないようにやっているんで、あまり『出て行け、出て行け』ということをしないでくれ」とか言う、対区交渉をやったんですね。それで一応、

裁判の関係でもそういう主張をしたりしてましてね。それでみんなで公園掃除したんですよ。散らかすどころでなく、今まで汚いところがきれいになったりして、地域で歓迎されたんですよ。周りの人は「よくやってくれる」と言うんで、それがきっかけで、地域で盆踊り大会をやったりするようになって、あの地域の住民の皆さんとか、民謡の会の小母さんたちとか、そういう人たちと交流ができるようになった。ひとつの典型的な闘争があそこでできた。と同時に、東京争議団共闘が発足して、それに引き続いて、エスエスの諸君が中心に品川地区労が協力して、品川争議団共闘と言うのが発足されたんです。それが品川争議団共闘会議の発足なんですよ。

一共産党四・八声明の四・一七スト反対については？

市川　品川では四・八声明で例えば、大井工場がどうにかなったとか、明電舎の組合がどうにかなったとか、それはほとんどなかった。要するに、意識分子だけが何かごそごそ動いたんでしょうけど、それ以上の影響は果たしてどうだったのかね。客観的に見てさ、実際、地区労運動に大きな影響を与えたちゅうようなことは、殆どなかったといっていいくらいの響きですよ。四・一七スト自体についても印象が無い。地区労の運動史の中には、取り立てて経過報告に書かれることはなかったという風に思います。

注：四・一七ストとは＝一九六四年春闘で、春闘共闘の提起による四月一七日の「ゼネスト」に向けて大きく盛り上がりを見せていたが、四月八日に共産党がこのスト計画について、安保国民会議を再開せずに「春闘を進める労働者の闘争を、挑発者・分裂主義者・修正主義者の策動にさらす危険がある」と声明し、スト戦術の再検討を主張した。四・一七ストは中止になった

七、その後の闘いの特徴及びまとめ

一つづいては現在まで、年代を追わないで印象的な取り組みについてお話ください。最初は南部共闘についてですね。

市川　南部共闘の取り組みでは、ずうっと突き詰めていくと、一番大きかったのは前にも詳しく話した大森メーデーの取り組みなんですよ。マッカーサーの指令で、朝鮮戦争が始まる時に、俗に言う人民広場、皇居前広場をメーデーで使わせない、メーデーができない、集会もできなくなった時ね、メーデーの南部の当番だった品川実行

委員会が呼びかけて、明電舎の講堂で南部工代会議をやって、実施したメーデーですよ。

砂川闘争でも、大田と品川で共同でバスを仕立てて応援に行くとか、また部分的にも共同の取り組みが進められて行ったわけです。

南部春闘共闘で闘いを支援したことをはじめ、単産とも協力した取り組みが進められました。例えば、埋め立て地の対策では、品川の埠頭共闘の経験を生かしてもらうように進め、全金に加わってもらって、京浜三・六区の埋立地の組織化対策もやりました。埠頭の取り組みには、海岸地区の小さな会社の人たちも一緒になってね。これも南部共闘の貴重な成果の一つですよ。

こんな話もあるんですよ。後で品川と港の区界がはっきりしなくて問題が出てきた時、港区労協議長で区議会議員の渡辺勇さんが「市川さんどうしたらいいんだろう。こうしたらどうだろうか」って言うから、「それでいいんじゃねえか」って気軽に言ったら、「市川さんがいいって言うなら、品川区との折衝でもこれでいこう」てなことになってね。そうしたら名古屋精糖の所が港区になっちゃった。そうしたら、早速、港区労協オルグの石川君が名古屋製糖へ行って「市川君が港で良いって言ってたから、港区労協に入ってくれ」と言ったらしいんだ。名古屋製糖の組合委員長が飛んできて「市川さんが港へ行け」って言うから、「俺、そんなこと言わないよ。区界の問題で、名古屋製糖の組合を港へ移すなんて言わないよ。品川労協にいたきゃ居てもらっても結構だよ。品川地区労働組合協議会と言うんで、区の組合じゃないんだから、区界があっちだこっちだというのは関係ない。そこの組合が便利なのはどっちか、共闘を組み易いかということで決めればいいんじゃないか」と言ったら、「よし解った」となって収まって品川労協に残ったんだ。その後、名古屋製糖の組合は、丸紅が絡んだ争議を闘ったんだよ。

それから、東京オリンピックの工事で、代々木公園がメーデー会場として使えなくなって分散方式になった時も、会場を大井競馬場にして品川駅までのデモコースにしたんだよ。このときも南部共闘として、大井競馬場が使えるよう、総評をバックアップしたんだ。

―品川監督署との懇談・交渉ができるようになった経過はニュー東京観光の取り組みからですか？

市川　いやその前から、地区労（品川労協）と品川労働基準監督署とが、定期的に交渉みたいなことをやっていたから、ニュー東京観光の闘いで活用できたと言うことですよ。

我々が持ち込んだ問題は、普段小地域を担当している一人の監督官では、工場でけが人が出たとかのような問題ではないから、署長以下監督官を一堂に会して問題の説明だとか、意見の交換をするということに、きちいっと約束してた訳ではないが、そういう風にやることになったんです。そこにいたるまでの経過つうのは、労基署に地区労や当該組合がいろいろな問題を持ち込んで、当時全自交で帝全交通にいた中山君なんかが一生懸命で、「品川労協に動いてもらわなければどうにもならないから、よろしく頼む」と言われ、一緒にやりましてね。それがほかの地域に例をみない監督署交渉が、前に話したような形でやれる体制が出来たんですよ。不定期だけど年に一、二回ね。そのころ社会保険労務士の制度が出来たんですが、監督署へ行く用事があり、そこで次長から「私も講習を受けるけど、市川さんもどうですか」と言う働きかけがありましたよ。当時は、講習を受ければ社会保険労務士の資格が得られたんですよ。

そういう時期に、メールオーダーの問題がありまして、確か出勤簿の管理に問題があると言うことを話したら、すぐ監督官が現場に行って出勤簿を押さえたんですよ。六〇年代の終わり頃だ思うよ。それから目黒の大東通信機の職業病闘争、これは七〇年代に入ってからで、組合が出来てすぐだったようで、認定問題がうまく行かないと言うんで、目黒の地区労も参加してね、これもすぐ認定が降りましたよ。地区労が問題提起すると、関係監督官が勢ぞろいするなんてほかに類例のないことですよ。そういう点では、地域でも、単産でも一緒にやって、問題を解決する基盤作りをしたと言う、品川の地区労の良いところだったんでしょうね。

また、その後防災指導員と言う制度を作れたけど、それと同時に話し合い、交渉をやらなくなったんですよ。この制度は大田薫が作らせたといわれていますが、その面はあると思いますが、こういうことをやっているというのが下敷きになっているんだと思いますよ。具体的に職場の中から築き上げた闘いで、権力機構を監視し、監視だけでなくある程度動かすことが出来ると言う影響力を持つようになる。その上に立って国会議員や地方議員がね、要するに議会活動と連動して活用すれば、もっと前進すると思うんですよ。ところが、向いてる方向が「あっち見てホイ」ばっかりが集まるから、なかなか上手く行かないのが実態ですね。

―旧南部労政会館の移転問題にも関係したようですが？

市川　労政事務所は、戦前の荏原の勤労動員署から、戦後に建設された大井町駅の東側に移転し、南部労政会館と

して発足したんですよ。二階建ての一棟と、独立の講堂で出来ていた。それが、現品川区役所が新築されるところの隣に建設されることになった。その建設問題について労協が、利用者の立場から労政事務所に要求を出し、私を中心に交渉を重ねました。この新会館は三階建てと言われていたが、完成近くになって、下の消防署が二階で並んでいる区役所玄関が三階の五階建てになっていること、そして労政事務所側にエレベーターがないことに気がついたんですよ。対都交渉にも持ち込んだんですが、後の祭りになってしまったんですよ。労政会館は、今は大崎に移ってしまいましたが。

一品川労協の対区闘争については？

市川　対区交渉の場合も同じでしたよ、品川の場合はね。区長以下部長クラスが全員交渉に出てくるようになったのは、区長公選の運動がずうっと拡がっきて、自民党までが動かざるを得なくなった頃から、対区交渉でも監督署交渉みたいに、勢ぞろいしてやり取りが出来るようになりましたよ。それが、広報窓口担当みたいなものを作ってからそうじゃなくなったんですよ。区民や団体の要望はここを通じてということで、防護策としてそういうものを作ったんだね。

それともう一つ、高齢者事業団の問題。我々は、東京都が高齢者事業団を作る動きをキャッチしたんで、区に尋ねたら「知らない」って言うんですよ。区の部長クラスが「知らない」と言うのだから、まだ政策の実施が伝わっていなかったんだね。我々が知ったのは、自労の対都交渉をバックアップしていたから、キャッチが早かったんですよ。区に来るときには、シルバーセンターとかに変わっていたんですよ。問題は、最賃制の適用の問題だったんですよ。「年寄りだから賃金はいくらでもいいんだ」みたいな格好ではまずいんだ。だから区に、「労働者の代表が参加した運営組織を作らなければダメだ」と指摘したんですよ。ところが都段階で「あれは賃金ではありません。配分金だ」と、そんなバカなことはない。役人というのはとぼけたことを言う手合いが多い。だから労働組合の代表が加わる必要がある訳だ。

労働会館建設に関しては、前に述べた労政会館の経験から、東京都との交渉と同時に区議会議決を獲得し、建設委員会が設置されました。さらに、多賀革新区長が実現して、勤労者福祉施策を創る区・学識経験者・地区労の三者構成の審議会が組織され、その委員になり、答申案を起草したことについて、サラ金地獄に陥らないように「生活資金」の貸出制度を創設したり、その運営のた

めに区・議会・地区労の三者構成による審議会を作らせたり、大井競馬場の前の鮫洲を埋め立てて区民公園が出来たときに、親子でキャンプ・バーベキューができる広場を実現させたこともあるけど、一方で我々の要求を捻じ曲げ、審議会で立案・起草したものを庁内プロジェクトで変更するための討議案を企画するなど、当局の職員が行ってきた。それは、五自労の関係する失対事業についての表現を勝手に変えられ、怒った五自労の幹部が区長に抗議したんですよ。そうしたら区長が私に「五自労に怒られちゃったよ」と言ってましたよ。これは、企画・立案を協議の上、執筆した審議会委員の立場さえなくすようなことを行なったということですよ。審議会でも激論になったが、そのとき職員代表の委員は、意見を述べなかった。

私は、そんなことがあったため、それ以降は、勤労者福祉施策に対する答申案作制のための討議で起案・執筆をしないことを宣告し、参加にとどめることにしましたよ。

区側は、区が勝手に出来るように謀り、勤労福祉会館の内容・運営も捻じ曲げている。シルバーセンター問題等には、大変問題があるはずだと思う。勤福会館が中小企業センターになっているが、この経過も勤労者に了解を求める手続きはなかった。これらについて、職員組合の対応についても明確にしておく必要があると思っています。

また質問があるときは「窓口を通してお答えします」と言うことになってしまった。こうしてわれわれの運動を潰しているんですよ。ただこれは役人だけの問題ではないんで、そういう闘いをしている時は、突破して行く革新陣営の構えがないとダメなんですよ。なんかね、その辺がどうも納得しかねる問題がある訳で、いやと言うほど体験しましたよ。

一以上の具体的運動のお話の上にたって、地区労という組織と運動についての包括的考えをお示しください。

市川　運動を進めてきた中で、「地区労は日本では独特な組織だ」と言うのを聞いたことが何回もあるんですが、なぜそんなことが言われたのか。働く人の生活基盤と職場、職住接近の中で、地区労という組織が果たすというか、必要な組織になって行ったと思うんです。全国組織と言うと自分の生活している地域との繋がりが希薄になったり、何となく共通した情勢の把握ができなかったりと言う事を含めて考えると、産業別組織だけに頼っていては上手く行かない。地域と産業別組織の密接な関係が組み立てられて行くことが、必要だと思うんですよ。

東京に住んでいる場合の生活実態や経費は、人口の希薄なところでの生活実態とではかなり違う。そこに全国的組織と、地域の独自の問題を取り上げて闘う地区労というような組織が一体とならないと、全体に運動のレベルがアップしないんじゃないかと言うことを痛切に感じていますよ。従って、地域の特徴を生かしながら、全体のレベルアップを図っていく方向性を認めて行かなければならないと思うんですよ。なかなかそうは行かないんですけど。でも早い話がね。旋盤工はどこへ行っても賃金はいくらだ、生活できる賃金はいくらだということですよ。価格でなく実質的にね。実質的に同じと言うと、地域によって経費に違いが出てくるから、同じ生活水準を基準にして賃金を決めるという原則を、実現する闘いを進める組織と言えば地域組織だと思うし、産業別組織だけでは出来ない訳ですよ。

地区労運動の経験から言えば、生活はイデオロギーではなく、三度の飯が食えるか、食えないかということから始まる訳ですから。品川の地区労運動が生まれた「加配米をよこせ」の運動のように、そういったものを闘える組織を地域で作って行く、そして所属する産業によって整理し、産業別組織を作って行く。

つまり「こだわらずにすべてが地域組織に結集し、それぞれの産業別組織に結集する」、これが明確に出来れば、労働者の闘う生活の砦になり得ると思うんですよ。今様に言えば「いつでも前向き」で、四方八方に目を配りながらね。そうして今の要求を何とか実現しようと、闘いを積み上げてきたのが地区労運動だと思うよ。これが良いとか悪いとか言う人は、本当の運動をやっていない人だと思いますよ。頭で考えてる運動家は運動家じゃない。地べたを這いずり回っていろんな苦い経験をしてさ、「こういう風に闘ったらこうなった」とか「こういう風に闘ったけど失敗した。だからこういう風に闘わなければいけないんじゃないか」と言う風に、一つづつ積み重ねていくことに地区労運動の真髄があるんじゃないかね。

いろんな問題にしてもね。最近のメーデーでは統一メーデーにならない。メーデーをやらないという集団が出来た。やりたくねえと言うのだからそれはそれでいい。だから従来どおりメーデーをやろうというところが結集すれば良かったんですよ。代々木でやってきたメーデーは、東京メーデーなんだよ。それに全国組織が乗っかって中央メーデーって言ってたわけですから。だから中央でどうのと言うより、東京メーデーでやればよかったのよ。東京都に「実績がないから貸せない」なんて言わせ

なかったはずですよ。実際には、ずうっと東京地評と地区労で段取りを進め、警視庁交渉を行い、それに単産が加わってやってたんだから。「東京二三区の地区労と東京地評でやります」と言えばいいんで、何でこんなことが出来なかったのかという問題がありますよ。「地県評を守ろう」と言って京都の円山公園に結集した単産や単組の活動家、幹部の諸君が、本当にそう思って、運動を持続していたならば、メーデーも結集できたと思うんですよ。どうも読みが違がっちゃったんだね。だから出来なくて、亀戸の方に追いやられるような格好になっちゃってね。そこらへんを含めて、地区労運動について研究を進めて欲しいよね。

実は、七月二九日に大田の蒲田で「畑田先生の卒寿を祝う会」があって、青柳君も世話人になったり、身近な人が呼びかけ人になっているので出てみたら、品川火力発電所にいた鈴木君や全金品川地域支部結成のところで話した中条さんが来ていて、一言二言だったが労働問題について意見を交わすことが出来ましたよ。

一今後の運動についての意見は？

市川　地評の組織を統一することになったでしょう。ずいぶん手間と暇がかかったようだけど。へんなカンザシにこだわっていないで、そんなものかなぐり捨ててね。国労も入っているけど、闘っている人は、あれが良いとか悪いとか言ってられない訳よ、どうやって闘っているところを護っていくか、その闘いを勝利させるようにするか、と言うのが労働組合の基本なんだから、あれじゃ闘えない、これじゃ入れないなんていったら闘いにならないと言いたいんですよ。こういうことを痛切に感じなきゃいけないということを言いたいですよ。

小野　均さん

一　生い立ちから松本中学時代

―お生まれは

小野　長野県の塩尻で生まれました。生まれたところは、徳川時代の三本の重要道路の一つの中仙道の塩尻宿という宿場町です。宿場は、今の塩尻駅とは離れたところにありました。駅の辺りは、昔、桔梗ガ原と言うただの原っぱでした。

私のところの古い家は、宿の中心の家の一軒でした。隣が上問屋で、その隣が本陣、その下が脇本陣と、めぼしい四軒が並んでいるうちの一軒でした。今出てる観光地図をご覧になると、国の重要文化財である小野家が出ているのがありますが、これは筋向いにあった分家で、私の家は明治二六年の大火で消失しました。火は、下の方から来て、本陣、脇本陣、上問屋、私の家と、さらに上の三軒まで燃えたのですが、向かいの私の家の下で止まって、分家が残ったんです。生家は、そういう点では古い一軒の家だった訳です。

―通った松本中学校はどういう学校ですか？

小野　塩尻から松本の中学校に通いました。松本中学と言いまして、今は松本深志高校と言います。私が第六五回の卒業生ですから、今から見れば、一三〇年余前に創立した、日本でもいくつかの指に入る、かなり古い歴史を持つ中学校で、進学校でした。私が卒業したときには、一八〇人いたんですが、そのうち三六名、五名に一人が東大に進学したところで、東京の府立一中、五中等と競っていたほどのところです。戦後のことになりますが、私の同級生の三人が、二〇省庁のうち建設省、経済企画庁の事務次官、中曽根内閣の官房副長官に一度になるということまでありました。政府提案の法案は、事務次官会議を経ることになっていました。その中でも官房副長官の藤森は、後藤田正晴長官の下で五年間つとめ、その後、昭和の天皇が危ないというので、年寄りの長官に代わって宮内庁長官になり、御大喪や御大典を行った。神道方式ですから、憲法上の関係もあって大変だったそうですよ。その後赤十字社の社長をやっていたようです。同窓会かなんかやると、今は亡くなっている建設省事務次官は級長で、藤森が副級長だったので、給料が千円安いと文句を言っていましたよ。

―中学生活で印象に残っているのは？

小野　私が卒業する年の２月に事件が起きたんですよ。今

は信州大学の医学部になっていますが、前から県が医療専門学校（医専）の誘致を働きかけていたのが、長野との競り合いに勝って、松本に終戦の年の三月に開設されることになったんです。当初は、私立の松本商業（現・松商学園）の校舎を使うと言うことで誘致が決まったんですけど、昭和一九年四月に第一期生を入れるという間際になって、お金の問題や何やかんやでこじれて使えないことになったんですね。松本商業は私立ですから、軍のご意向と言ってもそうは自由にならないということで、急遽二月に県立の松本中学にと言いだした。そこで反対運動が起こったんです。みんな進学の方に頭がいっちゃって、反対運動の頃には卒業していなくなっちゃうんですよ。今の人には想像もつかないでしょうが、軍の意向ですから。「医専」というのは、ただの医学の専門学校というのではなく、軍の政策で軍医を増やさなきゃいけないというんで始まった話で、軍略に反するかどうかという問題ですから。その上誘致には、その有力メンバーに松本中学の卒業生が携わっていたんですね。卒業のときに同窓会があったんですが、みんな「困った、困った」というだけで、東京の同窓会からも幹部がなだめに来たんですが。

とにかくその時には、校長と教師もちろん生徒、断固反対だったんです。凄まじかったのは校長。これまたちょっと変わった校長で、清水と言ったんですが、戦争が始まる前に中野正剛なんかと懇意にしていたり、右翼の大物の頭山満などとも付き合いがあった人で、そんじょそこらの中学校の校長とは訳が違った。これが突っ張ってしまいまして、県もしょうがないと表面的には依願退職として首を切り、代わりに文部省から戦後に参議院議員になった大坪が、事務取り扱いで入ってきた。そして「このような大事な御時世に言うことを聞かなければ、廃校にしても校舎を取り上げる。なるべく早く代わりの校舎を探すからおとなしく言うことを聞け」という風なことを言ってきたんですよ。この時期五年生は名古屋の軍需工場へ全員もって行かれ、最上級生がいなくなっていて、反対の血判状を作ってまで生徒は断固反対だったんですけど、「廃校」と脅かされて教師は、「廃校にされたんでは申し訳ない」と一晩でひっくり返った。でも教師の中でただ一人、小平と言う図画の先生が断固反対を貫いた。この人は、二科会の創立メンバーだったくらいのひとです。

《ストライキと治安維持法違反で検挙》

小野　私は五年生の時に応援団長でした。それで反対運動

に積極的に関わりました。私は、校長先生に進められて高等師範に願書を出して、受験票も持ってたんですが、進学をあきらめて受験には行きませんでした。教師までが県の方針に従うということになっては、反対のためにストライキをやろうと言うことになりました。私は、浪人中で小学校の代用教員をやっていて反対運動につながっていました。卒業生で残っていたのは私一人で、私が指導したみたいなことになったんです。八月三〇日にストライキに入りましたが、残念なことに一回だけで、戦時下でしたから、次の日に出た信濃毎日新聞のストライキ報道記事では「非国民だ」と国賊扱いでした。そういう時代でした。

当時、松本に入ると私には特高が後をつけるし、友達のところへ行くと、後で憲兵が「小野が来たけど、何の話をしたんだ」と言うように、知らないうちに憲兵にまでマークされたと言うような状態でした。私の誕生日は一〇月なんですけど、その年の誕生日は、松本警察署にぶっこまれていたんです。記録を取っていれば良かったんですが、一週間くらいで治安維持法違反でした。何月何日にパクられ、何日に出されたか定かではないけど、誕生日が警察だったということだけは覚えています。別に特別な調べをする訳でもないんですが、はじめの一日は保護室で、この保護室は畳があるところで、そのあとはスリの人と一緒に同じ部屋に入れられました。実は八月には「どうせ兵隊にとられるんだから」と陸士か海兵のどちらかと、海軍のほうがどちらかと言うと自由だからと海兵を選びました。海兵は今様に言う偏差値では第一級で、一番難しいと言われたところでした。試験は、これでまず振るっちゃおうと一日目が身体検査で、二日目と三日目で英語と数学となんか三つくらいの学科試験があったんですが、一日で検査して夕方には落とすやつを発表するんですね。次の日は受かった者の面接をやって、洋服から靴までの寸法をとった。私は、間違いなく入れると思っていたけど、ところが合格通知がこなかった。それで、塩尻の小学校の代用教員をやったんです。松本警察から戻ってきたら校長が「退職願を書け」と言い出したんです。私から見れば悪いことをした覚えがないんだからと言うことだったんですが、校長が「まだそんな気持ちか」と怒鳴っていました。それで退職しました。

二、日本光学の時期

一日本光学に入った経過と当時の企業の状況は？

小野　丁度当時は、最後の徴兵検査の年になっていました。徴兵検査は二〇歳になってからで、昭和の一九年にはない訳だけど、終戦の年だったもんですから、繰上げ検査と言うことになったんです。私たちは、その繰上げ徴兵検査を受けましたから、それで先輩が心配してくれました。あの当時は、一寸問題があったり、政治犯だったりすると、第一線で必ず死ぬところにぶっこまれると言われた時期ですからね。同時に、徴用でも罰徴用のようなのもあって、とんでもないところに持ってかれる。その頃私は、あんまり気にしていなかったんですが、先輩が、「家でうろうろしていると、どこへ徴用されるかわからねえから」というので、心配してくれました。それで、今のニコン、昔の日本光学の工場が塩尻ににあったもんですから、そこに入れてくれたんです。それで、一二月に日本光学に入ったんです。これが経過です。

《光学兵器のトップ・日本光学》

小野　実は、日本光学は軍需会社だったんですね。今の人たちは、ニコンがどうして軍需会社だったと言いますけど、あのころ日本には電波兵器はないので、陸軍も海軍も光学兵器でないと戦争ができなかった訳ですから、光学兵器の一手販売の企業だったんです。よく大手の会社は、陸軍系列とか海軍列とかに分かれていますが、陸軍も海軍も日本光学の光学兵器を使って戦争をしたんです。陸軍工廠や海軍工廠でも多少は双眼鏡みたいなものを作ってはいたんですが、この光学兵器は、もっぱら日本光学で作っていたと言うことです。光学兵器では、測距儀ですね。戦艦武蔵、大和になると二〇何メートルになったというやつで、両方で測って距離を出す。もちろん将校以上が持つ双眼鏡は大変な数ですね。それから、歩兵全員ではありませんが、照準器、飛行機では爆撃するときの照準器など、これ全部光学兵器の部類なんですね。また、下から狙う高射砲も、今はみんな電波でやりますが、あの当時は操作する機械まで光学兵器で、潜水艦の潜望鏡と。とにかく、電波兵器がないのですから、光学兵器でないと眼がない訳です。そういうことで、全国の二九とか二六の工場に、六万人の従業員と言う大きな軍需企業で、三菱のマークはつけていませんが、三菱直系の企業です。ですから、「軍需工場に入れば、よそへ持っていかれることはねえだろう」と言うことで、入れてくれたという事でした。

一兵役の経験があると聴いたのですが？

小野　六月に赤紙、召集令状がきまして長野県の野辺山の砲兵隊に入りました。砲兵の中では観測とか、御者とか、

砲手とかの区別がありますが、丁度日本光学に居たもんですから「お前、観測だ」と、観測というのは、機械を使って砲を動かす一番いいところです。そして、内地の戦争に備えて、九州の佐賀県の佐賀関に持って行かれました。今の佐賀関にはないそうですが、当時は日本一の煙突があった場所です。その時は、新設部隊だったもんですから、銃剣なんかもらっても鞘がない、剣だけ、それも本人に渡すと「アブねえ」からつって全部梱包したまんまで、飯を食う食器もなくて、飯もお汁も竹で作ったやつと、まあそんな部隊でした。九州へ行ってから、結局広島の砲兵部隊に配置されたんですね。それで実は、今から思えば原爆が投下された日に、広島の本隊に行って砲を受領してきて、陣地を作るという計画だったようです。各班から使役が出ると言うことで、私がその使役に出ることになった。明日朝早いということでお弁当まで貰っていたんですが、朝になったら「行かなくていい」と、実はその日の前日に原爆が落とされたんです。ある意味では運が良かったですね。一日早く行っていたらアウトだったんですね。広島へは砲をもらいに行くこともなく、終戦を迎えました。しばらく、なかなか帰してもらえなくて、九月になって帰りました。広島のひどいのを見た記憶があります。あっちこっちの兵隊さんは、いいものを持って帰ったと言う話ですが、私のところは新設部隊ですから何もない。その上、今思うと悔しいのは、何もあとに残るものは持っていけない「始末しろ」と言われまして、その時、書いていた日記や歌日記を全部焼かされた。その時は従順に命令に従ったものだから、何日に復員したかも今では定かでありません。記録が何にもなく、ただ九月に復員したことは確かです。

―復員後は？

小野　戦争中は会社が休職になっていました。ところが、会社が軍需企業だったもんですから、仕事は一切なくなり大変でした。二〇いくつかの工場が閉鎖になり、大井の工場だけになったんで、六万人からいた従業員は、二千何百人になりました。塩尻工場には現地採用されたものがいて、そのうち五人だけに「本社へ行かないか」と言われ、終戦の年の一二月に塩尻工場から本社に移ったと言う経過です。そして、塩尻の工場では生産管理の仕事をしていたのですが、本社に行ったときは研究部に入ったんです。

―日本光学の労働組合運動の始まりは？

小野　日本光学で労働組合が出来たのは、二一年の二月でした。実際にイニシアを取っていたのは、裏で会社が取っていたと思います。早く作っちゃわないと、完全な民

主化組合ができるのを嫌ったんだと思うんですよね、会社はね。だから、ある程度会社の声がかかった組合にしといた方が良いと、考えた人がいたんですよね。その当時日本光学には目先の利くのがいたんですね。後で日経連の常務になったり、労務管理の本を書いたりした労務担当重役で、乗富と言う人で、早く会社の手で労働組合を作ったほうがいいと。あの当時は、昭和二五年の労働組合法改悪のときに外されるまでは、課長と部長の下くらいから全部が組合員でいたわけですから。そして、その当時の課長が組合長（当時は理事長）になって、組合の書記局には人事の職員が組合の専従をする、というようなことで組合が出来ました。その当時は会社が作った組合ですから労働組合とは言わないで、従業員組合と言いました。しかも役員は執行委員とは言わないで理事と言ったり、委員長は理事長、執行委員会は理事会で、代議員会で理事を選ぶと言うことになっていた。

―組合が結成される時は、産業報告会を真似て作られたんですか？

小野　それは別になかったと思います。一番先に組合ができた時は、私は入っていませんでした。その時は、職場の方から意見が出された形で、会社がそれを吸い上げた形でね。うちは、やられる前に会社が手を入れて組合を作った。けれども、民主化の動きが、岡本さんとか僕とかが、民主化の動きをして、僅か何ヶ月かで、執行部がひっくり返ったんですね。2月から5月には一度ひっくり返って、私が入ってからまたひっくり返ったんですね。

―加配米の問題は日本光学では？

小野　軍需産業の頃からコメは、入ってたんでしょうね。私らは、あまり苦労した憶えはないんですね。独身寮で飯食わしてくれるんですからね。特に私は、田舎があったもんですからね。申し訳ないけど、人様のように喰うものには苦労はしていないんです。

日本光学は、天下の軍需工場で、光学兵器を作っている会社ですからね。食べる物に困ったことはありませんでしたね。申し訳ない話だけれど、人様がイモを喰ってるのと違って、イモを食べたいからイモを買いに行ってたことがありましたね。

―組合活動との関わりは？

小野　その頃私は、独身寮に入っていたんですけど、その地域で共産党の運動をしていた人たちが、ここで労働組合を組織しなきゃいけないと、今で言えばメーデー事件の被告団の団長をやった岡本さん、あともう一人が陸王

にいた北尾さんの二人が独身寮に乗り込んできて、さかり、組織活動を行った。岡本さんはその後も頑張った人だけど、北尾さんとはその後会っていません。そしてある日、東京から塩尻工場に行って、又戻った私より四つ上の人が、私の部屋に飛び込んできて、「おい、おれ今共産党に入ってきたんだ」「本部へ行って入ってきたんだ」というのがいました。私はまだ党籍など頭にもまったくない時期でした。オルグ活動の中でこんなことがありました。研究部では、普通の組合でいえば職場委員、私たちは代議員と言ってたんですが、それを選ぶとき若い人が、「小野、お前やれ」と言うんで、後で社長になった室長と張り合って私が勝ちまして代議員になりました。

一結成後の従業員組合は？

小野　五月の戦後一回目のメーデーには、うちの組合は、日比谷公園には行かず、社内でメーデーの研修会をやる、集会をやると言うことでした。そんな中で「青年部を作ろうじゃないか」と言うことになって、一番に共産党に入ったのが副部長になって、中学時代に応援団で声もでっかいし、しゃべれるしと言うことで部長にまつり上げられた形になりました。そして、「しっかりした労働組合をやらなきゃダメだ」と、ビラをつくって「メーデーへ行かなかったのは何だ」てなことで。その後、執行部がんに若い者を集めて、例えば「赤旗の歌」を覚えさせたほかの事で総辞職をする事態になって、私は一〇月に理事になり、規約にもなかった青年部・婦人部を勝手に名乗って、結構威張ってた訳です。青年部長を兼ねていました。

《二・一ストでは南部の青年行動隊長》

小野　翌年の二月が例の二・一ゼネストです。南部の青年部が会合をやると、外に会合の場所がなくて私らの陽光寮の食堂を使うことが多かった。労働組合の事務所でやれる場合もありましたけれど。そしていつか知らない間に南部地区の青年行動隊長ということになっていました。二・一ストの当時のことを話すと、この青年行動隊長の腕章をしていますと、国鉄も私鉄もオールパスで「エイ」と手を上げるだけで、何か革命が起こったみたいな時期でしたね。どこから来たのかわかりませんが、「二・一ストになったら、二日分の食料を持って品川駅に集まれ」との命令が来ていた。いつか折があったら調べたいとは思っているのですが、調べても分からないでしょう。しかも品川に集まって何をするかというと、品川にある客車が宿舎で、ストライキがあれば何万人集まったか分からない。ストがあれば私は、何万人かの責任行動隊長だった。二・一ストを下りる、下りないと言ってた時期に

は、若いやつを引き連れて「下りるな」と、一番怪しいからといって全逓の本部に行って、後で代議士になった土橋委員長のところに押しかけて行ったりね。東急の組合の大会に出て、「ストを下りるな」「やれ」とね。しかし、隣にピストルを持った憲兵に付き添われた井伊弥四郎が、涙ながらに撤退宣言を放送させられて二・一ストがなくなったのはご承知のとおりです。

―戦後すぐの闘いの特徴は？

小野　あの当時の労働組合は、先ず経営協議会って言うものを作るんですね。例えば、うちの昭和二三年にできた一番初めの労働協約では、人事なんかも組合と協議しなければ一切できないとかいう協約でしたから。うちの組合が、あの当時の見本になったのは電産ですね。民間の組合では、電産の組合の活動では、給与なんかが出ると、あちこち真似をする傾向がありましたね。それからスライド制の給与なんですが、大手の会社では幾つも取り入れなかったんですが、日本光学はスライド制を取りましてね。会社の方もある程度は儲けになると思ったんでしょう。そうしておけば争議はなくなるからね。賃上げ争議はね。ところが逆に、スライド制のために、会社が思っていた以上に給与が上がっちゃって、会社の方がみっともないと言って、逃げてきたんだよね。スライド制もやりましたね。それから、やっぱり経営協議会ですか。その当時は経営参加と言う問題が、盛んに囁かれた時代で、その当時の労働組合の経営協議会って言うのは、どんな重役会議の決定でも、経営協議会を通らねえと、会社で大きなことはできない、って言う状況になっていましたから。それがうちの組合が潰されるぎりぎりまでは、その体制で、経営協議会の体制とか、人事の体制とか、組合の手にありましたね。

―南部の工代会議で唐沢清八さんが日本光学にいたことを知ったと言うことですが？

小野　その当時、産別会議結成前段各地域で工場代表者会議（工代会議）を持っていくんです。南部の工代会議では、あの当時何百人も集められる会場がなかったもんですから、私がいた独身寮、陽光寮の食堂を「会場に使わせろ」と会社と話をつけて開催しました。陽光寮は、四棟だったかな、各棟に一五位の部屋があり、今のように一人一部屋ではなくて、二人とか大きな部屋には四人くらい入って居ましたから、相当の数になりますね。広い食堂もあって、ダンスパーテーもやったりしました。

そこで、驚いたことがあったんですね。司会の人が「ただ今から議長を選出します」と言って、「議長には日本光学の唐沢清八さん」って言うんですよ。そのときまでは、

私が全く知らない人だったんですが、後で知って驚いちゃったんです。

唐沢さんは、戦前パクられて、転向したもんですからちょっと不遇ですけどね。戦前の労働組合評議会の議長をやって、一九二八年の第一回普選では徳田球一さんなんかと立候補しました。ご承知のように京都の山本宣治は当選しましが、外は落選でした。そして普選法と同時に制定された治安維持法で、三・一五でパクられました。その後の四・一六弾圧と統一裁判になったんですけど、判決は徳球さんより上だったんで、懲役一五年だったか、無期限以外では一番長かったと言う記録を見たことがありますけど。

会社の中では、唐澤さんは当時「補工」さん、補助する工員ね。うちでは身分制度がありまして、工員、職員ははっきり分かれていて、給料も違った給与制度でした。補工というのは、そのまた下なんで、手押し車を押して旋盤や機械から出てくる金屑を集め、掃除をして歩いたんです。そういう仕事をしている、なんと唐沢清八さんがいた。後で会社幹部に聞いてみたんですが、「分んなかった」と言うんですが、何処までどうなのか。噂では、その当時の人事課長が陸軍大将林銑十郎の息子で、左翼ポかった、なんで林銑十郎の息子が左ポかったのか分らないけど、分って入れたんじゃないかというものだった。唐沢さんは、その後組合の役員になって、最後は一年くらい理事長をやって、レッドパージ前に五〇歳で定年になった訳です。だから、凄い人が日本光学に入っていたと言うお話です。

唐沢さんが偉かったのは、必要なことはちゃんと勉強していることです。あの当時駐留軍の仕事をしていたもんですから、身分証明を日本文と英文で社員カードを作らなければならなかった。組合には会社から身分証明用のカードだけがきたんで、英文で裏書しなければならなかったんです。私は分かりますけど、聞いて見たら、身分のとこなどもworker（ワーカー）と自分でちゃんと書いてあったんですよ。そのほかの事は聞いていませんが、ちゃんと勉強していたんですね。いまだに教えてもらったことを二つ守っていることがあるんですよ。その一つは、以前は経過報告のところは原稿を書いて読んでいたら「小野さん、そういうのは止めたほうがいい、原稿を書くのを止めてそういう習慣をつけなさい」と言われて、それ以来長い時間しゃべるときは、何と何をしゃべると言うことは書いても、原稿は作らない習慣を教わりました。もう一つは、他愛のないことなんですけど、「組合の役員は、組合費で生活させてもらっていると言うことを

忘れるな」ということ。役員だったら、組合員の給料からもらうのは当たり前と思ってたらいけない。この二つを今だに守っていますよ。

―レッドパージのころは？

小野　日本光学では、よそでもありましたけれどレッドパージがありまして、三〇〇〇人の従業員のうち三五六名が解雇されました。昭和二五年、一九五〇年の八月でした。市川さんの書いた「品川労働運動の歴史」には大手の企業ではなかったとありますが、訂正しておいてください。あと商標を売る動きがあって組合がとめたと書いてあるんですが、それはありませんでした。アメリカでの販売権を一社にするという話はありましたけれど。

レッドパージは単純なパージで、合わせて一言でいえばダメ社員も切ったということです。幸か不幸か、私はその中には選ばれなくて残っちゃった。

残念なことに大きな闘争は組めなかったね。わたしがちょうど役員を降ろされて、職場で役員をやっていなかった時で、唐沢さん達が停年になった後の役員がレッドパージに遭った人達でね。その時の委員長は、現場の人で、一寸変わった人で、大きな闘争になりませんでしたね。その当時私は、職場の代議員を選ぶときに「今の執行部じゃダメだ」ってされて、選挙で負けて代議員になれなくて、したがって執行部に入れなくて、専従を外され職場に戻っていました（戻った職場は生産管理の職場）。その時期がちょうどレッドパージの時期だったんです。

そして、今言いましたように、代議員、いわば執行委員のところは、会社がずうっと手を入れちゃって、ストライキをやるって言っても決まらない訳です。そういう状態で、長期ストみたいなことにならなくて、解雇者だけが何か変な扱いを受けた。申し訳ないけど、私も整理できないままで、ずるずる終わちゃっている。その時の闘争の仕方も、皆を組織すると言うような力もなかったし、努力もできなかったですね。むしろ、会社の方がしっかり執行委員会を抑えて、職場委員会を抑えちゃって、ストライキは幾つかやりましたけど、長期ストにならなくて終わっちゃいましたね。同時に塩尻工場が一部閉鎖になっていたのが再開されていたんですが、塩尻工場も一緒に閉鎖されて、そんなことしか言えない状況でしたね、あの時は。

また、当時普通の会社は、第二組合を作ってレッドパージをやった。それは、私がつぶしました。この時は、第二組合はできませんでした。

余分な話ですが、日本のカメラがアメリカで有名にな

った逸話があるんですよ。朝鮮戦争で、連合軍が国境まで攻め込んだ時があって、それが冬の真っ最中で、従軍記者のカメラが、殆どライカかコダックだったんですが、これがみんな凍ちゃって動かなくなっちゃったんです。その時たまたまライフの記者が使ってたカメラがニコンだったのですが、これだけが動いたんです。機械はやっぱりドイツと言ってたんですけど、使ってた油が凍ちゃった。日本光学のは、油でごまかさなかったので動いた。これでライフが見直した。それで報道や雑誌関係に日本光学のカメラが急速にひろがり、ヨーロッパに行っても、ドイツさえもね。だから東京オリンピックのときは九八％がニコンだったんです。

―従業員組合から労働組合への経過は？

小野　レッドパージの直後、私が委員長になりました。そして二六年に、「キチンとした労働組合にしなきゃいけない」と規約の改正なんかをしました。当時では、組合をどうにかしようと会社が手を入れるには、職場代議員が理事を選ぶのだから、職場の代議員に会社側がヒモをつけちゃうと執行部に会社の意向を押し切られる。それではいけないと言うことで、役員を全員投票にしたんですよ。理事長と言うのもやめまして組合長に、理事を執行委員に、そして従業員組合を労働組合に変えました。労組法改悪があった訳で、専従者をはっきりさせなくてはいけないと、組合長、副組合長、教宣部長、書記長がうちの専従者となりました。

―光学労協を組織した経過と労金、労済の活動は？

小野　それでうちは、地域の活動は書記長と慣習的にそうなっていました。それで私自身は、地域の活動について、初めのうちは一寸動きましたけど、地域の活動にはご無沙汰してまして、直接の参加はありません。私の担当は、四八年の二月に光学労協、光学関係の労働組合の協議会を作るのに小西六、ミノルタ、当時はコニカミノルタは別々の会社でしたけど、キャノン、オリンパスも含めて大体一六単組で、議長を一〇何年継続しています。

光学労協のことについて申しますと、先ほどもお話ししましたように、朝鮮戦争の時に日本光学のカメラだけが動いたと云うことから始まった日本のカメラの見直し、これで日本の他のカメラ会社もすっかり儲かる体制ができた。たくさん無かったカメラ会社が、アルファベットの数ほど会社ができて、アイリスから始まって、ビューティーとか、キャノンとか、ＡＢＣ全部揃ったというふうに言われるほど、たくさんできました。

実はキャノンは終戦時二百人ぐらいの町工場だったんですね。ところが、キャノンもカメラをやろうとしたん

ですが、技術者がいない訳です。そこで結局うちで切られた人達、終戦の時に軍需産業を整理された人達などがキャノンに行ったんです。とにかくキャノンの技術的な立ち上げは、日本光学の切られた人達なんです。カメラに詳しい方は御承知なんですが、キャノンは始めはレンズなんかできなかったんですね。日本光学のレンズを付けて売っていた時期が何年かあります。レンズを作るっていうのは大仕事でしてね。幾つかの光が入ってくる、いろんな光が入ってくる、それを全部レンズ計算するんですね。それで一つ一つのレンズを作る。一つのレンズを作るのに、極端なことを言うと、三人か四人の人達が電子計算機を回して、しかも普通のやり方では間に合わないので、対数表を使って、計算をもっぱらする、今で言えばコンピューターを人的に使うような職場が、数学課と言う職場がありましてね。女性がズラ～っと五〇人ぐらい居て、これがもっぱらルート計算ばかりしている職場があったんです。その人たちが計算してますので、それは申し訳ないけど、キャノンだろうがどこだろうが真似できない訳です。それで結局、あの当時はうちのレンズを持ってって、分析してバラして、似たようなものを作って、とにかく映るレンズを作ったんです。うちの場合は、レンズ計算をして、色による収差、ひずみによる収差、それを全部レンズ計算で落として、そういうレンズを日本光学はずうっと作っていて、率直に言ってドイツのカメラにも全然負けないと言われていたんだよね。キャノンなんかは今言ったように、始めの頃は技術者が居なくて、でも商売が上手なもんですから、だんだん大きくなって、うちの技術者も行って、最後は今日のキャノンになる訳ですけど。そういう時期がありました。

《倒産と光学労協方式》

小野　それで日本のカメラが、わあっと外国で売れるようになって、日本光学は、大体高級機しか作らなっかたんですね。それで通していましたけど、中級機も作れるように。それが非常に売れるようになって、しかしそれはあっと言う間で、非常にわずかな期間で、今度は逆に自然淘汰されざるを得なかった。

光学労協での私のその当時は、つぶれた会社の後始末。一つひとつ全部行きました。光学労協方式とか、小野方式とか言うのは、光学関係の社長連中が言ってたんですが、光学労協の小野さんが出てくると、屋上のペンペン草まで持って行かれる、と社長仲間で噂されていたというのを人伝てに聞いたんです。私のやり方は、つぶれそうだと言ったらね、まず一番最初に乗り込んで、会社と団体交渉をして、賃金債権を確保するためにね、会社の

資産を全部組合に譲渡させちゃうの。夜の内に、何々組合員の所持品と、機械や机なんかに貼っちゃうの。すると、債権者の人達も差し押さえできないの。これが光学労協方式と言われて、ずうっと幾つかの所を私がやりました。五つ、六つ完全につぶれました。大きい所は千人以上の所もありました。新宿のアイリスさんとかね、ビューティーとか、レオタックス、かなり有名なところまで幾つかつぶれたのはね、みんなその方式で、たくさん労働債権を確保できた訳じゃないけど、少なくとも債権者に持っていかれるのだけはね。お手上げになるっていう前の日に、前の晩に乗り込んで行って、会社もね従業員のため、労働債権は最優先で確保しなければならないと解っているしね。悪い事しているわけじゃないですからね。光学労協でやっていたことはそんなとこですかね。

《日本光学・キャノン・ミノルタの三共闘》

小野　それからもう一つは、同じ光学労協でもですね、春闘がずうっと始まった時期がありますけど、日本光学では秋が賃金の時期だったんです。なぜかって言うとね、労働協約の更改時期が秋だったんですね。そのためにうちの組合の主義としては「協約ないところに労働なし」とか理屈を言いましてね、労働協約で賃金交渉を全部やるという習慣を持ってたんです。うちは秋期闘争なんです。たまたま、幸か不幸か、キャノンとミノルタも春闘ではなく、秋だったんです。ここで三共闘を組みましてね、キャノンとミノルタ、日本光学三者で三共闘と言うのを光学労協で作って、三共闘でやりました。ただ、キャノンについて言えば、ミノルタはちゃんとうちと一緒にストライキをやる時はやりましたが、キャノンは未だにストライキは一回も無い会社です。あそこの上手なところは、私は陰口を叩くんですけど、組合留学って言うんですけど、会社のめぼしい奴に組合役員をやらせる。そして、ある程度人物を見ることもあるんでしょうけど、組合の役員て言うのは、自分も役員をやってたから言う訳じゃないけど、権力を持っている訳じゃないでしょ。金を持っている訳じゃないでしょ。普通の団体はどんな団体でも、大きな会社でも、権力と金で抑え込んでいるから、大した指導者じゃなくても指導できるわけです。ところが組合の幹部は、ひたすらに努力と人格で行くよりしょうがないでしょ。労働組合の幹部はどこでも皆そうですけど。そこで、キャノンは権力がなくて、金の力がなくても人を統制できるという技量を見る訳です。

キャノンの代々の、歴代のそれからのやつはね、組合の経歴がないと上にいけない、社長じゃないけど上に行くには組合の役員経験者じゃないと上がっていけない習

慣がある会社だったんです。ミノルタはそうじゃなかったですけど。キヤノンは、それもあるもんですから、ストライキはまるっきりやらない会社だったんです。

いずれにしましても、三共闘を光学労協でやったこと、また、つぶれた会社の面倒を光学労協でやったことですね。

《労金の発足と初代理事長今井氏の功績》

小野　労金と労済のことで補足だけしときます。これは自慢話になって申し訳ないけど、労金も労済も創立メンバーでございまして、生き残っているのは私だけになってしまいまして、作った時のメンバーはですね。労金の場合には、私も理事長を誰にするのか、専務を誰にするのか、神田の須田町で店を出したんですが、その時の机や椅子も買いに行きました。今はこんなに大きくなっちゃんですけど、東京労金と言えども、その当時は従業員が一〇人ちょっと、役員と言えば専務が一人居るだけで、他は全部非常勤の理事ですね。今の理事さんは、月一回の理事会で日当を、良いお金を貰っておられるんでしょうけど、その当時は、完全に常勤と同じでしたね。そういうことをしてきました。

私は自分で言うのもおかしいですけど、人に言わせると「あの人は数字に強い」と言われるもんですから、ただの理事ではなく、かなり働いた方の理事だと思います。

労金の場合でも、よそはごく早い時期に、専務の他に常務を常勤にするけれど、東京の場合には、なるべく余分な、労働組合の小遣い稼ぎの、定年間際の奴を持ってくるのは受けない、と言う主義を通し、東京では労金も労済も通しました。そのために非常勤の者がせっせっと働かなければいけない。

東京労金で特に言うと、あの時の理事長は今井一夫さんて言う理事長が、大蔵省の給与局長をマッカーサーに少し逆らったということで首になった人です。これを理事長にいたしました。この方はまじめな人で、非現業共済組合（公務員の健康保険組合）日本一の大きな健康保険組合の理事長をやっていました。ただの理事長ではなくて、乗用車が張り付いておりましたけど。労金を作ったと言うので、必ず毎日、自分の仕事が終わった後、労金に来て、当日の勘定を全部自分で算盤を入れる。大蔵省の官僚の算盤て言うのは偉いですね。こっちからこっちまで全部使う。こういう算盤の使い方をしているのを、見たことがないですね。

当日の集計表が正しいかどうか、そこまでやった人です。それからもう一つは潔癖な人で、普通労金の場合は自治体がずいぶん応援していたもんですから、大体常務

に自治体の奴が入ってくるんです。それも東京労金の場合はけっぽって、一切入れませんでしたから、それは今井さんの方針でしたね。

それからもう一つ今井さんの偉いのはね、労働組合の幹部は堕落すると言うので、理事会に女は入れない、お酒も一切出さない、と言うのを通しましたね。その代わり、年一回の新年会だけは、「普通の人の行かない処に行きましょう」と高級料亭で新年会に行きましたね。勿論お酒も出ますが、女気はなし。これを通しましたね。このあたりが東京労金はずうっと続いていますね。よその労金と違って。

私はその当時は、非常勤ではありましたけど、副理事長格の仕事をしてましたけど、千葉労金の一周年の記念式典がありまして、理事長はこうしたものには出ない、専務も副理事長も行けない、「小野さん行ってくれ」となって、一周年の記念集会に行きましたら、昼日中から、芸者を揚げて、どんちゃん騒ぎをやっている、大体金融機関ですから銭はある訳ですからね。よその労金ではそういう状態でした。東京労金はそういうことはなく、そういうことで通してきたのは、東京労金が間違いなく育ってこれたのは、今井さんと言う偉い人が居たから、と思っていますね。それは一言いっておきたかったですね。今はそういうことを言う人も、居なくなってきましたけどね。

それからね、東京都から創立の時に五〇万円の補助が出たんですよね。一周年の時にその五〇万円返したんです。それともう一つ今井さんのすごいところは、毎日出て来ているのに、「俺は黒字になるまで一銭ももらわない」と給料を取らない。そうした潔癖な人でしたね。「いくら非常勤と言っても、毎日出てきて、仕事をしている訳ですから」と言っても断固取りませんでしたね。そういう思い出が労金ではあります。東京労金がしっかり育ってきたのは、そういうことがあったからです。

その影響が、五年後にできた労済にもあります。労済も始めから常勤役員を置かない、何年も。そんなお金はない。まして労働組合の老後のために来るようなのは、置いておかないと労済も通していましたね。もっとも、今は労金も、労済もそういう人がいっぱいいるようですけど。その当時、私の居た頃は、労金も労済もそれで通しました。それがある面では、私が「いけなかったら、俺が常務をやるぞ」と騒ぐもんだから、そういう話があってもつぶしました。そう言いながらも、総評か何かで偉いのが、「小野さんすいませんが」て言うもんだから、役員にしないで職員として採用しましたけど。本当は総

評から来るんだから、役員に据えなければならないんだろうけど。ずっと後になったら、そういうことも無くなりましたがね。

ちょっと労金・労済での私の自慢話じゃないんだけど、私だけじゃなく、今井さんも居ましたが。その代わり、私も常勤役員にはなりませんでした。労金の総会の議長は、いつもやっていましたね。労済の場合には、役員が居ませんので、事務局長が経過報告をして、私が事業方針の提案をする、と言うのが、私の労金・労済での生活でした。労済も御承知の通り、埼玉と山梨を統合して、中央労済が関八州にできて、今全国で全労済ができて、中央労済になっています。おかげで、あの当時思った以上に立派に成長して、有難いことだと思っています。

労金・労済での話はそんなとこです。多少自慢話になっちゃって、申し訳ないです。

―組織統一前の品川労連組織状況は？

小野　結成当時には参画していませんでしたもので、できたものに入ったとこです。それから後は、執行委員にはなっていませんが、いろいろあっても、大きなことは御三家がうんと言わないと、動かないと言う体制でしたから。品川労連の当時の御三家は、国鉄も、品川区職も全く出てこなかったので、明電舎と、専売と、日本光学、これが御三家で、あとは藤倉ぐらいなもんでしたね。

実際には労連の影の旦那衆は、明電舎・日本光学・専売のボスたちで、表向きの運動には直接出てこないのがボスで、労連の運用をしていました。その後総評が出来て、明電舎がおん出ちゃって、大きいのは、1千人以上の組合はうちだけになっていました。

―昭和三二年の品川労協への組織統一は？

小野　品川労協になるのは、昭和三二年ですね。私は市川さんの書き方に異議があるんですね。あれはね、ボス共の話が決定的な力を持ちました。動きはありましたけどね。

申し訳ないですけど、私が言っちゃあいけませんけど、私と明電ですね、一番腹を決めて、それでほかの人達が一緒になった。今まで地域に出てこなかった東京電力なんかも、口説いたのは私です。それから市川さんの記録で、労連と労協があった時に、組合員数が多かったのは労連となっているが、組合員数が多いのは労協で、組合数が多いのは労連ですよね。いずれにしても、片一方は総評の後ろ盾がある、これではいけないと言うことで、私は個人的には危機意識を持っていたんですね。地域の活動は、そういうものに「左右されてないのが望ましい」

と言うことで統一の努力を致しました。影の男の一人だと思います。だから統合した時は、これを機会に地域に出ていなかった国鉄の大井、地域の活動に参加しなかった都職、都職はこの時にはまだ労協に入っていなかったんだね。労協が出来てから入ってきたんだ。都職労の方針には、地域の活動に参加するのはなかった。

《労連会館の名義は旧労連の財産管理委員会》

小野　それから、市川さんの原稿には労連会館のカンパは一回しか書いてなかったけど、会館設立のカンパは二回していたはず。御承知のように、法人格を持たないと不動産を持てないんです。そのために、あの当時の会計をやっていた、ガスの人の個人の名前で土地と家、家は謄記していなかったか、土地は未だかってのその人の名前で謄記してあるから、これをどうするか悩みですよね。

それから、電話の場合はね、うちの書記長、うちは書記長が労協の担当ですから、書記長名義で登録したんだよね。今はどうなっているの。団体名の登録は良いけど、代表者は個人の名前がいるんだよね。えっ、うちの書記長のままなの。今は電話は二台になっているんだよね。それで土地の名前は個人名義になっていますけどね、公式にはあの土地は品川労連財産管理委員会と言うものが、機関決定としては持っていることになっている。その時の代表は、私になっていますけどね。別に登記している訳ではないんですが、土地・建物を地域組合が持ったというのは、品川が初めてでしょう。

労協と労連の統合の時には、多少私の影響が強かったものですから、資産を渡さなかったんですよ。ざっくばらんに言うと、市川さん達の身元保証の話があったんだよ。と言うのはね、地評でもあういうことになるし、この人達の首が切られて、退職金も出ないとなったら。「これはねお前達の物じゃないよ、こっちの物だよ、品川労連財産管理委員会の物だよ」と言うことなんですよ。まあ後で、品川労協は、払うものは払ってくれたんで心配はなかったんですがね。まあざっくばらんに言えばね、労連と労協統合の時に向こうの連中が来るとね、市川さんは邪魔だったんですよ。ハッキリ言えば、切ると言う話があって、この人が切られたら、労済のオルグにしようとおもっていたんですよ。でも切らせなかったんです。

一五九年年末闘争で困難を突破したそうですが？

小野　それから後ですね、うちの闘争がありますけど。五九年年末闘争は、たいした話じゃないんですが、ボーナス問題がこじれてね。こちらもストライキをやったりしても、会社が譲らないんですよ。そして会社が「もう、譲らないんじゃ払わねえぞ」と一言いったもんですから、

「分かった」と言って、丁度私が労金の理事をやっていたもんですから、労金から金を借りて会社の回答水準までの五千円単位で貸し付けちゃったんですよ。それで年を越すという体制をとったんですよ。それで会社が慌てちゃって、非組が困るでしょ。それで会社は、ものの一週間も経たないのに「金を払うぞ」と現回答で払うと言うことになった。面白かったのは、いまだに覚えているのは、一万円札が出たばっかりで、あの大井町に一万円札が散乱したと言う。とにかく、万単位で貸付たもんですから。みんなで手伝ってね。そうしたら次の年正月になったら、三菱から来ていた監査役が「小野さん。話しつけるからよろしくね」といって、何をやるのかとおもったら、三菱からの命令で「だらしない、なんで年越しでぐずぐずやってるんだ」と言われたんだと思うけど、新年早々団体交渉で「組合の言いなりで解決したい」と言うことで決着しました。三菱の指令です。それがきっかけで、その次の株主総会で主要重役が総退陣。このときのストライキで、結果的に退陣させられた。それで今まで日陰だったアメリカ駐在の常務が戻ってきて労務担当になり、将来は社長ということでね。

アメリカから帰って来て労務担当になった浜島という人は、アメリカにいたものですから、本来の労働組合のことが身についていて、凄く組合を大事にする労務政策を取ってね。その人が、その後で労務担当から当然のように社長になるんですが、癌になっていることを分からないで入院して亡くなった。変な話だが、その社長が生きていたら、「お前手伝ってくれ」と言われたらね、職場に戻っていたかも。しかし浜島社長が亡くなった後の会社は、ただ私も一切乗らない主義でしたし、会社が組合に手を入れてうちの役員を代えるということも出来ないもんだから、結局組合を潰すよりしょうがないということになったと思いますよ。

当時、品川ではね、中立組合で通してたもんですから、「眠れる獅子」だとか言われてましたけど。私に言わせれば、冗談じゃないよ、実は賃金が機械工業界でのトップ、各学歴を見てもトップで。例えば、キャノンの相場って言うのが大体その当時の大手製造業の相場だったんですけど、中卒初任給で五千円違ってたんですよ。

一会社側の反撃の態勢は？

小野　それまでの社外重役は、三菱銀行から、たいしたことのない監査役が入っていた。ところが、社外重役に三菱信託、旭硝子と三菱の大手の重役がきた。「日本光学の労務をちゃんとしていかないと大変だ」と言うことになったんでしょう。それで、日経連と連絡を取ったんです

ね、日経連の指導もあったんでしょう。次の年の労働協約交渉で「今の協約破棄 新しい賃金制度をつくる」と、完全に経営者が思うとおりの「弥富賃金」と称する賃金制度を提案してきた。それで反対闘争になったんです。でも、敵の構えが違うんです。完全に裏っていうか表にも三菱が出てきたんです。それは要するに、「この組合は何とかしなければ」というのが三菱の考えで、会社は、始めから全然妥協する意思がないんだから、労働組合が丸呑みを受け入れるはずがないんだから、長期のストライキに入ったんです。そうしたら、むこうも予定通り第二組合作りが始まって、それも管理職を使っての物凄い切り崩し、とにかく残念なことに、うちの組合は潰されてしまったね。やっぱり、天下の三菱には勝てなかったなあ。でも、都労委での不当労働行為の救済命令ではこちらが勝ってますけどね。勝った時には、労働組合はつぶされていて、第二組合がつくられた後ですから。「やるときにはやる」、「労働組合法なんかは関係なし」それが日経連の方針ですから。あの時、労働弁護士ではピカ一で、終戦直後から東大へ行っていて資格を取る前からの付き合いのあった東條弁護士が付いてくれました。労働委員会に最初に東條さんの名前をだしたら、「東條さんがやるんですか」というくらい有名な人です。会社側は、日経連で有名な和田弁護士がついて、和田と東條の対決となりました。弁護士の体制もちゃんととったんですが、勝てなくて、しかもその最中に組合四役全員馘首。要するに「打ってるストライキは違法だ」と。全員ストではもたないから、部分ストをやっていた関係から生じた問題で、それに職場の活動家六人、特にこのうち二人は、一寸暴力を振るったという理由なんですが、計一〇名の解雇を出してきました。その活動家たちが先で、組合四役の解雇が後です。そして、最終的には、東京地裁の和解で私と教宣部長が自主退職で、書記長と副委員長が原場復帰、それから職場の活動家の四人は職場に戻しましたが、二人は残念ながら戻せなかった。こんなことで私の現役がとりあえず終わりました。

三、日本光学退職後の東京労働金庫の時期

―その後は？

小野　「労働金庫に来ないか」と言われ、就職することになりました。労働金庫二〇年史これを一年やり、原稿の三分二は私です。それから、王子の支店長を十一ケ月やりました。このとき、東京労金でお金をどんどん貸しちゃって、手元資金の不足になり、銀行の高利の金を借り

ないと貸付が出来なくなった時期が生まれました。それで役員は残ったんですが、職員の幹部は全部入れ替わることで、私が業務推進部長になりました。金融機関の業務推進部長って、重役で言えば、筆頭専務の仕事です。それを五年やって、本店業務部長を三年やって、関係団体役員をやって定年と言うことになりました。

五八歳のとき、もうご苦労だったからと何の仕事もないような関係団体の役員になったとき、誰よりも忙しい八年を過ごしていたので、退屈したもんですから、丁度そこにパソコンがあった。私は、機械が嫌いじゃないし、弱いほうじゃないしパソコンが好きだった。そのパソコンは、今のしっかりデータを保存できるものと違って、昔はテープレコーダーでね、データをキーコキーコといって保存した時代で、みんなにバカにされたんですね。まだ漢字に変換されないので、1、2、3、8なんてやらないと漢字が出てこない。そのころのパソコンやプリンターを、あの頃で一〇〇万円ぐらいかけたんです。二〇年前ですから。「お父さん。そんなもの買って何をやるの」なんて言われたんですが、もう私は退屈していたもんですから。

余計な話ですが、昭和二〇年代の後半、日本で一番初めにコンピューターを入れたのは日本光学なんです。ドイツからね。日本でもコンピューターを作る会社もありましたけど、本格的に業務で使えるコンピューターは、ドイツから二台、一台は内閣統計局、もう一台は日本光学です。工場では冷暖房なんて関係なかったのに、その部屋だけは。今の電卓と変わらないコンピューターでしたけど、電球をつけていた頃のもので、ドイツから技術者が一人張り付いて来てましてね。

私は、日本で初めてコンピューターに触れた経験があって、それで何時からかは知らないけど、退屈しのぎにパソコンをしっかりやって、入門書まで出したんですよ。五千部印刷して、四千何百部分の印税をもらいましたよ。そして、労金で国鉄労働組合の会計システムを作ってあげたんですが、国労だけではもったいないからと、希望する労働組合に使ってもらうことを考えようということだったんですが、大型コンピューターは分かってもパソコンは分からない、私が一番のベテランになってしまったんで、私があっちこっち、三〇、四〇の組合の労働組合に入れるソフトを全部やりました。今は便利になって素人でもすぐ使えるようになっているけど、その当時のパソコンは、買うことから始まって、動かすことも全部システムを入れなければなりませんでした。入れ方もお手伝いをしなければいけないという状況でした。労金の

システムをいくつかの組合に入れる過程で、プログラムも作ってくれといわれた。ところが労金のほうは「小野さん、プログラムを作るのはやめてくれ、小野さんが居なくなったあとフォローするやつがいない」といわれて、それで、都職労とか東水労とかは、私が定年になるのを待っていた。

東水労なんかは、コンピューター導入断固反対なんです。合理化反対でね。東京都はコンピューターの導入を早くやりたい職場で、それがあるから組合幹部も、目先が利いていたんですね、私が一番先に東水労と都職労の本部に入れました。都職も本部も入れるための委員会が検討している段階からお手伝いをして、パソコンを買うところから、動かすこと、会計ソフトを入れること、動員のプログラムを自分で作るまで。都労連、自治労、都庁職、都区連、そして都職は自治労と自治労連に分かれても両方が、そして先の東水労、清掃、病院、衛生、労働、福祉、それと北区役所と、一時は東京都の都庁でパソコンを持っていると組合のパソコンが全部私の管理下にあるような時期もありました。でも私一人じゃだめなもんですから、なるべく独立してもらうようにね。大体は、各労働組合の書記がやっていて、完全に手を離れていますが、でも、都庁職とか東水労なんかは、困った時は私のところに来るようになってます。

その他に、写真をやっているもんですから、写真のプロ作家の会がありまして、写真はうまいだろうけど経営とか経理は全くどうしようもなくて、赤字の垂れ流しみたいなところで役員やったりしています。

それから、今一番時間を取っているのは、品川の年金者組合で、機関紙の編集から印刷まで、一手にやっています。もう七年になりますよ。よくここまで続いたなあと思ってますけど、でも、これだけは、手を抜けないもんですから。実は、市川さんにだまされて入ったんですよ。それまでやっていた慶応ボーイの役員がいたんですが、あんまり威張っちゃったもんで、執行部とうまくいかなくなっていた。ある日突然に「小野さん、一つ機関紙のこと相談したいんだけど、来てくれない」と言われていったのが運のつきで、半分騙されたみたいで、パソコン出きるやつはいないし、写真出来るやついねえからつうんでね。

遠藤　日出男さん

《略歴》

一九三五年　東京都保谷町に生まれ、都立石神井高校進学
一九五四年　東京フラワー労組結成（一九五四年～六〇年同労組書記長、委員長）
一九五五年　共産党入党、保谷の細胞に所属
一九六〇年　オリエンタル機器入社（倒産して東京変速機に）
一九六三年　全金目黒地域支部書記長（この間同支部～七七年　委員長、東京地本執行委員、芝浦事務局長・同議長、目黒労協常任幹事などを歴任）
一九八〇年～全金秀工舎支部書記長・委員長

一、目黒に来るまでの経過

一目黒に来たのはいつ頃ですか？

遠藤　六〇年じゃあねえか。

一その経過は？

遠藤　保谷にいた時勤めていた東京フラワーと言う会社が倒産したんだよ。だから六〇年安保は、三多摩に居る時と目黒に来た時と跨ってるの。なぜ目黒に来たかというと、共産党の中島武敏さんが三多摩の地区委員長をやってたんだよ。そんな関係で、中島さんが「中央委員会へ来いよ」と言うんだ。中央委員会というと格好がいいんだけど、赤旗の梱包なんだったんじゃないの、その頃はイメージが悪かったんだ、専従と言うとね。いろんな悪口を聞いていたからね。「乞食と共産党の専従は、俺やる気ねえ」って言ったら、中島が怒ちゃってさ。それで、目黒のオリエンタル金属を紹介してくれたんだよ。

一遠藤さんが共産党に入ったのは何時ですか？

遠藤　五三年か四年じゃねえか。

一六全協の頃ですか？

遠藤　そうだね。五〇年党員か、二〇〇九年四月に党員証とバッチ貰った。「集まってくれ」と言うから行った。入ったのは五五年のころの保谷細胞だよ。

　ところで、俺がいた当時の保谷町は、全国でも始めて安保反対闘争の予算を組んだ。後で市長になった都丸が

町会議員をやっていてね。安保反対決議をした自治体は千幾つもあるけれど、予算を組んだのはね。たいした額ではないけど。人口が増えた頃で、都バスの払い下げを二台確保して、学校の生徒を集める仕事をして、夜になると、それに乗せてデモに行くんだよ。将棋の加藤一二三なんか安保のデモに行ったかどうか分からないけど、家族が赤旗を取ってくれた。東伏見団地と言うのはね、読者がいっぱいいたんだよ。俺だって自転車に赤旗をいっぱい積んで、宣伝して歩いたんだから。

―目黒に来て入ったオリエンタルと言うのはどのような企業でしたか？

遠藤　オリエンタルの武藤社長は、レッドパージを受けた組で、ＮＨＫでパージを受けた東京電波と同じで、みんな自分たちで作り上げた。だから目黒は中小企業同友会が出来るのが早かった。仕事で一番分かりやすいのは変速機だね。一番多かったのは井関農機の耕運機の変速機、それからスクーターのね。これはホンダかなんかに売っちゃたんだよ。従業員は五〇人ぐらいだったな。東京電波も同じくらいだったかな。多くても六〇人くらいだった。東京電波は、西山さんとか、結構、大卒の技術者がいたんだから。

―遠藤さんがいたのは東京変速機でしたよね？

遠藤　東京変速機というのはね、オリエンタル機器が倒産して、すぐに東京変速機で再建したのよ。だから、争議とか言う状況じゃなくてね。何日かの間で名前が変わったんだ。

《目黒地域支部や目黒労協の役員になる経過と活動》

―遠藤さんが来たときには、全金目黒地域支部があって、東京変速機はその分会でしたよね？

遠藤　そうだよ。地域支部が出来たときには、全日本金属と全国金属の合併に合わせて、それまであった産別金属の地域分会と東京電波、オリエンタル、自動車精工の組合が中心になって支部を立ち上げたんだよ。全国で始めての産別個人加盟でしたが、個人加盟で個人を組織してやったって言うより、この三分会が固まって出来た訳だ。財政的にも大変だった。

―安保闘争のときはどうでしたか？

遠藤　安保闘争の時は、目黒でさ、ストライキやるって言う訳よ。ストライキをやったことがないので。まあ、オリエンタルと言うのは民主経営だと言っていたからね。一時間ストライキやるから、一時間残業だって言うんだ。「ふざけんな！そんなバカなストライキなんかあるものか」と言ったんだよ。

―地区労の役員になったのは？

遠藤　地域支部からの役員は自動車精工の吉本がやってたんだよ。六三年頃に代わったんだ。

―地域支部の専従になった経過は？

遠藤　六二・三年に共産党の目黒地区委員会から要請があったんだよ。北野さんから。

―その前の専従者は？

遠藤　いなかったんじゃないかな。いや東大かなんかのがいただろう。増田さん、共産党の専従の。

―川瀬さんは？

遠藤　川瀬さんは専従じゃない。委員長をやったりなんかして、仕事をやってたから。あの人も面白い人だったけどさ。ああいう人今いないね。

それから大原社研から来たんだよ。初めて出来た地域支部で、金子健太さんも関係していたから。個人加盟はいっぱいあるけど、産業別組織ってのは一番早かったから、旬報社なども「書いてくれ」って来たよ。忙しくて、そんなの書いてる暇はないよ。一年に一〇日しか家に帰れない時があったくらいだから。争議の時なんか。あんまり自慢できないけどさ、かみさんが月に二・三回とか洗濯物を持ってきてさ。

二、地域支部の活動

その一　争議（地域支部の争議・別紙）

遠藤　本多通信機の争議ね。小西が地域支部に入っていたんだよ。公然化して、首切りの争議があったんだ。電電公社（現ＮＴＴ）の下請けのため、あとで「地域支部をやめさせてくれ」と言って電機労連へ行ったんだよ。

藤井　確か五九年、遠藤さんはまだ来ていないとき、本多通信では首切りがあったんだけど、お得意さんに電電公社があるっていうことで、当時の全電通が団交に出たら、首切りを引っ込めちゃったこともあったと聞いてるけど。

遠藤　その頃の全電通は、まだストライキをやってさ。安保闘争にも参加していたからね。目黒では石原がな。六四年の四・一七ストじゃ共産党の申し入れで、全電通分会もストを中止した。「ああしろ、こうしろ、ストライキなんか冗談じゃないよ」と声が上がった。俺なんかが言ったんだよ。だから、俺なんかも自己批判しなきゃいけねえんだけど、中央委員会の方針でやったんだから、何も俺が自己批判することはないんだよ。中止は惜しかったよ、三井金属なんかも。

―向畑分会の争議は？

遠藤　組合つぶしの首切りだよ。あそこの委員長は共産党

員だったけど、「自衛隊に行きたい」と言い出したんで、「だめだ」と言ったんだ。だけど自衛隊に入っていた人で共産党に入った人は結構いるんだよ、俺も五、六人知ってるよ。

―芙蓉分会は？

遠藤　村上がいた芙蓉の倒産争議ね。あそこは長かったから。東大の連中なんかも社屋を会議に使ってた。だけど使用料を払わないでね。俺は、共産党の関係では東大を担当してたんだけど、政治指導なんか出来ないよ。日曜版がどうなってるのかとか、昼デモでもやったらと言う程度でね。

―西村無線の争議は？

遠藤　西村無線は一人争議（栗山君）。あれ、どうしたかな元気な奴だったけど。もう一人か二人、社長宅に押し込んで、揺さぶって、門がぶっ壊れた。俺が「やれ」と言う訳じゃないけど、それで栗山が渋谷警察に捕まちゃったんだ。抗議に行ったら、おまわりがダーと並んでピストルを構えていたのよ。「大げさじゃねえか、労働争議にピストルを向けるのかよ」と言ったら、「そうじゃねえんだ、吉永小百合の家に強盗だかなんだかが入って、警戒してんだ」と言われた。

―ミニカムの場合は？

遠藤　ミニカムの場合は、独立の支部で出来ていたのが、争議になってから地域支部に入ってきたんだ。野口さんが解雇攻撃と裁判闘争を進め、後に地域支部の委員長を務めたんだ。

―山口電機、山手電機、稲田通信機の倒産争議は？

遠藤　山手電機は、組合員が少ないとこだった。山口電気というのがあったでしょ。ここは、組合員が十何名いて、全部共産党に入れたんだよ。それで争議やってね。川崎と言う女の人が委員長をやっていたんだ。これが生意気でね、地区労の専従をやった落合さんが書記長だったんだよ。争議が終わった後、社長は弁当を持って働きに出ていたんだ。延原さんのところの稲田通信、あそこは女ばかりだったからな、そんなに長い争議じゃなかったよ。相談があった六三、四年頃、女性に対する残業の強制問題で、全国的にも珍しく監督署が手入れを行ったという事件があったんだ。新聞にも出たよ。

―富士岡製作は？

遠藤　北辰電気の岡安の兄貴が委員長をやっていて、東京電波の並びで、六人くらいでやっていた。ここの争議は、相手がヤーさんで高利貸しなんだよ。大井町の有名な奴なんだよ。凄いよ。刺青をしちゃってさ、「暑いから一寸失礼するよ」って刺青を見せるんだ。普通の奴はそれで

ブルっちゃうんだ。そして、一〇〇万円包んで「普通だったら、目黒川に浮くんですよ遠藤さん」と言うんですよ。俺は、専従と言うプライドがあるから受け取らなかったよ。結局三〇〇万くらいで解決したんだ。

―東京電波の倒産争議では原電機が関係してたんですよね？

遠藤　「敵の原電気を攻めろ」と言ったら、当時、原電気の社長は、社会党の財政部長をやっていた長野選出の代議士なんだ。そしたら、全金中央の争対部長から泣きが入ちゃって、俺の所に来て「何とか話をつけて、少しづつでも金を払うようにするから勘弁してくれ」って言うんだ。それで分会と相談して「月に一〇万円でいい」って言ったかな。解決が早かったから何回にもならなかったけど。

その二　地域分会の組織と活動

―地域支部は地域分会を作りましたよね？

遠藤　俺が書記長になってからだけど、金子健太さんからの働きかけもあって、個人加盟の地域分会を全区的に作ったんだ。上目黒が八名の組合員で、中目黒が一〇名、下目黒が一〇名位、唐ケ崎が七洋電気を入れて一〇名、碑文谷も一〇名、光音は東京ダイヤも含めてね。共産党が必死になって拡大を進めたんだ。当時、地域分会だけでも一〇〇名はいたんだ。下目黒には、大東通信機の与太郎と言ってたけど、泉谷しげるが入っていた。当時の地域支部ニュースには、泉谷しげるに書かせた漫画だとかが載せてある。みんな机に入れて置いたんだけどね。

この地域分会に入っていた組合員が、東京ダイヤなどが分会を公然化して行った。また、七洋電機などのように企業別組合になっていった。岡部工具の場合は、七〇年になってからだけど、碑文谷で一〇名位が非公然の組合員になっていた。

―利根ボーリングと光音電波の場合は？

遠藤　利根ボーリングはね、下目黒地域分会に何人かいたんだ。女の子の活動家がいたんだ。彼女は地区委員かなんかになってて、全自交の組合員とだったか、結婚したんだよ。組合は、暫くして地域支部の分会としてではなく、企業内組合として結成されたんだ。

光音電波は、地域支部には入っていなかった。あそこは、地区労の前田さんが電機労連にくっつけて行ったんだ。当時は今みたいに右傾化してなくて、電機労連もまじめな組合だったからね。あそこにはしっかりした女の人がいたな。

―全金東京の執行委員になったのはその頃？

遠藤　そうだね。地本の執行委員になったのは、下丸子地

域支部の渋谷要と入れ替わった形なんだよ。
彼が議員に出ちゃう時にね。力関係から言ったら、南部はこっち（共産党）が多かったけどね。西部は向こう（社会党系）が強かった。あと東部だって、北部もね、中小が多かったから五分五分だったかな。だから東部とか西部の連中は、執行委員会のあと南部に来ちゃうんだよ。「遠ちゃんセットしといてよ」って言うんだよ。

《その頃の地区労の活動》

―その頃の地区労の状況は？

遠藤　あの頃は、地区労内の力関係が逆転する時代だったんですよ。地区労の役員に、東急が二人、全電通も二人、都職も二人いた。その外にもいたんだけど、都職の二人が役員選挙で落ちて、全逓も二人落ちて、力関係が逆転になっちゃったんだよ。全逓は社青同解放派になったんだ。

―平民共闘のことを話してください。

遠藤　平民共闘の時期は忘れたけれど、平民共闘再開だと言うんで、俺と社会党の宮本なおみとオルグで回ったんだよ。彼女が寝起きの顔をしてきたんで、「化粧ぐらいしろ」って言ったんだよ。俺はオルグのときはうるさいんだよ。東京から来たオルグの奴もモサっとしていて、国労のことばかり言ってたから、「お前帰れ」って言ったんだよ。そうしたら大人しくなったんだよ。後は俺のワンマンショウだったよ。平民共闘は大事だといって宮本なおみと二日間区内を歩いたんだよ。何時ごろだったとか、一週間単位で活動日誌をつけていたんだよ。その中に、社会党と何時に何処に回ったとか書いてあるんだよ。それには、なおみと一緒に回ったとは書いてないけど、社会党と回った、その時はまだ区議やってなかったけど、社会党代表で、来たんだ。あの頃、社会党は右左あって、大浜都議はまともな方だった。山口と言う都会議員が居たんだけど、これも良かったんだよ。西浜と言うのが右派でいたんだよ。あれは電通だよね。その活動がね、赤旗のトップ記事ではないけど一面に載ちゃったんだよ。宮本顕治なんかが評価して、記事にはなってないけどあっちこっち行って、それで社会党がぐらぐらしちゃったんだよ。

―それは何年頃ですか？

藤井　七〇年だと思うけどね。一一回大会の頃だから。

遠藤　だからこれ、目黒地区労が果たした役割は、大きかったんですよ。俺は、地域支部の専従だか、地区労の専従だかなんだか訳がわかんないようにね。川島が地区労の書記をやってたときには、地区の労組の大会の挨拶は俺がやってたんだよ。ただね、東京電気なんか、向こうのとこには行かなかった。川島なんか「今日地理庁行っ

てくれ」とか「林試行ってくれ」てんで。暇って訳ではないけど、能書き言うのが嫌いじゃなかったから。選挙の時なんか「何で俺を呼ばないんだ」と言ってね。

《遠藤氏が関与した地域支部の争議》

一九六三年　本多通信・小西氏解雇問題
一九六四年　向畑分会　分会結成に対する解雇
一九六五年　日本電気文化工業　倒産
　芙蓉電機　倒産
　西村無線　栗山氏解雇（組み合い潰し）
一九六六年　ミニカム支部　解雇、地域支部に加入
　山口電機　倒産
　山手電機　倒産
一九六七年　不二岡製作　倒産、岡安氏（全金北辰）の兄
　稲田通信　倒産
一九六七年　サンエー刺繍　首切り（分会作り）
一九七二年　東京電波工業　倒産
一九七三年　豊田電機　倒産
　七洋電機　倒産
　大光電気　倒産

その他　杉原製作所、睦工業など

橋口　博さん

《略歴》

一九三七年七月　鹿児島に生まれる。
一九五六年　上京して、新宿の町工場に住込みで就職
一九五九年九月　スタンレー電気に転職
一九六〇年七月　従組加入
九月　従組執行委員
一九六一年一月　労組書記長
一九六四年　目黒労協常任幹事
一九七〇年　目黒労協事務局長
一九七三～八八年　目黒労協副議長

一、生い立ちからスタンレーに入社するまで

一強く印象に残っていることについてお話ください。

橋口　社会的事象についてでしょう。共産党に入ったり、組合活動をやりだしてからの政治、社会問題は色々なことが記憶にあるんですが、そういった活動に入る前の印象では、政治的関心もなかったし、印象に残ったと言うことはないんです。ただね、上京してくる頃に、多少、日記みたいなものなんか書いていて、砂川闘争があって、やっぱりそういう所に「巨人になって警官隊を一蹴してみたいもんだ」と書いてんだよね。だから、全く関心がなかったとは思わない。もっと前には朝鮮戦争とか、サンフランシスコ条約、下山事件と言った問題があったんだけどね、特に深い関心持っていたんじゃなくて…

私は進学する意欲も準備もないのに、親が大学を受けろ、受けろと言うもんで、「それじゃしょうがねえ」と、出来るんだったら、入試に英語のない私立の文科系の学校があればいいと思っていたんだけど、鹿児島大学を受験したんだけど。とにかく受けて、勿論不合格で、そのままブラブラしていて、知り合いの人と一緒に農作業、日雇いみたいにして、半ば今で言えばフリーター。それで丁度、家に伯父が残していった色んな文学全集があったんです。明治、大正期の新潮社とか、改造社だとかのね。そう言ったのを時々読んでて、島崎藤村だとか、いわゆる明治・大正期に活躍した小説家のものを読んだ。経歴を読むのが好きでね、ところが、そういった文学者の経歴では、それこそ清貧の中から色んなことを志して、一定の社会的評価を得るような作家になって行く。そういう貧乏な生活に憧れちゃってね、そこから何かを掴も

うということもあって「よし、東京へ行って貧乏な生活をやろう」ってんで出てきた訳ですよ。多少やっぱり、特にどうと言ったことはないんですが、親に対して何となく反抗したいというのがあって、親に対してあてつけみたいな気持ちで東京へ出てきたんですね。

《上京、職場を転々と》

橋口　先に上京して町工場に入っていた小、中学校の時の親友がね、「俺の所に来い」と言うので、東京の新宿の町工場・三光測器に就職することにしたんですよ。その三光測器は、工場長と半ば喧嘩みたいになって辞めてしまった。それで、やっぱり同級生がアルバイトで働いていた赤坂の牛乳屋に入ったんです。で、とにかくもう一遍進学を志ざそうとして、明治神宮の近くにあった津田塾が経営していた予備校に通いだしたんです。そこもだんだん面白くなくなってブラブラ、明治神宮で昼寝ばかりしていたら、お巡りに不審尋問されたりで。丁度その時に、今の天皇が結婚式をやっていて、あそこをパレードしたんですね。それ見に行った記憶があるんです。そこも辞めて卸業の五喜田商店に入り、朝四時ごろ起きてリヤカーを自転車で引っ張って、赤坂から築地まで行って、おでんの種のロールキャベツやら、蕎麦やら色んな食料品を、銀座や品川方面に配達するのをやってたんです。

二、スタンレー電気入社と組合活動の始まり

―スタンレー電気に入社する経過は？

橋口　その頃流行りだした露出計内臓のカメラを、ヤシカも作り出した。ヤシカに入っていた同級生がいて、そのメーターを作る技術指導みたいな形でスタンレーに来ていた。その頃メーター作りは、全く手作業でやってたんですね、いわば職人みたいに。私が上京して入った新宿の散光測器がメーターを作るところだったんで、「どうしてもスタンレーに入って一緒にやってくれ」と言われ、それでスタンレーに入ったんです。それで商店に「辞める」と言ったら、すぐ「出て行け」と住み込みを追い出された。スタンレーは寮に入れてくれると思ってたら、「寮は空いていない」と言われ、それで配達に使っていた自転車に布団袋を積んで、とにかく恵比寿まで来たんですよ、行く当もなく。それで近くのチンケなアパートに行って、おばちゃんに事情を話して「敷金、礼金なしで住まわしてくれ」と言ったら、「いいよ」ということになったんです。スタンレーに入ってからも、朝は築地にアルバイトで行って飯を食い、スタンレーでは残業もして、それが終わったらヤシカへ行って不良品の修理をやってたんです。

一橋口さんが入社した頃のスタンレー電気の状況は？

橋口　丁度入った年に、木造バラックの社屋から鉄筋コンクリートへの工事中だったんです。高度成長に入った頃です。スタンレーと言うのは、自動車電球を作っている会社だから、高度成長の基幹産業としてどんどん拡大して行く、言わばその動きへの便乗会社ですね。ステム（フィラメントをつける軸）という電球を、ガラス管をガスであっためて膨らませて、それを手で取ってフィラメントや何やらを装着して封じて行く、と言うのを手作業でやっていて。ですからガラス管の熱いのを手で取るでしょう。みんな指が焦げてるんですよ。そういう会社が年々増資増資で、私が入ったときは、二千五百万円だったのが年々倍々ゲームで伸びていくんです。その頃カメラも輸出の花形産業でね。ヤシカカメラに内蔵する露出計をやりだすんですね。今みたいにデジタルじゃないですから、本当にまるっきり物理の原理に従って、磁石があって回りをコイルで巻いた枠があって、電流が流れればメーターの針が触れると言う、非常に単純なやつなんだけど、そういったやつをうんと小型にしてカメラに内蔵していく訳ですね。その仕事は、職人仕事みたいなもので。新宿の三光測器は、その露出計を作る会社だったんです。その頃スタンレーは、六〇〇人まではいかないけど、秦野工場が出来たときで六〇〇人。六一～二年に秦野に二万坪の土地を購入して工場を建てた。これは、主に自動車関係のね。

戦後すぐは、色んな物を作ったらしいけれど、そんな中にセレン整流器というのをやっていたんです。セレンを蒸着して。それが現在のＬＥＤに繋がっていくんですね。ま、とにかく急成長する時代で、平均年齢なんか二〇代そこそこだったですね。若かったですよ。

《スタンレー入社後、日ソ学院と共産党とのつながり》

橋口　それからも悶々とした生活をしてたんだ。何処だったかで「今日のソ連邦」というソ連が出していた日本向けの雑誌があったんですよ。非常に不純な動機なんだけど、そのグラビア写真が凄い美人ばかりなんですよ。「こらいいな」と思ってね、それでロシア語を勉強した。なんかロシアに関わりたくて。それで日ソ学院に行ったんです。一九六〇年だね。私は、英語はＡＢＣも分からないくらいだったんだけど、ロシア語は始めから一所懸命やって、授業についていったんだ。日ソ学院には私みたいな労働者もいるし、学生もいるし、教員もいるしその中には東大の学生や、大学院の学生もいたんです。そういう人たちは言わば左翼の人たちだったんですね。折りしも安保闘争の時期で、安保のデモに誘われたり、色ん

なことがあって。結局引きづられるようにして、その人たちとデモに行くようになっちゃって、それで全く予想もしていなかったことなんだけど、入党工作を受けたんですよ。説得したのは、ロシア語の先生と東大の人たちだった。私はその頃不整脈があって、救急車で何回か運ばれたことがあったんです。それでその話をしたら「俺がいい医者を紹介する」と東大病院の沖本という教授を紹介してくれた。診てもらったら、不整脈は神経性のもので、心室性期外収縮だった。そういう事があって、言わばそういう人たちの子分になってしまったんですね。

《共産党入党、スタンレーの組織へ》

橋口　ロシア語の先生は西尾という先生で、目黒で映画監督の家城巳代治なんかと党活動をやっていたみたいなんですよ。その人と都立農芸高校の先生だった貝川さんという人ね。この二人が推薦人で、共産党の創立記念日に入党したことにしようということでね。私は色が無い訳だから、簡単に入れるよと言っていたんだけど、暫くして「日ソ学院をやめなさい」と言うんだよ。言わば「あんたは見込みがない」と言われたみたいなもんで、「必要があったら私が教えますから」と言う。「スタンレーにはそれなりの人がいるから、その人と連絡を取るように、その人とはこちらから連絡するから」と言われた。そして、日ソ学院をやめて間もなく、ある人から呼び出しが掛かった。それが清水さんでね。それから、スタンレーの連中と安保闘争に行ったりした。清水さんを中心に学習活動とか、職場活動とかの綿密な指導を受けたんですよ。中目黒の星野と言う古本屋さんが学習会の会場で、そこへ行くと堀さんだとか、サブちゃんとかその他のメンバーがいて、私が聞いたこともない高邁な議論をするので、「これはついていけないなあ」と思ったんですけどね。春日正一の労働組合の本がテキストだったんです。

《盛り上がった安保闘争》

橋口　いや、もう誘い合って行くんですよ。職場では民青なんかも五〇名くらいになったんじゃないかな。まだ今では故人の清水さんがいた頃で、まだ私も中心にいないから、それでだれかれとなく誘って行った様な気がするよね。お巡りに写真を撮られるの、俺は怖かったけど、みんなは平気だったな。俺、引っ張りこまれそうになって本当に怖かったな。

―清水さんはどんな方ですか？

橋口　清水さんは、横浜国大経済学部卒で、学生のときからの党員でした。それがバレて、確か六〇年に日本部品工業へ配転され、そこを辞めさせられて虫プロへ行ったんです。虫プロの経営責任者みたいなことになったんだ

けど、いい加減なんで愛想をつかして生協へ行ったんです。千葉のほうの日本生活協同組合に入って、幹部をやってたんじゃないですか。

橋口　一年ぐらいは付き合ってんだよ。配転されてからも六〇年から六〇年の一二月までは会ってはいたんです。清水さんは、誠実で、頭脳明晰で。我々は、堀さん、サブちゃん含めて、自分たちがリードしてやってきたというのがないから、清水さんに頼ってやってたんですね。清水さんがいなくなってからは、代わって共産党の地区委員会の指導が入る訳です。そうなると、言ってみれば地区委員会の人の言いなりなんですよ。

《従業員組合の役員に》

橋口　その年（六〇年）の暮れに開かれたスタンレーの従業員組合の臨時大会で、執行委員に立候補して当選する訳です。この従業員組合というのは、一九五六年に結成した組合に対する第二組合で、第一組合が後に合併してきた旧第二組合ですよ。

三　運動の盛り上がりと六一春闘　そして再分裂、苦闘へ

一六一年春闘と組合再分裂の経過についてお話ください。

橋口　一九六一年の春闘時には職場の反会社派勢力がどんどん拡大していくんです。その春闘の前に労働組合への名称変更する大会が開かれ、同時に役員選挙もやったんです。その時はじめて、会社派と階級派との、役員色分けが出来上がった。私は、勿論会社派に対抗する候補として書記長に立候補して、圧倒的多数で当選した訳です。副委員長も対立候補がいたんですけど、これも階級派が当選した。その他の役員にも何人かがなったが、多数派にはならなかった。春闘は、安保闘争の余波もあってかなり盛り上がった。「組合史」にも書いてあるけど、途中で銀行の監査が来ると言うのでリボン戦術を解除したため、これに反対して職場はますます盛り上がった。執行部は、とにかくその春闘は妥結したけれど、職場の活動家集団は「認めない」と言うことで、闘争の続行を宣言する訳ですね。

《闘争続行の経過と共産党の指導》

橋口　経過はこうなんです。大きな集会、大会の前には、活動者集会と称して、天祖神社とか、上三町会事務所を埋め尽くすような参加者で対策会議をしていた。それに向けて、共産党で事前に色々な打ち合わせをやるんです。その時地区委員会の指導は、「妥結を認めるな」と言うこ

とでした。北野さんとか、高岡さんですよ。それで私は書記長だし、反対はしたものの一応妥結を決めた以上、心情的にも従わないというのは、内心ものすごく自問というか、分裂すると言うのが明瞭なんですよ。だからその会議で、闘争続行を頑なに言うもんだから、「分裂するぞ、だからやめてくれ」と盛んに主張した。そうしたら、「橋口は、会社のスパイじゃないか」ということになってしまったんですよ。地区委員会に細胞のＬＣと一緒に呼ばれて、査問委員会。堀さんなんかにも追及されたんですよ。サブちゃんもいたな。本当に足が震えたんですよ。その頃丁度、大鳥神社のところの永田という中古自転車屋で自転車を買ったんですよ。中古の自転車なんか会社から金を貰って買うほどのものではないのに、「その自転車の金は何処から出た」と言い出した。「それじゃスパイじゃないと言うことを証明しろ」と言うんですよ。「どうするんだ」と言ったら、「翌日の集会で、『私は妥結に断固反対する』と闘争を続行することをみんなの前で宣言しろ」と言うんですよ。そしてやったんですよ、「今妥結は不当である。認められない」と言う事をね。

《組合分裂と解雇問題の発生》

橋口　そうしたら間もなく分裂するんですよ。秦野工場で、「山猫ストだ」と言うのが彼らのわれわれに対する批判だったですね。秦野が分裂したら、もうその日のうちに、本社の臨時工の首切りが出た。それで、秦野で臨時の執行委員会をやって、はっきり分裂宣言をするわけですよ。反対は、私と大沢君（入党してすぐ辞めた）と言う副委員長、永沢と言う執行委員の三人だったですかね。

　それで帰ってきたら、もうその日のうちに、さらに本社の臨時工の首切り、堀さんの大阪配転、大江さんの日本部品への配転が出された。配転を拒否したら解雇、さらに分裂の騒ぎの中で暴力を振るったとの口実で、中川サブちゃんと八方さんが解雇された。たて続けにボンボンと一五、六名が首を切られた。五月の頃ですよ。それで、われわれ三人で暫定執行部を作ると宣言して、会計は第二組合員だったんで金を持っていかれてはいかんと、途中で分捕って、それからが毎日、火花の散る毎日でした。組合はその後全金に入った。

　解雇問題は臨時工が二名、本工が六名だったかな。労働委員会に救済申し立てをするんですよ。都労委では臨時工の解雇では負けるんですが、本工の方は、中労委まで行って和解するんです。暴力事件ではサブちゃんと山方さんが入っていた。山方さんは途中で降りちゃったからね。和解成立後、会社は素直に職場に戻したんですよ。前日に机もちゃんと置いて、六七年だね。

―分裂を指導した会社側の労務は？

橋口　第一回目の分裂のとき、山名と言う人が労務担当役員で入って来た。組合分裂、大量人員整理（八六名で、組合役員も含む）を断行した人物です。二回目の分裂の時に来たのが長谷川という人物。長谷川は、スタンレーに来る前、理化電機で労組攻撃を策動した人物らしい。東京支部を竹田（中央執行委員長）が、秦野支部を篠田（副委員長）が分裂させた。竹田が新産別の幹部を引っ張ってきて、「右でも左でもない組合を作ろう」と言うことでね。篠田は、その後社長にまでなったんですよ。

―橋口さんは解雇されなかったんですよね？

橋口　争議では、はじめ行商をやってたんだけど、やっぱり生活の問題があってね。首を切られなかった連中は、毎日職場に行って仕事もしているんですよ。争議団のほうは辛い思いをしたと思うよ。それで結局行商も長く続かなくてね。

こんなこともあったんですよ。一儲けしようと、スタンレーに入る前にいた食料品店で牛乳もやっていたんで、大量に仕入れて、横田基地集会に持っていって売ったんだけど、大量に売れ残ったんですよ。そしてキャップに書いてある日付も過ぎたけれど、丁度日比谷野音で集会が開かれた三池闘争の終盤の集会に持ち込んだんですよ。こっちは恥ずかしくて何も言えなかったんだけど、テキ屋の人が「俺にも売らしてくれ」と言って、あっという間に売っちゃったんですよ。

―腹をこわした人はいなかったのかな？

橋口　分かんないよ。冷蔵庫なんかないから、目黒川沿いで組合事務所があった土手のところに置いといただけなんですよ。そんなことの後で解雇者は、みんなアルバイトに行き始めるんです。堀さんは、ホンダのオートバイ販売店で、整備士なんかの色んな資格を取ったんですよ。中川さんは、東京共済病院の近くで、共産党員の人がやっていた町工場で、旋盤でネジなんかを作った。

―それまでは地区労との関係は？

橋口　安保の頃は全然ないよ。分裂・解雇が起こってからだね。行商をやるようになってからね。地区労にはその夏に入っているはずですよ。全金もね。当時は前田さんが事務局次長で、大松さんが議長でした。

四　分裂・争議の発生の中で目黒労協の活動に参加

―地区労に関係したころのことについて

橋口　組合が労協に加盟した時には、丸山事件とか、西村

無線だとか、うちの争議と地域支部の争議と重なっていた。我々の労働委員会の争いも五年続いているからね。争議団共闘があって、行商も共同でやっていましたよ。地域支部も移転と閉鎖がどんどん始まったから、ジェコーとか、自動車精工、東京変速機、オリエンタルとかね。

―丸山事件については？

橋口　あれは分裂で大騒ぎしていた六二年。それで私の所に会社を通して来たんですよ。取調べではなくって「丸山さんがここに来たことがあるか」「争議支援に来たか」と丸山さんの行動調査だったんだ。現地調査にも行ったし、容疑者が浮かび上がってきたのに、警察は動かなかった。

―サッポロの争議については覚えていますか？

橋口　臨時工の四人の解雇問題ね。福原さん、佐竹さん、菅谷さん、後は忘れたな。地区委員をやっていて、まじめな人で目黒川の方面を担当していた人よ。そういうことがあったということだけで、よく覚えていないな。

―分裂後の活動の特徴は？

橋口　清水さんがいなくなって、想像だけど、地区委員会の方は、いっそ直接指導しなければ、ということになったんではないかと。分裂した後、ここにも書いてると思うんだけど、第二組合とは対立しない、共闘してというのは、これはもう私のせめてもの分裂に対する償いだと思ってやってきた。ですから、第二組合が作られても皆が第二組合へ入っていく訳ではないんですよ。第二組合へ入らなかった人が、いっぱい居たんですよ。良心的な人たち。心情全金派というのが多かったんですね。それに支えられていたと思うんですね。それから第二組合の幹部も反共で、ワルはワルなんだけれど、いわゆるごろつきみたいなワルではなかったですね。会社も一応は付き合っていたんですね。色々差別は受けてたんですが。組合員の待遇・昇格の問題からね、組合間でもね。団交を第二組合を先にやってこっちは明け方まで待たされて、通り一遍の回答で引き下がって来ると言うね。ただ闇雲に潰してしまえと言う戦術は取らなかったみたいでね。

それで、そういう活動を続けていて第二組合も、分裂の首謀者、幹部は組合を辞めて昇格し始める訳ですよ。課長とか、部長とかね。終いには社長になった人もいた。役員になったとか。

―組合の中では？

橋口　争議団の人達も辛かったとは思うけど、表面だった対立関係はなかった。だけど職場復帰してから、ソイロ―ゼになったり、自律神経失調症とか、今で言う「うつ病」ですよ。

《命拾いした組合事務所の火事騒ぎ》

橋口　前後して申し訳ありませんが、組合の火事騒ぎがありまして、これは、首切り争議で、都労委で争った山方という労働者がいるんですけど、彼が行商用に使っていたバイクを組合事務所で修理していたんですね。石油ストーブを点けてたんで、ガソリンタンクのガソリンに引火したんですね。一挙に爆発みたいにね、私は奥にいたから慌てて飛び起きてたたき消そうとしたんだけど、服が燃え出して走り出したんだ。ところが中沢君と言う冷静な人が執行委員だったんだけど、その人が「走ちゃダメだ、転がれ！」つうんでよ。そしたらみんなが来て消してくれたんですよ。それで私は顔を火傷して、もうフランケンシュタインみたいになって、共済病院に入院したんです。

―その時の組合事務所は？

橋口　その後もずうっと川っぷちにあった小屋ですよ。焦げたんですよ、みんなペンキでごまかしたけれど。それで寮の連中が消火器を持ってきて消してくれたんですよ。ですからね。書類がみんな燃えたんですよ。

―何年のことですか？

橋口　六二年の冬だとおもうよ。ストーブを焚いていたからね。

―危なかったですね？

橋口　危なかったよ。あの事務所じゃ薪みたいなもんだから、寮の人がいたからね、消火器で消してくれたからね。病院に警察がちゃんと調べに来てね。看護婦が党員の看護婦だったんですけどね。面会謝絶にしてくれた。

五　共闘の努力と六四春闘　四・一七スト中止の四・八声明

《第二組合も巻き込む六四春闘》

橋口　一九六四年頃になると、第二組合は二代目の役員と言うことになるんですね。そういう連中に影響を与えられるようになっていたんですよ。共闘中じゃないかと言うことで、第二組合の幹部と喫茶店で打ち合わせしたりして。そういった共闘が盛り上がったのが六四年です。今でも忘れないですけど、第二組合が決起集会をやっているときに、全金は全金の組合旗をもってそこに押しかけて合流し、そこで私がものすごいアジ演説ぶって、大喝采を受けていい気になっていたんですね。それくらい共闘が盛り上がって、それがいわゆる四・一七と偶然にかち合ってしまったんですね。四・一七に歩調を合わせ

た訳ではないけど、第二組合も二四時間ストライキを構えるんです。それで「二四時間ストで戦い抜こう」なんて大見得を切るんですよ。第二組合の職場集会で。

《四・一七スト中止の四・八声明》

橋口　ところがですよ、夜になって緊急に地区委員会からお呼びがかかって「これは敵の挑発だ。断固やめろ」と言われた。私はそれでノイローゼになったですね。もう本当にあんなに悶絶したことはない。あれだけやっといてね、「ストライキ中止とはね…」。今度はストライキ破りをやるわけですよ。「俺は絶対ビラを書かない」って言ってね、断固としてビラを書かなかった。そしたら久保さんという書記長がね。これまたイラストの上手い人で、「山猫スト」なんっってね、ビラを作って翌日配るんですよ。俺は絶対配らなかったですよ。組合事務所でふて寝していたですよ。最高に辛かったですね。

それでもう第二組合との共闘はね。私は第二組合の彼らを懐柔して、統一組合まで行くんじゃないかというぐらい意気込んでいたんですよ。本当に凄かったですよ。第二組合の演説より全金の方の演説の方が拍手が多いんだもの。言ってみれば、雪崩れ込むような形で、集会を乗っ取ったような形でしたね。それが、第二組合に「スト破り」なんて言われちゃうんだからどうしようもないですよ。「それ見たことか、共産党に牛耳られている」と言う風になって行ったんですね。そういうことを知って、反共は「共産党に操られている第一組合」というのが手順だからね。それは事実を掴んでいた訳ではないんだろうけれど。反共宣伝と言うのは、何処でもあったことなんですよね、当時。そういうことがあって、共闘はどんどん難しくなっていって、一応型通りの春闘の共闘をするんですけど、「統一が先だ」と言うし、我々は「共闘が先だ」っってずうっと平行線たどって、連合発足まで行く訳ですよ。

一四・一七は労協の常任幹事になってからですか？

橋口　大会が二月だから、なっていましたよ。電通なんかも取ってたんですからね。石原さんなんかも随分頑張っていたものな。スタンレーまでね。アメリカ帝国主義が挑発するとは思えなかったけれどね。たまたまあたったのが運のツキですね。

《機械の搬出拒否闘争》

橋口　地域はね、労協の役員をやっていたけど、頭数の問題だったけれどな。印象に残ってるのは、スタンレーが秦野に工場移転するっうんで機械装置を移転するのを実力阻止したんですよ。会社にテントを張って見張ったんですね。夜トラックが来るんですよ。サブちゃんなん

か車の前に寝転がって「轢くなら轢け！」なんてね。そん時の夜中に前田禎さんが来たんですよ。時々団交には出ていて、鼾かいて寝てんですよ。その時は、テーブルの上に乗っかって胡坐をかいて、専務を前に。そんなことがあったんですよ。この問題は六三年頃です。当時組合員は、一〇〇人位はいたんですよ。それから、一旦組合員が増えるんですよ、田口だとか、福ちゃんだとかが入社した時。

一七〇年安保に向けての平民共闘の取り組みについて覚えていますか？

橋口　目黒で時の政治課題や社会保障問題などでよく集会をやった。それでは、七〇年安保闘争に向けて労協の奮闘で結成された平民共闘主催と言うのが多かったと思います。美濃部の選挙の前後からで、いわゆる社青同問題が起こる前で、最初の頃の議長は、社会党の都議の大浜さんでした。

共産党は、安保以後は共闘の活動では、主導権を取るようなことがあって、だんだん熱心じゃなくなったと記憶してます。私の感じでは、社会党が共産党に引けを取るような感じが出てきた。そして共産党が社青同を極左とレッテルを貼りだしてから、社会党と分離と言うか、色んな共闘を進めようとすると、社青同を入れるか入れないかが問題になって、共闘が上手く行かなくなった。そうなってからは、南税の兼永さんが平民共闘の議長になったんですね。だんだん萎んでいったんですよ。

一その頃目黒の平民共闘の再開について、共産党中央の宮本書記長が評価したことがありますね？

橋口　宮本発言はさっぱり覚えていません。

六、地区労役員としての活動

橋口　その頃、ちょっと活気を取り戻すんですよね。色々サークル活動とかが復活して行った。労協のことは申し訳ないけど覚えていないんですよね。三井金属とか、高砂だとかの移転が始まった気がするんですね。ですから運動としては、関根さんが書記になった頃は、まだ元気だったよな。

一七四、五年までは元気だったですよね。暫くたってから攻撃が強まった。

橋口　中立組合もね、森永とか、松下はなくなった。その後は随分移転でなくなっている。三井金属がそうだし、後は公務員関係とか、バタバタと地理院がなくなるし、林試もなくなるしな。中心組合だったからね。

一事務局長になってからは？

橋口　地区労では、あっちこっちの団交に出てね。目黒高校の近藤先生の争議とか、アロマカラーだとか、あとまあ争議ではね。

―七〇年前後で民青と組合員が増えた時期があったでしょう。

橋口　田口とか福田が入ってきた頃だったかな、一時は六〇名ぐらいになったんですよ。この時は私らの指導力の無さだね。加藤君と言って共産党にも入った活動家が居たんだけど、彼は優秀なやつだったんだけど、突然辞めちゃうんですよ、後釜が無いまま。要するに組合員、民青が増えたのを会社が黙っていなかったんだよ。集団就職で入って来た人たちで、まず親に言うんですよ。それから上司とか先輩たちがのつながりを利用して各個撃破してくるんですよ。そこら辺はテープも取ってあるんですけどね。

―春闘共闘が始まるのは？

橋口　地区委員会の指導なのかどうか判然とはしないんだけど、六七年に有馬さんが赴任してきた頃ね。有馬さんの指導にはおれも影響を受けてね。あの人が「一致する要求で、組合の違いを超えて」なんて言い出したことなんですよ。共闘が市民運動としてではなく、労働運動の中で追求されるようになったのは、とにかく盛り上がったよ。トリオだとか、パスコだとか、松下電送など軒並みに参加してきたんですよ。

―その前には労協の組織部長になっていますが？

橋口　名前だけはね。あてがわれただけだから。何かやってたんだろうね。労協の役員体制っていうのは、言って見れば、社会党の人たちの面子をたてるということで議長に、執行委員はこちらが多数派で、事務局長も握っていたからね。まあ適当に調整を図っていたんですよ。お互いに気を使ってね。社会党系のほうでは出せるところがなかったんだよ。サッポロだって中立だったからね。磯田さんも自分を出さないで、調停役に徹していたよ。

―橋口さんが七〇年の二月の大会で事務局長になって、会計が村井さんですね？

橋口　そうだったかも知れないね。もっと事務局長をやっていたような気がするんですが、二年だけだよね。それで副議長になったいきさつが何にも覚えていないんですよ。

（**注**：区職から議長として伏見前委員長と村井委員長が出ていて、伏見さんが辞めると言うので、村井さんがと言うことだったんですが、議長を社会党に渡していた経過があり、サッポロの磯田さんを推してきたので、彼が議長になるのを固辞した結果、次の大会で事務局長にな

り、橋口さんが副議長に回るということになった。）

―この頃は、加盟組合が増えているんですよ。目黒高校とか、トキワ松とか？

橋口　いろんなところの団交に出ているんですよ。トキワ松とかね。やっぱりあの頃メーデー前夜祭なんか、目黒公会堂を埋めてやってたんですよ。泉谷しげるも出ていたんだよ、毒舌でね。あいつそんなこと覚えているのかな。話してみたいもんだね。あれのとにかくイラストは立派なものだったよ。芙蓉電気の地域支部の事務所でバンドの練習をしていたよ。それでビートルズが盛んな頃で、相変わらずベランメーでね。私なんかフォークソングなんか知らなかったから、テレビで見て驚いたんだよ。メーデー前夜祭に、会社のバンドを出したんですよ。ハワイアンの人で。それに出てもらったんですよ。それが大騒ぎになってね。会社がなぜ出したって言ってね。

―スタンレーの場合は従業員に抵抗がなかったんですね？

橋口　そうそう、全金だからどうのというのはなかった。それで出てくれたんですね。

―唐ケ崎公園での盆踊りなんか覚えていますか？

橋口　二回ぐらいやったのを記憶にありますね。

―地域共闘については？

橋口　共闘が盛り上がった時期はあるんですが、「・・共闘」とか、社保協とかね。だけど、そういうのは今じゃ影も形もなくなっている。どうしてこんなに後退したのかな。

後は労協の実質的な分裂問題ですよね。どういうことが裏で取り交わされたか知らないけれど、さっぱり分からないまま今日に来ている。ただ何となく疑問と言うかね。そういう感じですから解明しようとも思わなかったし、放置している。まあ自分の労働運動とか、色んな地域共闘、共産党の活動についても情熱を失ってきている。

戦後の労働運動―品川を中心として

市川　平八
品川地区労働組合協議会
元専従オルグ団長

一九四五年（昭和二〇年）

戦後の労働運動を振り返ってみると、国際情勢からくる大きな波と、反動的な帝国主義的植民地政策に従属した、日本の保守党政権による弾圧的諸政策と、これに結びついて、『合理化』を推し進める資本家・経営者の分裂攻撃が、手を変え、品を変えて行われてきたこと、アメリカ帝国主義が、次から次へと（七〇年にはベトナム戦争を行ってきたように）新しい戦争を巻き起こして来たことがよく分かる。そして、これらによって日本の労働運動は動揺し、分裂、統一、前進、後退など様々な変遷を経てきた。

一九四五年（昭和二〇年）、日本は太平洋戦争に敗れ、無条件降伏を行い、ポツダム宣言を受諾した。こうして八月一五日から戦後が始まる。日本の労働運動も、一応公然と展開できるようになった。それ以前には、労働者が団結して、ストライキや団体交渉を行うことを、天皇の下にある権力が定めた法によって禁じていた。

当時欧米の先進国で労働運動が盛んに行われ、労働組合組織が確立されていたことは言うまでも無いことだが、世界的規模での労働組合の結集はまだなされていなかった。九月にパリで、日本・ドイツなどのファシズムを打倒するため、共同して闘った各国の労働組合が世界労連を結成し、後にアメリカの労働組合もこの結成に加わった。

一九四六年（昭和二一年）

品川では、一九四六年一月に明電舎に組合が作られている。当時の状況を東京鍛工の組合史から紹介すると、

「政府の統制が利いているうちはまだ良かった。敗戦によって生じた政治的空白は経済混乱をもたらし、喰うに

食無く、住むに家無く、働くに職の無い、いわゆるお先真っ暗の時代だった。労働者たちは、カマを作り、クワを作って、農村へ物々交換に出かけ、かろうじて飢えを凌いでいた。そこへ石井鉄工所蒲田工場の労働者が、五倍の賃上げに成功したという知らせが入った『俺たちも組合を作ろう。労働組合を作って闘う』という考えになって行った」

二月に東京鍛工（日本光学で組合が作られており、東京鍛工の組合作りには、明電舎、石井鉄工（伊藤憲一氏＝元日本共産党国会議員・大田区会議員）などの組合役員が、指導・援助している。

三月一日、政府は日本で初の労働組合法を施行した。この時から、日本の労働組合は、団体交渉権もストライキ権も法律で保障されるようになった。この頃に結成された労働組合は、経営者に対して「団体交渉権を認めること」という要求を突き付けていたものだ。この労組法が施行された後にも、「団交権を認めること」と謳った労働協約を見ることがあった。

五月一日、戦後初の第一七回メーデー式典が皇居前広場で行われた。「今日のメーデーこそ、日本に於いて、初めての大きさと、初めての自由に輝く、歴史的なメーデーである。…」とメーデー宣言は謳い上げたが、職場の仲間はこう記している。

「会社差し回しのトラックに、軍服や作業衣を着た組合員が組合旗を押し立て、専務の高唱するバンザイの声に送られて、メーデー会場へ意気揚々と乗り込んだ。ところが、会場周辺にはＭＰ（米憲兵）が辻々に立ち、入口には完全武装した米兵が、機関銃に長い弾帯を垂らして労働者を威圧していた」

このメーデーでは、次のような決議が行われている。

「保守反動政府反対、社会党を首班とする民主人民政府樹立」「戦犯を根こそぎ追放しろ」「世界労連への参加」「労働戦線の統一」「七時間労働制」「生活費を基礎とする最低賃金制」「同一労働同一賃金」

食糧難の時代にあっては、「食べ物をよこせ」ということが、労働者を結集させる統一要求であった。

メーデー直後の一九日、食料メーデーが人民広場で行われ、人民窮乏の時に天皇一族はどんな生活をしているのか、と皇居内へ押し掛けた。この時、朕はタラ腹喰っているぞ、汝、臣民飢えて死ね」とプラカードに書いたことが、不敬罪にあたるということで弾圧事件が起こされ、人民を戦争の犠牲にして、その責任を負うべき立場の天皇が、不敬罪とは何事だ、と労働者階級の怒りをかった。

この頃はまだ日本の労働戦線は、全国的な結集が図られ

ておらず、その努力が盛んに行われていた。こうした中で、品川では「労働者に加配米を出させよう」「安く食料品を共同購入しよう」などの食料要求を中心に、地域労働組合の共同闘争組織として、六月に品川地区労働組合連合会（品川労連）が結成され、全国の労働戦線統一に先駆けて、品川の労働戦線は品川労連に結集された。品川で労働組合作りが始まってから、この品川労連が結成されるまで半年しか経て居ない。まさに驚異的なスピードで、各職場・工場に組合が作られて行った。

この頃の労働組合の闘いぶりについては、「二月に賃上げ、五月に賃上げ、七月、一〇月、一二月と、ほとんど団体交渉のやりっぱなしが続いていた」との記録がある。

全国的な労働戦線統一は、幾多の努力もむなしく、八月に日本労働総同盟（総同盟）が松岡駒吉、西尾末広などを中心に結成され、前後して八月一九日、全日本産業別労働組合会議（産別会議）の結成となる。この産別会議が、世界労連に加盟する日本の代表的な労働団体となった。産別会議に加盟する金属労働者の組織＝全日本機器労働組合が、産別会議傘下の車輛、電工などの組織と統合して、全日本金属産業労働組合となった。この全日本金属産業労働組合に地域分会という組織があった。もちろん個人加盟の組織であるが、今の全国金属の地域支部のように大きな役割を果たしていたが、その存在は評価されるものになっていない。残念なことだ。

同じ八月には、資本家の結集体である「経団連」（経済団体連合会）が発足している。

また、労働陣営でも、海員、国鉄、新聞、通信、放送の各労組によるゼネスト宣言が出されるところとなった。国鉄、海員のストは、国鉄がゼネスト突入前日の九月一四日に首切り全面撤回を勝ち取り、海員も同じく一〇日に全面勝利を勝ち取った。この二つのストライキを支持応援した産別会議は、「われわれの目標は、政府の企図する産業復興政策、すなわち労働者の大量首切りによる経営合理化粉砕なのである。われわれは、吉田内閣に労働者圧殺の産業復興政策を引っ込めさせるまで、すなわち吉田反動内閣打倒の日まで、あくまで広範な共同闘争を継続しなくてはならない」と宣言したが、この方針はそのまま「首切り絶対反対」「完全雇用」「生産復興を人民の手で」「吉田クビキリ内閣打倒」などのスローガンを掲げて、五六万一千人（一三単産）の大ストライキ＝一〇月闘争へ発展していった。

こうした闘いの発展の中で、産別会議、総同盟を中心に、一二月一七日、吉田内閣打倒国民会議が開かれた。この政治デモの翌日、極東委員会（ソビエト、アメリカ、イギリス、中華民国からなる占領政策遂行のための委員会）より

労働組合一六原則が発表された。それは労働組合活動の自由と、組合員の政党支持の自由を保障する声明であった。

この頃日本の支配階級と経営者は、物資隠匿、汚職など不正の限りを尽くし、産業の復興をサボっていた。このことを摘発されるのを恐れ、占領軍を意識して、一六原則に反する行為は即時撤回して、謝罪した。これが組織労働者に莫大な勇気を与え、近隣の未組織労働者の組織化に波及するエネルギーを作り出した大きな要素であった。

この一九四六年には、東洋製缶労働組合が品川における戦後最初の長期ストライキを闘っており、闘争の中で、この頃の争議では初めて、ラジオ修理などのアルバイトをやった。この一番槍のような闘いが、その後の品川や、他の労働組合に影響を残せず、発展しなかったのはまことに残念だ。この年は、言うならば、労働者階級の組織化と職場内の民主化が、労働者と労働組合によって、破竹の勢いで行われ出した年であった。

一九四七年（昭和二三年）

一九四六年後半からの労働運動の高まりは、翌年一月に四〇〇万組合員を結集する全国労働組合共闘委員会が結成されるところまで発展した。

この力で、時の政府＝吉田自由党内閣打倒、国民生活危機突破大会（一月二八日）を三〇万労働者の結集で行い、いわゆる二・一ゼネストの決行を内外に表明した。

二・一ストは、占領軍最高司令官マッカーサーが中止命令を出し、伊井弥四郎全国労働組合共同闘争委員会議長（全闘議長）にアメリカ憲兵をつけ、有無を言わせずスト中止を放送させた。

ゼネスト中止指令が出た瞬間を、朝日新聞労組の一〇年史は次のように記している。

「われわれのスローガンは『全闘と共に』であった。…がっかりしながら便所へ行くと、論説の本多さんが小用をたしていた。私の元部長だった心安さから、『どうです情勢は』と、別に答えを期待するでもなく、挨拶代わりに言ってみた。すると『大したものだね。よくここまで組織したものだ』…論説室を右派の司令部ぐらいに考えていた私にとって、その答えは全く意外だった。『とうとう中止命令が出ました』と言うと、『大成功だね。司令部は出したくなかったんだ。それを追い詰めていったんだ』『もう退く時期ですかね』『そうですよ。きれいに旗を巻くべきですよ』私は深い感銘を覚えた。日本の経済を押しつぶしているのは誰か、それはマック司令部だ。この事を一人ひとりの胸に刻み込む闘いだ」

このゼネストに対する弾圧を契機に、日本の労働者階級の中に、アメリカ占領軍の本性を見極める人々が生まれて来た。

二・一ストは、ご破算となったが、二月中のストライキ配置は、二一一万三九二六名（労働省統計）に達し、三ヶ月にわたる二・一ストの積み上げが如何に強大であったかを物語っている。また全闘は、ここに築かれた闘争力を、労働戦線の全国的統一に転化することを決め、三月には全国労働組合連絡協議会が結成され、日本全国の労働戦線統一がなされた。しかし、この統一された力も、社会党片山内閣が発足し、国家公務員法が公布される一〇月頃から、国鉄労組内に反共連盟が結成されるなど、揺るぎ出したのも早かった。

四月には労働基準法が公布され、同月には日本経営者連盟（日経連）が発足している。五月三日に日本国憲法が施工され、その直後、七日には社会党左派が「共産党との絶縁声明」を行った。その半月後の五月二三日に片山内閣が誕生した。片山首相は、ラジオを通じて国民にこう伝えた。「私がここで諸君にお願いしたいことは、危機突破のためにそれぞれの分野に応じて、犠牲を甘受していただきたい。…」労働者にとって、片山内閣になって、良いことは一つも無かった。九月には労働省が発足している。

品川ではこの年には、加藤製作所（産別）の長期ストがある。会社は、千葉・寒川などにも工場があり、新橋に本社を置き、キャバレー「エーワン」を経営していた。組合が家族を動員して、このキャバレーのある本社へ押し掛けたりして闘った。この頃組合の強力な戦術として、生産管理闘争の是非が論じられていた。品川では菅沼タイプ、東京衡機で生産管理闘争が行われ、この闘争期間中、それぞれの工場内に品川労連の事務所が移されている。この争議の結末は、両方とも組合が明け渡して工場閉鎖となった。労働者と労働組合に闘いの経験が乏しく、理論的にも体系的にも未完成であった事が原因と思われる。

一九四七年は、一言で言うなら、政治、労働戦線に、動揺・分裂が現れた一方で、労働者階級と対決する体制が確立された年であった。この年には、分裂、暴力弾圧、「合理化」大量首切り、弾圧立法、謀略事件が次々と現れ、この年から一九六〇年までの間に、アメリカ帝国主義と日本の保守党政府、資本家・経営者が結託して行った悪行（レッドパージ、松川事件など）とその手口は、日本史上例を見ないものである。

労働組合にあって、これらの悪行の御用ストが、反共という大義名分で行われたことは、今日の日本の平和と独立と民主主義に、また労働者階級の生活と権利に、どれだけ

大きな損害を与えたか、計り知れないものがある。
まず第一に反共連盟結成に伴って、労働争議に対する弾圧が変わってきた。暴力団を先頭に、警官隊がその後に続き、労働組合のピケを暴力で破り、労働者を多数逮捕するという露骨な弾圧が、日本タイプの争議（一月）に掛けられてきた（これには生産管理闘争をやっていた東京衡機や、菅沼タイプの労働組合も応援に行っており、その支援者の中から東京衡機の青年が逮捕されたと聞いている）。
二月には、産別内に産別民主化同盟（産別民同）が現れ、六月には総同盟が全労連を脱退し、労働戦線の統一が崩れ出した。この産別民同がのちに結成される、新産別（翌年結成）と総同盟とが合同して結成された総評（日本労働組合総評議会一九五〇年結成）に、加わっていった。日本の労働戦線は、反共を旗印に完全に分断され、アメリカ帝国主義の新たな侵略戦争に組み込まれて行った。
また、二月に時期を戻すと、社会党片山内閣が一〇日に、成立以来僅か八ヶ月で倒壊している。この片山内閣の労働大臣加藤勘十によって、前年制定された公務員法は、公務員労働者からスト権を取り上げ、これに加えてアメリカ占領軍は政令二〇一号（七月三一日）で、すでに公務員関係組合との間に締結していた一切の労働協約を廃棄し、公務員の団体交渉権を奪う暴挙を政府に行わせた。公務員のスト権剥奪の処置は、対日理事会において、ソ連代表からポツダム宣言違反として訴えられ、その廃棄が勧告された。
八月、東宝撮影所の争議にはアメリカ軍が乗り出し、空・陸戦力を投じて弾圧した。
経済状況はますます悪化し、インフレと金融難の中で、企業整理という「合理化」によって、民間企業で大量首切りが行われ始めたのもこの頃である。暮も押し詰まった一二月二一日、「生活の危機突破」「産業の復興」の二つをスローガンに、五反田駅前で（第2次）吉田内閣打倒品川区民決起集会が行われている。

一九四九年（昭和二四年）

一九四九年、この年は新年早々から緊迫した空気が漂っていた。一月一三日に新憲法下での第二回目の衆議院選挙があり、吉田茂の率いる民主自由党が二六四名、議席の過半数を占め、一方共産党が四議席から一挙に三五議席に躍進した。
それに引き換え前回一四三名を当選させて第一党だった社会党は、四八の議席しか確保できなかった。
三月七日、ドッジラインが発表され、世に言うドッジ旋風（首切りの嵐）が吹き荒れるのだが、この時すでに官公

労はスト権を奪われ、定員法の枠をはめられ闘えなくなっていた。

ドッジラインとは、前年末に米政府から直接指令を受けたマッカーサーが、日本政府に実行を命令した経済九原則の具体化プランである。その趣旨は、日本の経済が果てしないインフレーションの昂進によって不安定な状況にあり、アメリカに多額の負担をかけてきたが、今後は経済の安定と自立のために、思い切った処置を取れというものであった。それまでのインフレ政策と代わって、デフレ政策がとられた。金融引き締めを基調とし、『行政機関職員定員法』によって公務員の二割余りにあたる、二六万人が行政整理されることになった。

企業整理という首切り「合理化」に反対して、産業防衛共同闘争委員会が地域共闘組織として作られ、「京浜工業地帯の煙突から煙を絶やすな！」などと言うスローガンを掲げ、南部工代会議（工場代表者会議）という労働組合代表者・活動者会議が盛んに行われていた。

インフレの中で金融が引き締められ、賃金の遅配が起こり、中小企業の労働者は深刻な状態に追い込まれた。「賃金をすぐ払え」という要求で闘争が広がった。賃上げや一時金どころでなく、今まで働いてきた賃金を取ることが、その頃の争議の原因の多くを占めていた。

品川での大企業、明電舎、三共、日本光学などが首切りを行った。三共などは、二回以上に及ぶ大量首切りを行い、職場の中から労働組合やサークルの活動家を根こそぎ解雇している。企業整備に名を借りたレッド・パージだった。これらにおける闘いに触れると、まず三共だが、品川労連が首切り撤回で断固戦うよう、ビラなどで訴えたのだが、当該組合は首切り撤回闘争に立ち上がれなかった。

明電舎はどうだったか？三共などの例から、当該組合を首切り撤回闘争に立ち上がらせる方策が検討され、品川労連の書記長が明電舎の出身で首切りの当該者だったことなどもあって、地域の労働組合の代表が集まり、明電者の首切りを撤回させるために、会社に抗議する行動として、デモをかけろということになった。約五〇名程度の各労組の代表（東京ガス荏原、東京電力小山なども参加）が、一団となって明電舎品川工場・大崎工場に突入した。会社側はびっくりし、あわてた。職場の労働者は留まっていた。労働組合幹部は、憤然として「組合に何の話も無く、突然こんなことをされては迷惑だ」と抗議してきた（この事件は、のちに明電舎が品川労連を脱退する理由の一つにもなっていたようだ）。乱暴な手段だが、この頃では、首切り「合理化」へ即時撤回闘争に立ち上がらないとか、上部団体脱退とか、共闘拒否の態度を取っていたところへ、こういうデ

モがかけられた。
朝日自動車(のちの日通自工)いすゞ大森、日本精工下丸子などが、こうしたやり玉に挙げられている。
日本光学は、激しい闘いの結果、止む無く首切りを認めた。職場の中に社長の墓が作られ、赤旗が屋上に立てられた。この赤旗を会社が降ろした、それを奪還する、会社側に一方的に放送をさせないために放送室での阻止行動を行うなど、かなり激しい行動もあった。地域の労働者が激励に押しかけ、ことに五反田自由労組は、かつての闘い(アブレをなくせ、と座り込んで闘った時、日本光学から大勢支援に駆け付けて、警官隊の弾圧を阻止した)での支援に感謝し、連帯する立場で積極的な支援動員をしていた。この頃の日本光学の経営者は、多摩川工場(現キャノンカメラ)を売ったり、工場敷地の切り売り(小野学園の大部分)などをして、資産を食い潰していた。それから一〇数年後、大船の品川製作所の工場を買うのだから、先見の明を疑われる。この経営者が、日経連の常任理事をやっていることを、付け加えておこう。
中小企業の工場閉鎖もかなりあった。日本高周波も大量首切りをやり、北品川の半分ほどを売っている。中小企業危機突破大会とか、京浜防衛品川区民大会などが行われ、区役所へ「賃金の遅払いになっている労働者に生活保護を」「失業者の住民税を免除しろ」と押し掛けたのもこの頃だ。生活保護では目立った成果はなかったが、住民税などは免除や減額になった者がかなりいた。
あちこちで大量に首切りをやったので、失業者が増えたのは言うまでも無い。今の東洋現像所あたりにあった五反田職安は、失業者でごった返していた。その頃の失業保険は、給付額が一万円で頭打ち、しかも週に二回職安に顔を出して、一回目は失業保険手帳に認定印を貰い、二回目にその週の保険金を貰うことになっていた。どこでも首切りをやっている時勢だから、求人がほとんどない。「認定日なんか必要ない」「職安が仕事を紹介できなければ、職業安定所を不安定所と書き直せ」との要求が始まった。品川労連は、この失業者の要求を取り上げ、失業者同盟の組織化とその闘争を指導した。
五反田職安はテンヤワンヤだった。玄関では要求署名を、二階への階段はアジ演説の演壇となり、二階では集団交渉が行われた。これが隣の三田職安へ飛び火して、品川から応援・指導に行った。都内一七職安でこうした闘いののろしが上がり、品川労連は、これら失業者同盟のセンターになった。東京土建労組などと共闘し、日比谷公園で失業者大会を開いて、労働省へ押し掛けた。この闘いの成果として、職安へは週一回行けば良くなったし、保険支給額は倍

増された。しかし、仕事は相変わらず無かった。失業保険の支給期限が切れる失業者をどうするか問題になり、失業者同盟や東京土建は、失業対策事業（ニコヨン）の手帳を出させ、枠を広げようという方針を出した。

品川労連は、失業者同盟とともに五反田職安に押しかけ、失業保険が切れる者は無条件で失対の手帳を出させ、今後もそうする約束を取り付けた。また、その他の失業者で希望する者には、その場で全部登録手続きをさせて、ほとんどが手帳を受け取った。

この闘いは、一定の成果を上げて、失業者同盟は役割を終わり、失対従事者の組織である五反田自由労組へ結集するという、品川労連の方針と指導で解散した。今日、失業保険給付の取り扱いが悪くなってきているが、この失業者同盟の闘いが物語るように、まず失業者自身が闘うこと、労働組合がこの闘いを支持し、共闘する体制が必要なのだ。

問題をまたドッジラインに戻すが、議会を無修正で通過したドッジの「均衡予算」の特徴は何だったのか？

赤字をなくすための支出の削減、第一に公務員の首切り、第二に失業対策費を前年の一〇〇分の一切り捨て、第三に六三制実施に基づく校舎建設費用の全面的削除だった。そして、収入の増大を図る為の、鉄道・郵便・健康保険料の値上げ、徴税の徹底、これによって国税だけで一七二三億円に達する大増収を図った。融資にあたっては、軍需基礎産業や国鉄その他の基幹産業に、占領軍の思い通り集中融資するという仕組みだった。この予算を通して、日本は自立どころか、アメリカの軍事政策に完全に従属する結果となった。

二月一九日、東芝に現れた六二九〇名首切りは、九原則による資本攻勢のハシリだった。政府は労働者の反撃を抑えるべく、それには共産党への弾圧が焦眉の急であった。

四月一日、国会開催中にも拘わらず、国会に諮ることなく、問答無用のポツダム政令で団体等規制令を公布した。これは「暴力主義的方法を是認するような傾向を、助長もしくは正当化する」団体及び個人を、処罰するよう規定したものだった。

官庁の人員整理のための定員や、労働法規の改悪案が国会に提出され、また全国の都市に集団示威行進取り締まりのための公安条例を出して、労働者の反撃に備えた。

定員法が国会で可決された五月三〇日の夜、東京都議会に都公安条例が提出する気配を見せた。夜の都庁は反対の声で埋まり、警官隊が動員された。やがて、警官隊が群衆の中へ割って入り、激しいもみ合いの内に、一人の労働者（橋本金二君）が突き落とされ死亡した。都議会はついに公安条例を出すことなく閉会となったが、虐殺に憤激した

労働者は、翌五月三一日に抗議集会を開いた。これも警官隊に弾圧され、ますます闘争の火の手は燃え上がった。

六月二日早朝、橋本君の所属した東交柳島支部の副支部長大塚正二さんは「橋本君の家族の事を思うとじっとしておれない」と毛布をかぶって車庫前のレールの上に横たわってしまった。柳島車庫の都電は、進駐軍用を除いて直ちに止まり、続いて目黒・広尾両支部もストライキに入った。当局は、直ちに幹部を馘首したが、東交本部もまたこれらのスト指導者を除名してしまった。本部から指導を拒否された東交のこれらの支部は、自力で、そして他産業労組の支援のもとに闘い続けた。当局が運輸会社のトラックを雇って、乗客の輸送を企てた時、東京貨物労働組合は直ちにこれを中止させた。

都電のストライキは六日間続いた。ところが、火の手は更に国電へ飛んだ。定員法の実施で人員が減るために作成した新交番制を、当局が強圧的に実施命令を発したのに憤激して、三鷹・中野・蒲田・東神奈川の電車区・車掌区が、一斉に乗車を拒否した。こうした中で一〇日、「人民電車」が歓呼の中を走った。一一日には総司令部の命令により、国電は走り始めた。同日、皇居前広場で五・三〇事件人民決起大会が、橋本金二君の遺影を掲げて行われた。

六月一五日、民自党の幹事長広川弘弾は、「共産党は八〜九月暴力革命を企てている」と語って、注目を浴びた。今にして思えば、この発言はドッジラインの進行に伴って社会情勢が緊迫化し、労働攻勢の高まりに対し、政府の取るべき方策が定まった事を意味したものだった。同日、日本製鋼広島製作所の争議に警官隊が出動し、争議団を排除、公務執行妨害で逮捕者が出た。続いて、東芝加茂工場で一四一名を検挙し、一九日にはわかもと製薬東京工場で、団体交渉を要求する組合幹部を、不法監禁容疑で逮捕した。

こうした警察官の実力行使が続く中で起こったのが、六月三〇日の平事件だった。それは、共産党の掲示板の撤去を不法であるとして警察署に押しかけた人々が、たまたま降り出したにわか雨のために、署内に雨宿りしただけの事なのだが、福島地検・最高検察所が「暴力革命の実地演習」であると、ラジオや新聞を通じて大々的に宣伝した。

七月四日に国鉄の第一次首切り三万七百名が発表されると、翌五日に下山事件が起き、政府はすぐに、「これは国鉄労働者がやったんだ」というデマを、陰で流し始めた。同月一三日に第二次首切り六万二千名が発表されると、翌々一五日には三鷹事件が起きる。吉田内閣は、すぐ「共産党は虚偽とテロを常套手段にして、大衆の社会不安を煽っている。人員整理は、日本再建の基礎である」という声明を出した。

東芝で数千人の首切りが発表された。八月一六日に、福島県の東芝松川工場で国鉄労働者と共闘していた東芝の仲間が、首切り反対の決議をした。翌一七日に松川事件が起こり、これらの事件は共産党がやったことだと宣伝され、共産党員が多数逮捕された。

このことは、労働組合の戦闘的な活動家や、共産党員を職場で孤立させ、労働組合の力を弱め、活動範囲を縮小・規制し、「合理化」大量首切りを容易にしようと、戦争への道を突進するアメリカ帝国主義が仕組んだ謀略事件だった。しかし、悲しいことには、組合内部に反共連盟や民主化同盟なる集団が現れ、この集団の動きが、客観的には謀略の成果を大きくし、反撃を遅らせた。

この年の六月に、品川労連会館（現品川労協事務所）が建築されている。その頃は建築材料、ガラスなどが統制品となっており、自由に購入できなかった。そういう条件の中で、労働者が一人四〇円のカンパ（一万円前後の月収だった）で戦争の焼土の上に建築した。付近は、焼けトタンのバラックがちらほらあった程度だった。都内の地区労の中で、自力で事務所を建設したのは、他になかった。

一九五〇年（昭和二五年）

一九五〇年、レッドパージが行われた頃は、品川では大きなレッドパージ反対闘争は起きなかった。なぜなら、前述のように、品川の大企業ではほとんどの活動家が、大量首切りで整理されてしまっていたからだ。レッドパージで特筆することは、国鉄大井工場で山岸一章氏が首切り撤回を要求して（組合はレッドパージは止むを得ないと認めていた）煙突に登って訴えた。彼がその時、煙突の上で作った詩が「民族独立行動隊のうた」になっている。歌と言えば、この民族独立行動隊の他に、大和電機（海岸地区にあった小工場で、産別金属の分会があった）の林氏が「原爆を許すまじ」を作っている。

品川労連がレッドパージに対して、執行委員会声明を出している。その内容は、「アメリカの一軍人が指令したことで、何の責任を負うことのない組合員が、理由なく解雇されることは不当であり、品川労連はこれを認める訳には行かない」と言うもので、多くの労働者が戦闘性を失っている時に、断固対決する態度を表明し、地区内労働者を激励した。

この頃は、時の軍司令官に公開質問状を出しただけで、占領政策違反として七年の重労働を課せられるのだから、この品川労連の声明は勇気のある、立派なものだった。この時の品川労連の執行委員長は、海岸地区のオオタ自動車

出身の野本氏で、この人はのちに全自動車労組（日産が分裂する前）の副執行委員長、総評常任幹事を務めた。オオタ自動車が倒産の時、会社での地位が課長に昇進していたので、会社更生法担当の課長として活躍して、東急くろがねと合併の際に退職している。

レッドパージ反対闘争の段階で、品川の労働戦線も決定的に分裂している。大企業の労組では、明電舎、東京電力、東京ガスなどが品川労連を脱退し、公務員関係では都職建設関係、都教組が抜け、東交も去って行った。

企業整理の大量首切りと真正面から取り組まずに闘わなかったところは、そのほとんどが脱退し、レッドパージ反対闘争の段階で脱退するところもかなりあり、三万名と称する品川労連も、一万名に減少した。もちろん総同盟系は、かなり早いうち、すなわち総同盟が全労連脱退と同じ頃抜けて行った。

また、品川労連に加盟していない組合もかなりあった。専売労組、国鉄労組の支部・分会、都職の品川支部（区役所）などがそうだ。したがって、関東金属（正しくは総同盟全金同盟関東金属労働組合、のちに総評全国金属となり、産別全日本金属産業労組と統一し、今日に至る）に加盟すると、品川労連から脱退する現象が生じた。産別を脱退し、全国金属に加盟しながら品川労連を脱退しなかったのは、加藤製作所だけだった。

品川労連を脱退した組合と加盟していなかった組合が、品川共闘（品川地区労働組合共闘会議）を結成した。品川労連が中小企業の単独労組や、日本光学のような中立組合が中心になっていたのに対し、品川共闘は大企業・公営企業が中心だったが、組織された組合数、人員に於いても品川労連より少なかった。また、品川共闘は圧倒的に総評系が多く、支持政党は社会党一党支持を明確にしていた。もちろん、「共産党とは一線を画す」としていた。

レッドパージ以降は、労働組合でも共産党の代表に挨拶すらさせないところが多かったが、品川労連は政党支持の自由、政治活動の活発化を原則とし、共産党の代表を招請することはもちろん、共産党からの申し入れ事項についても執行委員会で検討し、内容によっては受諾することもあった。

後に品川労連と品川共闘が統一する時、政党との関係については品川労連が最後まで持続し、作り上げた品川の労働運動が受け継がれることになった。

一九五一年（昭和二六年）

品川労連は、朝鮮戦争に反対し、ベルリン・アピール（日

独再軍備反対、五大国平和条約締結運動決議）ストックホルムアピール（原爆禁止運動決議）を支持し、全面講和（第二次世界大戦で日本が敗れた全ての相手勝利国と同時に平和条約を結ぶこと）を主張し、破防法、スト規制法、労働三法改悪反対を掲げ、一九五一年、五二年を闘った。

一九五一年のメーデーでは明電舎の講堂で開かれた工代会議において、「中央統一会場でメーデーができなくとも、南部の労働者は第二三回メーデーを実施しよう」との品川労連の提唱が決議され、区内の労働戦線も分断されていて、また総評がメーデー開催を放棄した中でも、南部の労働者は、統一して第二三回メーデー行事を、大森駅東口前広場で決行した。

一九五二年（昭和二七年）

五二年の第二三回メーデーは、統一メーデーとして神宮外苑で中央メーデー式典が行われた。この時、「人民広場へ行こう」という声が参加者の中に多く、中部地区コース、南部地区コースの参加者から、多くの人が人民広場へ入った。この集団に対して、警官隊が襲いかかり、いわゆる「血のメーデー」と言われる、メーデー事件が引き起こされた。

品川労連に加盟する組合の中から、日本光学、五反田自労、藤倉ゴム、明治ゴムなどで多数の逮捕者が出た。このうちから起訴され、一年以上も未決で拘置され、一七年余の裁判の結果、無罪を勝ち取った人が、五反田自労土岐委員長他二名がいる。

組合事務所を捜索されたところは、これらの組合の他に、三和鉄軌などがあった。警察の不当な弾圧が、メーデー事件の真相だ。

品川労連執行委員会は、この事件をどう判断するかの討議を重ねた上で、「人が人民広場に入り、あるいは周辺に集まり、こうした中での警官隊の挑発と弾圧がこの事件を引き起こした」との結論に達した。

問題が少し前に戻るが、レッドパージが民間企業に広がる頃、大田区下丸子にある三菱重工下丸子工場で、朝鮮戦争遂行のジープ・兵器を作っていた。この三菱下丸子のパージ反対で、南部の労働者が激励に集まった。工場へ入る三菱の労働者に、ビラを渡し激励しようとする労働者が、毎日、道の両側にぎっしり二百メートルも並んだ。これを弾圧する警官隊と、攻防戦が展開され、警官の武器・服装の一部が紛失して、下ブさらいをする騒ぎもあった。夜になって池上警察署付近では、「逮捕者を返せ」と抗議団が押し掛け、警官隊と衝突が起きた。

一九五三年（昭和二八年）

一九五三年、朝鮮戦争が休戦した。前年一二月、全繊同盟、海員、日法労、全映演の四単産が、総評批判を発表している。いわゆる四単産声明があった。総評の足を引っ張るグループだ。

一方、産別会議の全印刷出版が解散し、産別会議を脱退し、全印総連に統一合併された。産別会議は、医協と全日本金属の二単産のみとなった。

日通が春闘で、七二時間ストに初めて突入したのもこの年だった。

第四次吉田内閣が不信任され、国会が解散、スト規制法が審議未了となった。しかし、四月の衆院選挙で自由党が第一党となり、第五次吉田内閣が成立した。この吉田内閣が、再度スト規制法の上程を行った。総評加盟の組合は、七月にスト規制法反対のストライキを第三波まで行った。しかし、八月五日、国会でスト規制法は成立した。

戦後日本の基地反対闘争の発火点となった内灘基地反対闘争の続く中、六月に試射が強行された。

一一月には日鋼赤羽で、首切り反対ストのピケ隊が警官隊と衝突したり、松川事件の控訴審で、死刑四、無期二の判決が出されたのもこの年だ。

朝鮮戦争休戦という平和とは逆に、国内の反動化と、「合理化」が、露骨に行われ始めてきた。この休戦によって戦争ブームが下火となり、日米ＭＳＡ協定（ヒモ付投資）が行われ、金融引き締めが行われた。

一九五四年（昭和二九年）

一九五四年は首切り「合理化」が激しく行われ、なべ底景気と言われる不況状態となった。

この年は、帰休制度が中小企業政策として、政府から提案された。これを日本気化器と京浜ギアが実施し、「東京で初利用二題」などと商業新聞で宣伝されるという、あまり名誉でない話があった。と言うのは、当時の労働運動スローガンに、「帰休制度反対」が上がっていたからだ。

この年は、三・一ビキニ被災、日鋼室蘭の史上有名な闘争が、前年一二月に起きて闘われていたし、日産自動車の工場閉鎖反対闘争、近江絹糸の人権闘争の闘い、そして民主教育を破壊する、教育二法案が成立する。そして、総評から脱落した単産が中心になって、全労会議を結成し、分裂の細分化・固定化が進み、日本の労働運動を右傾化・御用化する役割を担う組織ができた。日産自動車では、御用分子が組合を分裂して闘争を敗北させ、上部団体であった

全日本自動車産業労働組合（総評加盟）が本部まで担保に入れて作った闘争資金を返却できず、これが原因で全自動車は本部会館を処分し、のちに解散したのもこの年だった。

品川にはこの全自動車の下部組織で、分会になっていたところが、日本気化器、オオタ自動車、日本ギア工業、神谷プレスなどがあった。この全自動車が、日本の労働運動の中で一時期果たした役割は、史上評価される大きなものがあった。それは全自動車が中立単産として、組織的に弱小傾向にあった産別会議などや、他の中立単産と賃上げ闘争で共闘したり、総評へも働きかけ、連携する役割を果たしたことである。破防法反対闘争、サンフランシスコ講和会議反対闘争などを盛り上げてきた。この組織を破壊した日産の御用分子は、労働運動史上に消すことのできない罪状を残した。その後、この御用分子によって作られた自動車労連が、労働者階級にとって良い役割を果たす訳がないことは、この時から明らかだった。この争議は、分裂後の日産の中で、徹底的ないやがらせと弾圧で闘う組織に残る者は激減する状態をたどり、ついに御用組合だけの存在となった。その後の経過は、プリンス自動車を統合する時の手口が全てを立証している。

前述のように全自動車は、大きな役割を果たしながら、解散する前、すなわち日産闘争の時は、すでに総評に加盟していた。この全自動車解散まで、日本気化器、オオタ自動車は、東京支部、後に京浜支部という段階で、支部専従役員を派遣していた分会だった。

一九五五年（昭和三〇年）～一九五六年（昭和三一年）

一九五五年から翌年にかけて、砂川基地拡張反対闘争が弾圧され、激化した。この闘争に品川労連からも、現地への泊り込み動員、日帰り動員が数多く行われた。日帰り動員では、大田労連と共同で観光バスをチャーターするなど、品川区内だけでない闘い方をした。もちろん砂川へは、全都・全国的な規模で支援する人々が集まってきた。地元の家へ宿泊し、地元反対同盟とも共闘した。この闘いが、日本の基地反対闘争を盛り上げる契機となった。

この闘いによって、社会党、共産党を中心に、労働組合、民主団体、地元反対同盟と団結して行動する、統一戦線が組まれるようになった。

この頃、品川区内でオオタ自動車の倒産（過剰設備投資が原因）園池製作所の倒産（社長の一億円の背任横領が原因）高砂鉄工の倒産―これに伴う大崎工場の一部（主とし

て暖房機関係）の閉鎖・縮小が起きた。

この三つの倒産は、すべて会社更生法の適応を裁判所に申請する結果となり、当該組合はもちろん、品川労連も初めて更生法の闘いに直面した。共闘会議を開いたり、学習会を行ったり、まさに泥縄式の闘い方も止むなしだった。日本の労働運動が新しく直面した、問題だからである。他の地域でも会社更生法と直面するところもあり、全国金属でも会社更生法問題共闘会議を開いたり、「会社更生法との闘い」などのパンフレットを出したりしていた。オオタ自動車は、「東急くろがね」に合併し、大多数の労働者は解雇された。園池製作所は、一五〇名程度（約三分の一）が解雇になっている。これらの管財人は、オオタ自動車が日本交通、園池が第一物産（三菱系）だった。この更生法との闘いで、高砂鉄工の大崎ロール工場は残され、暖房関係は切り捨てになったが、労働者が退職金を出資する形で、「高砂暖房機」という会社を起こし、高砂鉄工から暖房部門の工場を借りる契約をして、「労働者の団結」で職場を守った。今日の高砂暖房がその会社なのだ。

園池の場合は、また異なった闘いの経過がある。園池製作所の労働組合が全国金属に加盟し、品川労連に加盟するまでに、結成されてから七年経っていた。同労組の闘う体制が強化される頃、会社は（背任横領のハシリのような事があったのか？）資金繰りが悪く、賃金の遅払いなどが起きるようになっていた。組合は、会社との労働協約の平和条項によって、ストライキができないと考えていた。しかし、品川労連の指摘で、この条項がすでに失効していることを知り、闘いを決意するや、会社側は工場閉鎖をかけてきた。ロックアウトは、それぞれどこからか合い鍵を持って来て、難なく工場に入ってしまい、会社の権威は失墜した。

園池労働組合が、門外不出の御用組合と言われていた汚名を返上し、闘う組合として台頭するまでには、職場の活動家集団（同志会）の三年以上に及ぶ苦闘があった。同志会は、非公然で機関紙「火ばな」を発行し、闘いの方向を打ち出していた。ロッカーや便所に「火ばな」が置かれ、会社や組合幹部が発行元や配布ルートを懸命になって探したが、組合の体質が変わるまで知ることができなかった。同組合は、そののちに全階・全職場に通じる有線放送設備を持ち、各職場に壁新聞を作り、組合機関紙が週刊で出されるようなった。そして、松川守る会（平和と公正裁判を守る会）が作られるまでに、大きく変わっていった。この頃、松川事件を取り上げて、組織的に活動し、職場に守る会を作った組合は品川区内でも他になかった。

日鋼室蘭の闘争で、青年行動隊が全国に支援を訴えに歩

いた。この時、青年行動隊が品川労連にも訪れ、「この品川は民族独立行動隊の歌の発祥地と聞いている。是非その南部金属労働者の闘う姿を見たいし、交流したい」と申し入れてきた。彼らの期待に応えられるのは、その頃は園池製作所の労働者しかいなかった。日鋼室蘭の青年行動隊オルグと園池の青年行動隊との交流は、闘うものにとって言い表すことのできない感激を持った、素晴らしいものであった。この園池にソビエトから通商代表団が工場を見に来た時、労働組合は正門から工場入口まで、赤旗と人のアーチで歓迎した。会社がびっくりしたそうだ。この闘う園池が、更生法に直面した段階では、なぜ敗れたかである。五〇余名の活動家と、これを絶対的に支持する一〇〇名の組合員、合わせて一六〇名。これに対して分裂行動を取る集団が極秘のうちに作られて、高輪あたりで会合したことも確認された。いわゆる中間層は、保身もあって「首切り止むなし」という態度であった。労働委員会の斡旋案という大義名分が、これを容易にしていった。

以上が組合の最終的態度を決定する大会で、首切り賛成票として現れた中味だ。二〜三年の間に闘う組合になったが、活動家と支持者を多くするためには、歳月（時間）がもっと必要だった。しかしその後、園池製作所の労働組合は、全国金属を脱退して新産別に加盟するのに三年もかかっている。三分の二の賛成票がどうしても取れなかった。大量の活動家の首切りは、更生法と組合内部の弱点応用でやれたが、闘うことを知った労働者を抑え込むことが、容易でないことを示したものと言えよう。品川の労働者は、この三つの会社更生法の闘いを通じて、新しい経験を集積した。

小糸製作所（全国金属）の分裂は、職場の中で単位労組が分裂するという、品川では初めての経験であった。小糸製作所の労働組合は、かつて企業連合体であった頃、品川工場労組は品川労連に加盟していたが、レッドパージ直前に企業整備の名目で大量首切りが出され、これに反対するよう訴えた品川労連を、首切りを承認する大会で脱退することを決めている。一口に言えば、強い組合ではなかった。それがその後、職場の活動家が増加して全国金属に加盟し、戦闘的な組合になり、品川共闘会議にも参加していた。分裂のきっかけは、賃上げ闘争で一六三三円で妥結するかどうかをめぐって、事務職・職制などの組合員が主として妥協を主張し、組合は少数差で闘い続ける事を決定した。この時から、第二組合結成の準備が進められた。闘いが長く続いたので、組合は日曜日にハイキングを企画した。この留守の間に工場閉鎖が行われ、工場内に仮設の塀が作られ、組合員が工場へ立入りできないようにされた。この仕事を、

会社出入りの運送屋と作業の下請けを自民党区議の美濃部健介がやっている。同労組は、組合員が激減する中で、この闘争を集約する事になった。責任追及として三役の解雇が出され、以後解雇反対、差別待遇反対の苦闘が始まった。

品川共闘会議は、区内の大組合と言われる国鉄大井、明電舎、専売品川、東交品川などが中心に組織されているので、民間中小労組の闘いには不慣れだった。そのため小糸の闘いも、丸二製作所の首切り反対闘争も、それぞれの職場の活動家たちの中に批判的な意見があったが、無理もないことだ。この種の闘争は、品川共闘だけでなく、日本の労働組合を代表する総評自体に指導性が持てなかったし、臨時工対策や中小企業対策方針として確立されたのは、後の事である。こうした闘いの経験と集積を持っていたのは、区内ではやはり品川労連だった。

品川労連はその頃、六〇組合七〇〇〇名の組織だったが、品川共闘が二〇組合六〇〇〇名と数字が示す通り、組織内容が異なっていた。

品川労連と品川共闘の間に統一の方向が生じたのは、次のようなきっかけだった。品川燃料の下請けで、日本興業という運送会社の争議を、品川共闘と品川労連が協力して支援した。この組合は、品川燃料労組が組織化の相談に応じ、品川労連と協力して組織化に乗り出したら、品川共闘役員の弟さんがいることから、品川共闘に加盟した。こんな経過もあって、品川労連と品川共闘の間に、共闘の機会を通じて、統一の基盤が作られていった。

品川労連執行委員長の市川福平氏（加藤製作所大崎工場出身）が産別会議議長に就任し、産別会議解散残務処理を行うので、品川労連執行委員長を辞任された。時を同じくして、品川共闘と品川労連の間に統一懇談会が開かれ、統一の準備会が持たれた。こうした中で、一九五六年年末は、越年闘争共闘会議が設置され、品川労連本部を越年闘争共闘会議の事務所とした。この越年闘争で、品川地区の労働戦線は、完全に統一の方向を固めた。

一九五七年（昭和三二年）

一九五七年三月一日、品川労連五九組合、品川共闘一九組合、中立だった東電などが若干参加して、品川地区労働組合協議会が結成された。この結成によって当然、品川労連、品川共闘は各々解散をした。これに至るまでの統一準備の段階で、一番問題になったのは、政党支持と政治活動の事だった。

品川労連は、政党支持・政治活動の自由を原則として、革新政党の支持を表明する組織だった。これに比べ品川共

闘会議は、社会党一党支持だった。これが品川労連の伝統を受け入れる形態で統一されるまでには、かなりの議論があった事は当然だ。このことが表しているように、労働者階級の戦線統一、労働組合の組織統一は、この方向で、この方針でこそ統一できるのだ。まさに、品川における労働運動の新しい一ページを飾った。品川労協が取り組んだ大きな統一戦線の事業としては、第三回原水禁世界大会を前にして、品川原水協の結成に成功したことである。

この年は、自民党鳩山内閣から石橋内閣に代わって、「一億円減税」「神武景気」と囃し立てながら、米価と運賃の値上げ、社会保険改悪が、国民皆保険の名のもとに出されていた時である。そして、職場の中に「生産性向上運動」が持ち込まれ、ヒューマンリレーションなどと言う、今まで聞いたことも無いようなアメリカ直輸入の労務政策が、次々と出されてきたのもこの頃である。

原水禁運動の事に戻るが、品川には労働組合と民主団体が組織している実行委員会と、官製の反対運動協議会があった。官製の方は、運動を進めるためと言うことで、組織体にはなっていなかった。品川労協は、品川区議会の革新政党議員団と協力して、七月二六日、品川区役所（旧庁舎）講堂で、品川区原水爆禁止協議会の結成に成功し、品川区議会事務局に事務所を置き、区から補助金を出させることに成功した。もちろんこの組織は、日本原水協に所属することを規約で定めている。

品川労協が結成されて直面した組織攻撃は、一〇月の田野井製作所労組の分裂、組合幹部活動家の首切りと不当処分だった。この闘いでは、分裂後数日にして、二〇〇人の組合員が約五分の一に減ってしまった。とは言っても、組織を解散し、分裂組織へ合流する方向を認めたのが、大きな失策だった。首切りは、労働委員会で和解が成立し、委員長能川氏が退職、副委員長菊田氏が現職に復帰した。しかしこの問題は、再び攻撃を受け、復職した菊田氏と活動していた活動家が首切りに直面し、この時点で組合を結成し、全国金属に所属して、闘いに立ち上がった。

同じ頃（六月）陸王モーターサイクルで企業再建案として、組合員一七〇名中一二〇名、三分の二の首切りが出された。この闘いでは、全金東京地本と品川労協、陸王支部で共闘会議を構成して対処した。会社が東京地裁に出した立入り禁止仮処分申請に抗議し、組合の既得権を認めさせ、首切り反対総決起大会を開催するなど、活発な活動をした。しかし陸王のオートバイは、市場から消える一途であり、再建の見通しがなく、六〇日の闘いは都労委の斡旋案で集約した。そして残留の七〇名の組合員も、立川の中島飛行機への合併について行けず、退職した者もあった。

今から思えば、日本の二輪車メーカーの市場競争に一番早く敗れたのが、のれんの古い陸王だったとも言える。陸王の下請けから独立したメグロが、この数年後に同じ運命をたどる要素が、この頃から始まったと言えよう。

一九五八年（昭和三三年）

一九五八年の歴史的闘いと言えば、何といっても警職法反対闘争だ。品川労協第三回定期大会は、警職法改悪反対区民総決起大会を成功させることと、この反対闘争の共闘会議を結成して闘う方針を決定した。

一一月四日の区民決起集会は、労働組合だけで五五組合、六千名以上が結集し、品川公会堂前広場は提灯で埋め尽くされ、広場からはみ出した参加者は、大井町駅東口にまで広がり、空前の大集会となった。警職法反対のストライキは、二四時間ストのエスヤ製作（後の関東ガス器具）をはじめ、時限ストを行ったところが三五組合あった。急速に盛り上がった全国的な反対闘争の勢いに屈し、岸内閣は一一月二五日に予定された全国的な大統一行動を前に、強行を断念した。

警職法反対闘争を闘ったこの共闘会議が、翌一九五九年七月三日に、安保改悪阻止品川共闘会議へと改組された。これが安保改定阻止闘争の中で、いわゆる平民共闘と言われる、「平和と民主主義をまもる品川地区共闘会議」（品川平民共闘）となったわけだ。

品川の労働運動で、職場組織が直接分裂攻撃をかけられたのは、小糸製作、田野井製作だったが、園池製作でも前述のように、分裂の危機に直面している。これに対処した各々の組合が総括しているが、上部単産の指導が決定的な役割を果たすことはもちろんだが、地域組織の指導的な役割が重大なことを物語っている。小糸の場合、労働戦線全体が未熟な事もあったが、上部全金と地域品川共闘会議の欠陥でもあった。

田野井の場合は、品川労協が結成されたばかりとは言え、後退的な誤りがあったと結果論であるが言えよう。これらの経験が積み重ねられ、以後の分裂の闘いでは、確信を持ってやれるところまで、品川の労働運動は強くなって行った。

一九五九年（昭和三四年）

一九五九年、即ち六〇年安保改定反対闘争の飛躍的発展というか、運動が爆発したのがこの年であり、この闘いの高まりの中で、全国金属品川地域支部が結成されて行った。

この年は、品川の労働運動だけでなく、日本中の労働運動が躍進した年である。特に、東京都内の中小企業労組の闘いが、それこそ血みどろの様相を呈し、暴力・刑事弾圧が加えられ、これを跳ね返して、長期的な強靭な闘いが随所で展開された。

全金田原製作所で、組合員のピケに警官隊が襲いかかって、ピケの労働者を圧死させた事件をはじめ、エスエス製薬で暴力団によるピケ破り、メトロ交通への暴力団介入、どんな少数の労働組合でも闘う労働組合には、徹底的に暴力弾圧や刑事弾圧をかけられたのもこの年であった。けれども多くの組合が、これらの弾圧に耐えて頑張り抜き、何らかの成果を上げている。このため敵は、これらの闘いを通じて戦術の変更を図り、以降は分裂攻撃を主として巧妙に、時としては過酷なまでに、攻撃するようになった。

品川区内で二月に工隆舎の首切り反対闘争があり、全金目黒製作をはじめ、地域の労働組合がこの闘いを支援し、泊り込みで闘争参加したが、これが泊り込みで支援する習慣ができるきっかけになったようだ。

この年の職場の闘いで、品川だけでなく、時の権力や情勢に大きな影響と関連を持っていた闘争が帝全交通とニュー東京観光バスの闘いである。品川労協も全組織力を投入して、これらの闘争を支援し、勝利させている。帝全交通では、この闘いのさなかに組織分裂が起こされたが、断固として頑張り抜き、一年余にわたる長期ストを持って勝利した。このことで、分裂すると闘いが挫折、あるいは敗退するという従来の概念を完全に粉砕した。

この二つの闘いが、どのような経過と背景を持っていたか、少し述べることにする。

帝全交通は、六月の夏期一時金闘争で一時金の解決と引き換えに、組合の団交権と争議権を規制し、営業収益の大幅引き上げ協力、労働協約の改悪と言う条件を出してきた。これは明らかに、組合つぶしにかかって来ていると判断された。それを裏付けるように、東旅協（資本家・経営者団体）から会社に、第一回陣中見舞いとして七五万円が送られてきた。帝全の会社側は団交の席上で、都自協はメトロ労組を、東旅協は帝全交通を抹殺するのが、当面の目的であると公言した。

なぜ帝全交通の経営者が、組合に挑発的な闘いを仕掛けてきたか、この四条件を組合が承認する訳がないことも、百も承知でやってきたか、その理由はこうだ。帝全交通労組が一九五九年春闘で、会社側が出した労働協約改悪案を完全に粉砕しただけでなく、配車責任者を組合が握っている有利な条件を活かし、同業労組の闘争犠牲者を採用させたり、闘争組合の資金源となるように、臨時運転手を意識

的に闘争組合から迎えていた。メトロ交通労組の闘争資金の一部も、帝全交通で作られていた。メトロ交通が京都へ向かうキャラバン闘争をやって、マスコミで名を知られた闘いの背後に、帝全の地味な闘いがあった。五〇名の組合員だった帝全交通労組は、上部単産の全自交東京地連に二名の専従者を送り出している有力な組合だった。

会社側は、組合を分裂させ車庫の新築移転を機会に、組合を完全に粉砕するつもりだったが、そうはいかなかった。全自交の仲間と、品川労協を中心とした地域の労働者と、がっちりした支援共闘が組まれ、品川労協はかつて行った事のない4ヶ月連続の支援カンパに取り組み、ニュー東京と組み合わせての泊り込み動員も組織的に行われた。分裂攻撃もやったし、車庫移転も利用してみたが、会社側はこの団結と支援体制を破ることができず、ピケの組合幹部にホースで水をかけて挑発し、刑事弾圧を画策した。大井警察に不当な逮捕をされた組合員の釈放要求と抗議行動を展開して、これも完全に失敗させた。組合は、一年以上(三七〇日)にわたり全車両を抑えて闘い抜き、敵の意図を完全に封殺し、闘いを優位な立場で終結させる事ができた。

この一年余の闘いの中で、六〇年安保闘争に取り組んだ。そのことが帝全交通の闘いそのものを支える力になった事は、述べるまでもない。帝全労組では、当時労協執行委員だったE組合員を、地域オルグとして、闘争状況の訴えのため地域活動に専従させていたほか、職場も安保反対の請願地域デモの集合場所になったりしていた。

ニュー東京観光バス労組の闘いは、一人の労働者の停年制問題を、職場全体の問題としてストライキにまで発展させたものである。事の起こりは、親会社(山口県防長バス)から出向している労働者に対し、会社側から一方的に就業規則を改悪して停年の引き下げと、これに基づく解雇を通告したことにある。もちろん、職場全体に関係する問題ではあった。停年引き下げとともに、傷病保険(従来、私傷病でも賃金が百%支払われていた)の打ち切りが出されていた。八月二六日、組合が二四時間ストライキを打つと、会社側はこれに対して無期限のロックアウトを宣言し、これが原因で一〇月三日までの五〇日に及ぶ闘いが続けられた。親会社は、山口県に本社を構え(時の内閣総理大臣岸信介、佐藤栄作蔵相、この兄弟の出身地・選挙地盤である)、会社の重役に佐藤栄作の秘書をやった者もいるという、時の権力に密着した背景のある会社だった。

組合は、観光バスの運転手、ガイド(車掌)修理の技工で構成され、結成されて間がなかっただけに、闘争資金などはほとんどなかった。この会社側と闘って勝利するのには、徹底的に支援体制を強化しなければならなかった。会

社側は、本社（銀座三原橋ビル）へ団交に行った組合員は女子が多いということで見くびり、小規模ではあったが追い出そうと暴力行為を行った。この頃、三原橋本社の並びに、エスエス労組がエスエス製薬本社にある組合事務所を確保するため、縄ばしごをかけて頑張っていたので、ニュー東京本社へ抗議に行ったり、ビラ貼りに行ったりするたびに、相互激励をしていた。ニュー東京バス労組は、全自交東京地連（当時は関東同盟と言った）に加盟しており、この上部単産と品川労協、社会党品川支部、共産党品川地区委員会とで支援共闘会議が作られ、これに支えられて闘った。

八月二四日の支援共闘会議が主催した決起集会には、一三〇〇人も集まり、ニュー東京観光バスの駐車場は超満員となり、道路にもあふれたので、組合員がお得意のホイッスルを鳴らして交通整理をする有様で、時ならぬ大集会に東大井一丁目の住人はびっくりしていた。労働組合が会社側のロックアウトに対抗する戦術として、全車両を占拠して車庫にピケを張った。

この時期の情勢としては、エスエス、主婦と生活、メトロ交通など、一連の暴力弾圧、ピケ破りなどがあったので、支援共闘ではニュー東京観光バスへ毎日五〇名の支援泊り込み動員体制を取っていた。この動員がほとんど続けられていたのだから、支援体制は大変な規模だった。

支援共闘の全自交、品川労協の担当オルグと役員は欠かさず泊り込み、共産党・社会党のオルグ役員までが常駐し、何時如何なる時でも支援共闘会議が開かれ、対策と処置が取れる体制になっていた。気候的には夏という泊り込みには好条件であったこと、また占拠した二〇輌からの車輌が、そのまま宿舎や控室に使うことができたことで支援体制を確保できた。

組合員は、毎晩本社へのビラ貼り、毎日集会や闘争の訴えと、資金カンパ集めに懸命に活動した。この他、この闘いの中でガイド（車掌）の深夜乗務の問題、乗務員の時間外勤務の算定基礎を労働省や労働基準局へ訴え、全観光バス乗務員労働者の共通課題を要求し、社会問題にまで発展させた。このため、労働省、労働基準局が実態調査に乗り出し、ついにガイド（女子車掌）の深夜乗務が禁止となった。観光地等で待機する時間は、車輌・荷物の監視作業を行っているので、運転手・車掌の各々半分が最低勤務時間とすべき、と観光バス会社に勧告した。これまではほとんどの会社がバラバラな取扱い方で、全体としてはこの基準以下であった。

六〇年安保の前年であり、東京都内の中小企業労組の闘争が激化して長期化し、暴力・刑事弾圧が加えられている

中で、積極的な闘いをしたニュー東京観光バスの闘いは、都労委が取り上げ、労使双方に解決の努力をするよう申し入れてきた。これを契機に、都労委の場で解決の方向が出され、停年引き下げは撤回され、傷病保障は「公」が百%、「私」が六〇%となり集約した。もちろん解決金一〇万円が支払われている。

この闘いで毎日支援に集まってくる労働者の中に、全金品川地域支部の仲間もいて、市金製作所分会結成の段取りが相談され、市金分会が発足したのもこの闘いの中だった。

松川事件が、全国的な規模で支援され、組織的に取り組まれたのもこの頃で、品川松対協が結成され、松川事件無罪要求大行進が行われ、大田の六郷土手から日比谷まで、闘争中のニュー東京観光バスの組合員が参加している。品川安保共闘会議がこの大行進に、安保共闘として参加を決定している。

安保共闘が取り組んだ事件に、エリコン落下（七月二一日）に対する抗議行動があった。品川埠頭にエリコン（ロケット弾）の胴体が、五〇m上空のヘリコプターから落下された。翌日、早速に総評、全日自労、品川労協が抗議を行い、安保共闘が改めて、防衛庁、都港湾局、労働局へ抗議を行った。

この年の九月、勤務評定に反対する日教組の闘いがあった。九月八日には全国一斉に半日で授業を打ち切り、各行政単位の教育委員会団交が行われた。品川では安保改定阻止共闘会議が、午後二時から品川公会堂で「安保体制打破、勤務政策反対品川地区大会」を行い、品川小学校までのデモに一〇〇〇名が参加し、区教育委員会で団交中の都教組品川支部を激励している。この勤評闘争の責任追及として、後日都教組品川支部役員が逮捕され、組合事務所が捜索されるほか、多数の組合員が警察に呼び出されるなどの弾圧が行われた。そして、この裁判が一〇年後の今日、最高裁で無罪の判決を勝ち取るまで続いたのだ。この勤評闘争の九月八日が、安保改定阻止第六次統一行動の日でもあった。

この年は地方選挙も行われ、都知事選には有田八郎氏が革新候補として再度の出馬となった。品川労協が、この知事選の品川選挙事務所として活躍したことは言うまでも無い。選挙の結果は、品川地区では八万票を取り保守を圧倒したが、全体では惜しくも敗れた。しかし、前回より大きく前進し、統一候補で闘うなら次回は勝利する事が明確になった。また、安保闘争に結集する力が大きくなることを立証したのが、この都知事選であった。

問題が多少前へ戻るが、全金品川地域支部浜井製作所分会が結成されたのが、前述の田野井製作に二度目の首切りと出勤停止という処分が出されて、闘いに入った二月一〇

日頃だった。浜井分会の公然化では、会社側が組合事務所、組合掲示板などを認めようとせず、紛糾した。また、これらの要求と引き換えに、「会社と組合の意見が一致しない時には、直ちに争議に入ることなく、必ず第三者の斡旋を受ける」ことを認めさせようとしたため、二四時間のストライキを行い、目黒製作、昭和機械などの全金各支部・分会の支援を受け、会社側の出していた条件を撤回させた上、前記の要求を勝ち取った。

田野井の首切り・不当処分反対闘争は、前回の事もあるので、全金東京地本と品川労協が動員して、積極的な支援をして闘った。工場の内と外での水のかけ合い、宣伝カーと会社放送施設との怒鳴り合い、門を挟んでの押し合いがあり、工場の門が倒れた。工場側は、門外の組合員と支援の労働者を追い払おうとし、組合側は門前で頑張り、闘いを訴え続けた。この問題は、裁判所と労働委員会に闘いが移された。しかし、品川労協が区内のあらゆるところにビラを貼ったので、会社側は課長まで動員して、「ビラが貼ってあるのを見つけたらはがせ」と命令し、ビラはがし用の熊手まで持たせていた。

労協が組織的にビラ貼り行動を開始すると、会社のパトロール隊が発見し、車・オートバイなどを駆使して、機動性を発揮しながら、ビラはがしを行った。しかし、労組の組織的な戦術には、会社はかなり閉口したらしく、しまいにはビラをはがさず、ビラに印刷してある社名のところをビニール塗料で塗るだけとなり、それも一時期のように即日とはいかず、対応が遅くなっていた。田野井の労務部長は、現社長の義父で、元大井警察署長の田国といった大変な男だった。この闘いの途中で、卒中で倒れて後日亡くなったと聞いている。この田国氏の後に就任した労務部長が、この首切り問題を和解に運んだ。田野井の七人の侍がこれだけ闘えたのも、高揚した労働者階級が、大きな力で支援したからだろう。

この年の一一月八日、安保反対国会請願デモに集まった労働者をはじめとする民主勢力の一団が、これらの人たちを国会へ近付けぬようにした警官隊のピケを破って、国会玄関前へなだれ込む有史以来の出来事が起き、反安保闘争は爆発的に燃え上がった。言うならば、これまでの職場を基礎にした粘り強い闘いの集積が、この導火線によって爆発したのだ。「安保は職場の闘いとは結びつかない」とか、やれ「安保はいらない」とこぼしていた日和見幹部の度肝を抜いた闘いだった。この闘いが、翌年の六〇年安保闘争へと発展した。

この頃から労働組合が他階級の要求を取り上げ、職場の諸要求と政治課題とを結合して闘わなければ、要求が実現

できないことが明らかになり、またそのように実践されて来ていた。

それから、労働組合が地域住民に訴えるビラの戸別投入や、戸別訪問で署名を集めるなどをやるようになったのも、この頃からである。

ニュー東京観光バス労組の闘争支援に積極的に参加していた組合の一つに、全自交の三交労組があった。この組合は、丸山委員長が先頭になって支援に来ていた組合だった。丸山委員長は、当該のニュー東京の人たちはもちろん、同じ支援に来ていた多くの人たちからも親しまれていた。この丸山委員長が後日、会社側の回し者とおぼしき暴漢に、自宅付近（川崎市）の路上で、連れていた自分の子供（当時三才）の目前で刺殺された。ニュー東京の闘いに共に参加し、丸山氏とスクラムを組み、また共に語り合った多くの人々とともに、この労働運動で倒れた丸山氏に追悼の意を表し、この章を終わる。

一九七〇年著（二〇一三年一部訂正）

「私が歩んだ労働組合運動」
品川・目黒の活動家の聞き取り報告第一集
二〇一三年八月一日発行
「私が歩んだ労働組合運動編集員会」発行
目黒区鷹番三―一―一石田ビル三〇二号
印刷　トーホーオフセット印刷株式会社